
白騎士リリカルなのは

白騎士君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白騎士リリカルなのは

【Nコード】

N9529Q

【作者名】

白騎士君

【あらすじ】

ドグマ戦記に終止符を討ったレナード達。レナードはアークを元の場所に戻すことにした。しかし、レナードの旅いや物語は、終わっていないかった。これは、始まりにすぎなかった。

これは赤夜叉さんから許可を貰い『銀魂×魔法少女リリカルなのは魔法少女と銀色の侍』をベースにした白騎士物語のクロスオーバー小説です。赤夜叉さんの小説を元に行っている内容が似ている所や似てない所があります。もし見てくれる人がいたら嬉しいですよ

無印編 第一話 新たな物語（前書き）

レナード「この小説は赤夜叉さんから許可を貰い『銀魂×魔法少女リリカルなのは 魔法少女と銀色の侍』をベースにした小説です。赤夜叉さんの小説を元に行っているので内容が似ている所や似てない所がありますが見てくれる人がいたら嬉しいです。それより作者この二つの作品のクロスオーバー無謀があるぞ！」

作者「……………」『白騎士リリカルなのは』始まります」

レナード「無視した!？」

無印編 第一話 新たな物語

地下宝物庫

そこに一人の少年がいた。

レナード「お前の役目も終ったか」

彼はレナード。ドグマ戦記に終止符を打ち世界を救った英雄であり、この物語の主人公である。

そして、レナードは一旦足を止め白騎士のアークを見た。

レナード「お前と出会って色々な事あったな」

レナードは白騎士のアークを見て色々な出来事を思い浮かべた。

自分の出産の秘密。

仲間達の出会い。

白騎士との出会い。

そして、彼は一旦思い浮かぶのを止めアークを元の場所へ戻そうとした瞬間。

ピカーー

っと、突然アークが光りだす。

レナード「なっ、なんだ!？」

レナードは驚き、光はレナードを包み込む。

レナード「うっ、うわあああああ!！」

だんだん光は治まり、そこにはもうレナードの姿はなかった。

レナード「んっん」

ゆっくり瞼を開けてレナードは目を覚ました。

レナード「ん？」

上半身を起こす。周りを見渡した。見知らぬ場所。そして空は暗く月が出ていた。

レナード「ここは、どこだ？」

無印編 第一話 新たな物語（後書き）

レナード「作者、今回の話短いしグダグダだったぞ」

作者「すみません。次はグダグダにならないように頑張ります」

レナード「・・・なあ、作者他の仲間は出ないのか？」

作者「無印編はまだ出ませんA S編では二人出ますS t r i k e r
S編では全員&アバターと他の作品が出ます」

レナード「ちよつと待て他の作品ってなんだ！」

作者「次回『白騎士リリカルなのは』第二話「出会い」次回も見て
くださいテイクオフ」

レナード「だから無視するな!!」

第二話 出会い（前書き）

作者「この小説のレナードは精霊、神聖魔法や片手剣のスキルが全
て使え、レナードの使う剣はエクスカリバーになっております。無
印編では、まだ二刀の構えは覚えていません」

レナード「『リリカルなのは』のキャラが登場する第二話！始まり
ます！」

第二話 出会い

???「アルフ。あの人誰なんだろうね？」

突然、屋上に現れたレナードを空から見下ろしながら金髪の少女が隣にいる『アルフ』という人物に話し掛ける。

アルフ「さあ？管理局の魔導師……………なのかな？」

アルフは首を傾げた。

アルフ「…………何かおかしい恰好をしているね。管理局の魔導師にはみえない」

二人はレナードの恰好をみた。見た目からして魔導師には見えない。バリアジャケットを着てないし、杖も持っていない。

アルフ「どうするフェイト？」

『フェイト』と呼ばれた金髪の少女は手に持つ杖を強く握った。

フェイト「捕まえよう。あの人には悪いけど」

アルフ「わかった。次元転移による魔力は全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」

フェイト「うん。アルフもね」

アルフにそう返して、フェイトは手に持つてる杖『バルディッシュ』

を起動させる。

フェイト「私が初撃で誘導するから、アルフは捕縛用のバインドで捕まえて」

アルフ「了解！」

レナードは屋上の真ん中辺り立っていた。

レナード「はあ．．．ここは一体どこだ。さっきまで城の地下にいたのにこんな見知らぬ場所にいるし、それに朝だったのにもう夜になっているし」

レナードは顔を俯かせて呟く。

レナード「ここで野宿すると、持ち物は．．．一応お金や薬が入っているからだいじょうぶか」

レナードは自分の持ち物を確認していた。今入っているのは、ハイエリクサー×2、五十万G、剣、そして白騎士のアークだけだった。

フェイトとアルフが上空からレナードに迫る。

フェイト（ごめんなさい）

心の中で謝りながらフェイトはレナードに向かって数発の黄色い魔力弾を放った。

レナード「!!」

レナードが魔力弾の光に気付く。そしてレナードは腰に差してある剣『エクスカリバー』を抜き、素早く振って自身に迫る魔力弾を全て弾いた。

フェイト「えっ!?!」

魔力弾を放ったフェイトは驚いた。

アルフ「たああああ!!」

レナードの後ろからアルフが殴りかかる。レナードはアルフに気付いて体捻って拳をかわす。そのまま勢いをつけてレナードは剣をアルフの顔目掛けて振る。

フェイト「アルフ!!」

フェイトが急いでアルフの元へ向かおうとすると、レナードは顔に当たる直前で剣を止めた。

フェイト・アルフ「!?!」

フェイトとアルフ驚いて動きを止める。

レナード「終わりだ」

そう言つてレナードは剣を腰に差した。

目の前のアルフは口を開けてポカンとしてる。

レナード「こっちは戦う意思も無いのになんでいきなり襲つて来たんだ!!」

レナードは二人に怒鳴つた。

フェイトはアルフの隣に着地する。

フェイト「大丈夫アルフ?」

アルフ「う・・・うん大丈夫だよフェイト」

フェイト「貴方は管理局の人間ですか?」

バルディッシュを構えて警戒しながらレナードに問う。

レナード「管理局？何だそれは？」

フエイト「え？」

レナードの返事にフエイトは思わず警戒を緩めた。

レナード（この子達の着ている服装は変わっているな）

フエイト達の恰好を見てレナードは思った。フエイトは黒いマントを羽織って、アルフは獣の耳と尻尾が生えている。

レナード「そっちの人は犬の飾りか？」

アルフ「犬じゃない！あたしは狼だ！！」

レナードの言葉にアルフが声を上げた。

レナード「いや、どう見たって犬だろ」

アルフ「ちがう！！」

フエイト「アルフ落ち着いて！」

フエイトがアルフを落ち着かせようとする。

フエイト「あ．．．あの」

レナード「ん？」

フエイト「本当に管理局の人間じゃないんですか？」

フェイト「じゃあ貴方は気がついたら此処にいたんですね？」

レナード「ああ」

レナードはフェイトとアルフに事情を説明した。

アルフ「フェイト。コイツ『次元漂流者』かもしれないね」

レナード「『次元漂流者』？」

アルフの言葉にレナードは片眉を上げた。

フェイト「簡単に言えば迷子です。未開の世界から何か拍子で別の世界に飛ばされた人間の事です」

とフェイトが答えた。

レナード「・・・別の世界？」

レナードは屋上の端に行って街を見渡した。

レナード「そういえばバランドールと微妙に違うな・・・」

建物の形などがバランドールの建物と少し違うし、お城も無い。それに街を歩いてる人をよく見ると他の種族が一人もいない。

レナード（そういえば此処に来てなんだか体が軽くなったような気がする）

レナードは白騎士になるたびに体に負担を与えていた。しかし、此処に来て体が軽くなったらしい。

レナード「なあ地図を持ってないか？」

フェイト「地図？」

レナード「ああ」

言われてフェイトはレナードに地図を渡した。レナードは渡された地図を見ると、そこには知らない文字や地名ばかりが書いてあった。

レナード「ははは．．．本当に別の世界へ来たんだ」

レナードは力無く笑った。

フェイト「あの．．．大丈夫ですか？」

心配になったフェイトがレナードに声をかけた。

レナード「あ．．．ああ。大丈夫だ」

レナードは地図をフェイトに返した。

フエイト「あの．．．貴方はこれからどうするんですか？」

レナード「あ．．．これからどうしよう」

レナードはこれからどうするか決まっていなかった。

フエイトあの．．．」

レナード「ん？」

フエイト「私達の家でよければ泊まっていますか？」

と、フエイトがレナードに提案した。

レナード「えっ？いいのか？」

フエイト「はい。いいよねアルフ？」

フエイトは隣にいるアルフを見た。

アルフ「まあ、フエイトがいいならいいけど。それにコイツ悪いやつには見えないし」

アルフもフエイトに同意する。

レナード「いいのか？素性も知らない人にそんな簡単に家に泊めても」

フエイト「はい。アルフも言ったけど、貴方は悪い人には見えませ

んあから」

フェイトは完全に警戒を解いてバルディッシュをしまった。

レナード「そうか。なら少し世話になるよ。あつ、そういえば自己紹介がまだだったな」

レナードはフェイト達に向き直る。

レナード「俺はレナード。元の世界じゃ騎士をやっていた」

フェイト「私はフェイト。フェイト・テストロッサ」

アルフ「あたしはアルフ」

フェイト達も自己紹介する。

レナード「ああよろしく頼むフェイト。アルフ」

レナードは笑顔で二人に言った。

フェイト「は．．．はい」

フェイトは少し顔を赤くして頷いた。

アルフ「よろしく」

アルフは笑顔で返事をした。

第二話 出会い（後書き）

作者「投稿が遅れてすみません」

レナード「感想・評価、待っています」

フェイト「次回、『白騎士リリカルなのは』第三話「一日の終わり」
テイクオフ」

第三話 一日の終わり（前書き）

レナード「こんな駄作者ですが、感想、評価を待っています」

作者「駄文がありましたら教えてください」

フェイト「第三話始まります」

第三話 一日の終わり

レナード「へえ〜!」

レナードはフェイト達が住んでいるマンションを見上げて声を上げた。

この辺りで一番高い高級マンションである。

レナード「スゴイな。本当にここに住んでいるのか?」

フェイトとアルフが中に入ってレナードも後続く。ちなみにアルフの狼の耳と尻尾はなくなっている。

レナード（耳と尻尾は隠せるのか）

アルフを見ながらレナードは思った。エレベーターに乗って上に上がる。

エレベーターを出て少し歩いて部屋の前に到着した。鍵を開けて部屋の中に入る。

レナード「いい眺めだな」

夜景を眺めながらレナードが言った。フェイトとアルフはソファ―に座る。

レナード「こんな広い部屋で二人だけで住んでいるのか?家族はいないのか?」

レナードもソファアに座りながらフェイト達にそんな事を聞く。

フェイト・アルフ「……………」

レナードの問いにアルフとフェイトは悲しそうな目をして顔を俯く。

レナード「ご、ごめん……………聞いちゃまずかったか」

フェイト達の雰囲気思わず謝る。

フェイト「いえ、大丈夫です。気にしないで下さい」

レナード「そ、そうか……………なあ、フェイト一つ質問していいか？」

フェイト「はい」

レナード「君は何者なんだ？見たこともない技を使っていたけど」

と、レナードはフェイトに質問した。

フェイト「私は魔導師です」

レナード「やっぱり、魔導師だったか」

フェイト「レナード！魔導師を知っているの？」

フェイトは驚いて立ち上がってしまった。

レナード「ああ、俺の世界でも魔導師がいるけどフェイトみたいな魔導師じゃないんだ」

レナードの世界でも魔導師はいるがフェイトみたいに空を飛んだり足元に魔方陣が出る事はない。

しかも、杖は木ではなく機械できており、デバイスと言って人工知能がある。

フェイト「それじゃ、説明はいらないね」

レナード「それじゃ、アルフも魔導師なのか？」

レナードは目線をフェイトからアルフに移した。

アルフ「違うよ。あたしはフェイトの『使い魔』さ」

胸を張ってアルフが答えた。

レナード「使い魔って何だ？」

アルフ「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物さ」

レナード「使い魔か．．．ということはフェイトはスゴイ魔導師なんだな」

フェイト「そ．．．そんな事ないよ」

レナードの言葉にフェイトは顔を赤くする。

フェイトの隣にいるアルフはニコニコ笑いながら尻尾を振っている。
フェイトが褒められて嬉しいのだろう。

フェイト「あ．．．あの。今度は私から聞いてもいいですか？」

遠慮がちにフェイトが言う。

レナード「別にいいぞ」

フェイト「レナードは何者なの？」

レナード「俺か？俺は普通の人間だ」

アルフ「でもよ。フェイトの魔力弾は弾くし、あたしの攻撃もかわして反撃しとうとしたし。本当に何者だい？」

二人とも魔導師でもないのに自分達の攻撃を防いだレナードに興味を持ったようだ。

レナード「俺の世界はモンスターがいてその中には凶暴なモンスターがいるんだ。だから、俺は凶暴なモンスターに会った時のために剣術を習ったんだ」

レナードの世界ではモンスターがウヨウヨ行って外に出るのは危険なので剣術を習った。

レナードは自分の世界を説明した。

バルンドール王国のこと。

他の種族のことを説明した。

アルフ「あんたの世界は結構面白いね」

アルフは面白そうに笑う。

フェイト「アルフ！笑いことじゃないでしょ」

レナード「いいよ。気にしてないから。それに犬の耳と尻尾を持っている奴の方が面白いけど」

アルフ「あたいは狼だ！」

レナード「わかったわかった」

適当に聞き流しながらレナードはそう答える。

しかし、レナードは一つだけフェイト達に説明してない物があるそれはシンナイト。

シンナイトは古代イシュレニア帝国が作り出した戦闘兵器であるレナードはシンナイトだけフェイト達に説明をしなかった。

アルフ「ねえ、フェイト。そろそろ夕食にしない？」

と、アルフが言った。

フェイト「あっそうだね」

フェイトが立ち上がる。

フェイトとアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

アルフ「それじゃあ食べようかフェイト」

フェイト「うん。いただきます」

とフェイトが食べようとした時。

レナード「ちょっと待て」

フェイト「え？」

レナードがフェイトを止めた。

レナード「フェイト。アルフこれは何だ？」

レナードはテーブルの上を見た。

フェイト「何って夕食だけど・・・」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

レナード「お前らバカか!!」

アルフ・フェイト「えっ!?!」

レナードの勢いに圧されてフェイトとアルフは体を大きく震わせた。

レナード「子供がこんなの物ばかり食べて、ちゃんとしたご飯を食べないでどーするんだ」

レナードは怒りの形相で二人に怒鳴った。

フェイト「あの・・・えっと・・・ごめんなさい・・・」

レナードの迫力に圧されてフェイトは戸惑いながら謝った。

レナード「それからアルフ!」

レナードはアルフを指差した。

レナード「お前は何を食おうとしているんだ!?!」

アルフ「何って・・・」

アルフは手に持つてゐる箱をレナードに見せる。

アルフ「ドッグフードだけど」

レナード「やっぱり犬じゃないか!?!」

アルフ「違う!狼だ!」

アルフが怒鳴り返す。

レナード「ドッグフード片手に持って言っても説得力がないんだ！
！普通、狼は生肉を食べるんだろ！なんで、ドッグフード食ってるんだ！！」

レナードは息を切らしながら叫んだ。

アルフ「あゝレナード・・・大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

レナードしょうがない。俺が作るか」

そう言つてレナードは台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

レナード「！！！」

冷蔵庫の中を見てレナードは絶句した。

アルフ「今度はどうしたんだいレナード？」

アルフが歩いてきた。

レナード「冷蔵庫の中が空じゃないーかああああ！！！」

再びレナードが叫んだ。

結局、レナード達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

レナード「ご飯は明日から食材を買って、俺が作るか」

ソファアに座ってレナードはため息を付く。

アルフ「なんか悪いねえレナード」

レナード「俺は部屋に泊めてもらってるんだ。それぐらいしないと
な」

フェイト「ありがとうレナード」

フェイトがレナードに礼を言う。

レナード「礼なんていらないよ」

アルフ「素直じゃないね」

アルフはレナードを見てニヤニヤ笑う。

レナード「ドッグフード抜きにするぞ」

レナードは背伸びをした。

第三話 一日の終わり（後書き）

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

作者「今回から始まる『レナード先生コーナー』は読者の質問に答えるコーナーだ」

レナード「おい！なんだレナード先生って、完全に銀魂の『銀八先生』のパクリじゃないか。しかもこの作品に登場しない銀八先生がいるし」

作者「先生繋がりだから銀八先生を呼びました」

レナード「いいのかよ」

銀八「まあ、よろしくたのむはデザート先生」

レナード「誰がデザートだ！レナードだ！！」

作者「では銀八先生、次回予告をお願いします」

銀八「はあい、次回『白騎士リリカルなのは』第四話「約束」次回も見ろよテイクオフ」

作者「質問を待っています。」

レナード「大丈夫かなこの質問コーナーは？」

第四話 約束（前書き）

銀八「えゝ無印編にはまだレナードの仲間は登場しません。理由は『レナード先生コーナー』でお答えします」

レナード「こんな、駄作者ですみません。第四話始まります」

第四話 約束

翌朝。

遠見市にある高級マンション。フェイト達が泊まってるマンションだ。

アルフ「フェイト。やっぱりレナードは連れて行かないのかい？」

フェイトとアルフは起きて朝食の準備をしている。食材はまだ買っていないので朝食もインスタント料理だ。

フェイト「うん。無関係のレナードを巻き込むわけにはいかないから」

そう言ってフェイトは視線をソファアに向けた。

ソファアには寝ているレナードの姿があった。

アルフ「そうだけど・・・レナードってけっこう強そうだよ？人手は一人でも多い方が・・・」

フェイト「ダメだよアルフ」

アルフ「う・・・」

フェイトに言われてアルフは諦めて席に着いた。

フェイトはソファアで寝てるレナードに近寄る。

フェイト「レナード。朝だよ」

フェイトが声をかける。

レナード「んゝもう朝か」

っと、起きるレナード。

レナード「二人で出掛ける？」

朝食を食べてる最中にフェイトが話を切り出した。

フェイト「うん」

レナード「何しに行くんだ？」

食べながらレナードはフェイトに尋ねた。

フェイト「ちょっと探し物を・・・」

レナード「探し物か・・・」

レナードは顎に手に当てて考えた。フェイトとアルフは牛乳を飲んでいる。

レナード「もしかして願いが叶う物だったり・・・」

フェイト・アルフ「ブーツ!!?」

レナードの言葉を聞いたフェイトとアルフは盛大に牛乳を吹いた。

レナード「どうした!？」

驚くレナード。

フェイトとアルフはテーブルを拭きながら落ち着かせる。

アルフ「な・・・なんでわかったんだい!？」

レナード「あつ、やっぱりそうなんだ。冗談のつもりで言ったんだけど」

フェイト「レナード・・・『ジュエルシード』を知ってるの？」

フェイトがレナードに尋ねた。

レナード「樹液ミート?何だそれは？」

レナードは首を傾げた。

フェイト「あの・・・ジュエルシードなんですけど・・・」

レナード「わかった。で?それが願いを叶える道具みたいな物なのか?」

レナードがフェイトに聞いた。フェイトが頷いて答えた。

レナード「お前達、俺に黙ってそんなスゴイ物を探しに行こうとしていたのか？」

フェイト「・・・はい」

アルフ「レナード。ジュエルシードは危険な物なんだ！フェイトはあんたを巻き込みたくなかったから・・・！」

アルフが必死に説明する。危険な物と聞いてレナードはフェイトを見た。

レナード（危険な物か・・・ジュエルシードってのがどんな物か、よく知らないが・・・子供なのに危ない物に手を出そうとしているな）

レナードはため息を付いた。

レナード「そんな危険な物なら探すの、やめたほうがよくないか？」

手を組みながらレナードが言う。

フェイト「・・・そうはいかないよ。私の母さんが・・・ジュエルシードを欲しがってるから・・・」

フェイトは拳を固く握る。

フェイト「母さんのためにも絶対ジュエルシードを集めなくちゃ・・・」

固い決意の表情を浮かべてフェイトが言う。

レナード（こういう頑固者には何言っても無駄なんだよね）

レナードはため息を付いた。

レナード「しょうがない」

フェイト・アルフ「！」「」

フェイトとアルフは視線をレナードに向けた。

レナード「俺も手伝うよ。ジュエルシード集め」

フェイト「えっ！？」

フェイトは驚いて立ち上がった。

フェイト「で．．．でもレナード！ジュエルシードは．．．」

レナード「危険な物だって言うんだろ？だからお前達だけじゃ危な
つかしいから俺も手伝うって言うてるんだ」

フェイト「だけど．．．」

レナード「俺の心配いらないよ」

フェイト「で．．．でも．．．」

なおもフェイトは戸惑う。

アルフ「もういいじゃないかいフェイト」

アルフはため息を付いた。

フェイト「アルフ」

アルフ「本人が手伝うって言ってるんだから。それにレナードは強いからきつと心強いよ」

フェイト「……………」

アルフに言われてフェイトは黙ってしまう。

レナードはフェイトの言葉を静かに待ってる。

フェイト「……レナード」

レナードを見つめてフェイトが口を開いた。

レナード「ん？」

レナードもフェイトを見つめる。

フェイト「一人で無茶はしないって約束して」

真剣な顔でフェイトは言った。

フェイトの言葉を聞いてレナードは微笑んだ。

レナード「それは俺のセリフだな」

フェイト「え？」

レナード「頑固なお前の方が俺よりよっぽど無茶しそつだ」

レナードは言つた。

レナードの言葉にフェイトは顔を少し赤くする。

レナード「約束は守るよ」

フェイト「う．．．うん。なら、これからよろしくレナード」

レナード「ああ」

朝食を食べ終え、支度を済ませたレナード達はマンションを出た。

今日はフェイトがジュエルシードの封印、アルフとレナードが他のジュエルシードの探索。と言ってもレナードは魔法は使えるが探索能力は無いため目で見て探すしかない。それにレナードはご飯の材

料も買わなきゃいけないし。

フェイト「じゃあ、また後でねレナード」

アルフ「じゃあね」

レナード「ああ。気をつけろな」

マンションの前でレナードとフェイト達は別れた。

海鳴市。

茶髪の少女、高町なのはは、友人である月村すずかの家に同じ友人のアリサ・バニングスと共に遊びに来ていた。

数日前までは極々普通の小学三年生だったのはだが偶然出会った異世界から来たというフェレット、ユーノ・スクライアの『ジュエルシードを集める』という目的を手伝うために、魔法少女になっていた。

三人は今、庭で紅茶を飲みながら会話を楽しんでいる。周りには月村邸で飼っている多数の猫がいる。

アリサ「しかし、相変わらずずずかの家は猫天国よね」

なのは「でも、子猫達も可愛いよね」

ずずかの方を向いてアリサとなのはが言った。

ずずか「里親が決まってる子もいるからお別れもしなきゃならないけどね・・・」

少し寂しげにずずかが言う。

なのは「そっか・・・それはちょっと寂しいね」

ずずか「でも、子猫達が大きくなっていつてくれるのは嬉しいよ」

なのはの言葉を聞いて、ずずかは微笑みながら言った。

なのは「ッ！」

ふと、何かの気配を感じてなのはは目を見開く。側にいたユーノも気づいているみたいだ。

ユーノ（なのは！）

なのは（うん、すぐ近くにジュエルシードが・・・）

ユーノ（どうする？）

なのは（えーと・・・えーと・・・）

なのははどうやってこの場を離れようか考える。

因みにアリサとすずかは今、猫と遊んでる。

だが、流石に何の理由も無く自分がいなくなったらきつと怪しまれるに違いない。

ユーノ（そうだ！）

するとユーノが突然、森の方へ駆け出した。

なのは「ユーノ君！？」

一瞬何事かと思うなのはだが、すぐにその真意に気づいた。

その様子を見てアリサが不思議そうに尋ねる。

アリサ「ユーノ、どうかしたの？」

なのは「何か見つけたのかも・・・ちよつと探して来るね」

そう言ってなのははその場をうまく離れるのであった。

反応があつた方へ二人は走っていく。なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持っている。

するとその先にはジュエルシードを興味深げにいじっている、一匹の猫がいた。

猫がジュエルシードを銜える、するとジュエルシードが光りだした。

なのは「発動した！」

走りながらなのはが言う。

するとユーノが突然立ち止まり、付近を見回した後なのはの方を見上げてこう言った。

ユーノ「ここだと人目が・・・結界を作らなきゃ」

なのは「結界？」

ユーノの方を向いてなのはが言う。

ユーノ「最初に僕と出会ったときと同じ空間、魔法効果の生じてる空間と通常空間の置換進行をずらすんだ」

そう言つてユーノは後ろに振り向き、目を瞑った。

すると目の前に白い魔方陣が現れる。

ユーノ「この付近くらいなら何とか・・・」

魔方阵が光りだし、そこを中心に周りがグレーになっていく。

なのははその様子を見て驚いているようだ。

突然猫がいた方から巨大な光が発生した。

二人はそれに気づき、そちらの方に振り向く。

そして光がおさまった末にいたのは．．．．．とてつもなく巨大化した先程の猫だった。

猫「にゃ~~~~~」

猫が二人の方を向いて一声鳴く。

なのはとユーノはただ呆然とその猫を見つめていた。

なのは「あ、あれは．．．？」

ユーノ「多分．．あの猫の大きくなりたいてお願いが、叶えられたんじゃないかと．．．」

呆然としながら尋ねるなのはに、同じく呆然としながらユーノが答える。

それを聞いてなのはは、左手で頭をおさえた。

ユーノ「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さないと．．．」

なのは「そうだね、あれじゃすずかちゃんも困っちゃうだろうし．．

」。

そう言ってなのははレイジングハートを構えた。

直後、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

猫「にゃ~~~~~！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

なのは「だ、誰!？」

なのはは光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女、フェイトが空
中にたたずんでいた。

銀八「教えて!」

生徒全員「レナード先生!!」

レナード「第一回、『レナード先生コーナー』が始まります」

レナードは何時ものの私服では無く白いジャージ上下を着ている。

銀八「まずはこの人、ペンネーム『黒神』さんからの質問。一つは『レナードへ僕の小説に関する質問です。銀さんは鬼兵隊の兵器対策の為に魔剣士化になりました。しかし肝心な衣装がコスプレ的になっていて、本人も困っています。そんな銀さんを見て呆れましたか？』で、もう一つが『僕の小説はもちろん『リリカル銀魂シリーズ』だけでなく、何と今週のジャンプの原作で、新八は完全にオタクとして堕ちました。こんなロリコンオタク眼鏡を見て失望しました？』」

レナード「一つ目は……まあ俺に言えばカツコイと……
………と思う。二つ目は………確かに失望したよまさか、
新八があそこまで堕ちるなんて………ん？」

作者は電話で誰かと話していた。

銀八「おい作者、誰と電話してんだ？」

そして、電話を切った作者。

作者「ん？今電話で勇者王さんに破壊の鎚で新八を光にして来てって言うておいた」

レナード「コラアアアアアア、このままだと新八が光になっちゃうぞ」

作者「だいじょうぶ、5%が光になるだけだから」

銀八「それならだいじょうぶか」

レナード「よくない!! 『黒神』さん、新八があぶないから報告に行きなさい。えゝ次の質問はペンネーム『真王』さん。『では質問に入りますが、レナードのプロフィールを考えていますか?』そして、『真王』さんの所のネプテューヌさんからの質問。『レナード白騎士の仲間達も来るの?』」

銀八「ずばり答えます。一つ目は……考えています次回まで待ってください。そして、二つ目は……無印編にはまだレナードの仲間はまだ来ません」

レナード「理由は?」

銀八「どうやら作者が、リリカル銀魂をベースにしてオリジナルを入れようと考えたらしい……それに……」

レナード「それに?」

銀八「考えて見る……殆どのリリカル銀魂は仲間と主人公が時空転移したんだろでもこの作品は主人公しか時空転移してないだろ……それに第一話の後書きに書いてあるぞ」

レナード「なるほど」

作者「どうやら『真王』さんは、白騎士物語の名前しか知らないみたいだ」

レナード「そうか……『真王』さん、廊下に立って白騎士

物語をもっと知りなさい」

銀八「こんな駄作者ですみません」

第四話 約束（後書き）

勇者王さんの事は、ガオ。イガーの事です。破壊の鎚の事は、。ル
ディオハンマーの事です。

アルフ「次回、『白騎士リリカルなのは』第五話「知らない人は仲
良くなる」テイクオフ」

第五話 知らない人は仲良くなる（前書き）

銀八「今回は、レナードの事を教えるぞ」

レナード

18歳 レベルは80 好きな物 気に入った料理 嫌いな物 女の裸

かつてはただのワイン商であつたが、シズナ姫の成人祭の時にウィザードが襲撃して来てレナードはシズナ姫を地下宝物庫に避難させた。そして、レナードは地下宝物庫でシンナイト、白騎士と出会う、レナードは白騎士と契約をして白騎士に変身し、城の中に入った巨大モンスターを倒した。しかし、その直後、シズナ姫はウィザードに連れさらわれてしまった。レナードは、仲間達と共にシズナ姫の救出へ向かった。旅の途中で新しい仲間達と出会ったそして、レナードはシンカ村で騎士の秘密と自分の出産の秘密を知り無事シズナ姫を救出した。一年後、ウィザードから新生イシュレニア帝国を名乗り全て国に宣戦布告した。レナードは正式にバランドールの騎士になったこの時シズナ姫からエクスカリバーを貰った。しかし、騎士に変身するたびに体に負担を与えていた。そして、クレイドール平原で黒騎士と戦つて最中で騎士の共鳴で倒れてしまい戦線離脱をした。太陽王が現れた時、シズナ姫から聖王ファルシオスの剣を貰い太陽王を撃退した。イシュレニアとの最終決戦ではまだ回復していない体で戦線に復帰。太陽王との最後の戦いに挑むがレダム司祭の計略によってマドラス皇帝の復活に利用されたが仲間達によってレナードを助け出した。

レナード「俺のプロフィールここまでだ。今回の話は俺の視点の話

だ
」

アルフ「第五話始まるよ」
」

第五話 知らない人は仲良くなる

フェイト（私と同じ魔導師・・・）

白いバリアジャケットを着た女の子を見ながらフェイトは思った。

フェイト（でも・・・母さんのためにも・・・ジュエルシードは譲れない）

フェイトは、なのはの方へ飛んでいった。

その頃レナードは

レナード「さて、食材はこれで十分か」

レナードは今、デパートで食材買っていた。途中デパートの中で迷ったがだいぶ慣れた。

食材を買う前はデパートの本屋で、漢和辞典や国語辞典を買っていた。なぜって？それは読めない文字や漢字を習うためだ。

食材を買い終わって、レジの所に並んだレナード。

店員「3500円になります」

レナード「3500Gで出しておくか」

レナードはポケットからGを出して払った。

店員「……………」

店員はもちろん驚いた。

レナード「あの……………もう行っていいですか？」

店員「は、はい！」

そう言ってレジを出てデパートを後にした。

しばらく歩いて。

レナード「……………腹減った」

今の時刻はすでに昼になっていた。

レナード「あそこで食べるか」

レナードが向かった場所は、喫茶店『翠屋』である。

チリーン！

桃子「いらしゃいませ！」

そこにいたのは、なのはの母、高町桃子。

レナードは椅子に座り、メニューを見た。

レナード「……………じゃあこれで」

レナードが頼んだのがオムライスセットだ。

桃子「かしこまりました」

桃子「お待たせしました」

頼んだオムライスセットを食べるレナード。

レナード（うまいな……………（モグモグ））

桃子「あのう、ここでは見かけない子ね。ここに引っ越したばかり？」

レナード「は、はい……（言えない、異世界から来ましたなんて絶対に言えない）そんなところです」

つと、？を言うレナード。

桃子「なにか、習い事をやっているの？」

レナード「えっ？……まあ、剣術をやっています」

士郎「ほおう、剣術をやっているのかね？」

厨房から出てきたのは、なのはの父、高町士郎。

レナード「貴方もやっているんですか？」

士郎「まあね」

レナード「いつか、手合わせを願いたいですけどいいですかね？」

士郎「ああ、いいとも君の名前は？」

レナード「レナードです」

士郎「レナードか……僕は高町士郎。よろしく」

レナードと士郎は握手をしてフェイト達のお土産を買った。

桃子「1140円です」

Gを出して払ったレナード。

桃子「・・・・・・・・・・」

桃子はレナードのお金を見て驚いた。

レナード「あ、あの・・・・？」

桃子「あつすみません」

桃子が謝った後、レナードは店を出た。

桃子「あなた、これ！」

桃子はレナードが払ったお金を見せた。

士郎「これは・・・・金貨？」

マンションの近くの公園。時刻は夕方で遊んでる子供はいない。

誰もいない公園のベンチにフェイトとアルフが座っていた。

レナードを待っているらしい。

レナード「おーい！」

レナードはフェイト達に声を掛けた。

レナード「ジュエルシード、見つけたか？」

フェイト「うん。．．．．レナードその箱は？」

フェイトはレナードの左手に持っている箱を指した。

レナード「ん？ああフェイト達のお土産だ。夕食が食べ終わったら食べるか」

フェイト「うん」

フェイトは嬉しそうに頷きレナードといっしょにマンションに帰った。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

フェイト「こんにちわフェイトです。今回は私がアシスタントをします」

レナード「では早速、ペンネーム『真王』さんからの質問。『質問に入るが、レナードは恋をしたことがありますか？』・・・ずばり答えよう。恋をした事は無い」

銀八「あれ？でもお前・・・シズナ姫となんかいい感じだった様な」

レナード「あれはただ守りたいという気持ちだ。別に好きという訳じゃない」

フェイト「ほっ」

フェイトはそれを聞いて安心した。

レナード「ん？どうしたフェイト？」

フェイト「えっ！ううんなんでもない」

銀八「と、言う事だ『真王』さん廊下に立って下さい。んじゃ次の質問ペンネーム『黒龍』さんの質問『1・レナードは今好きな人はいますか？2・白騎士君さんはコラボとかは考えていますか？3・うちの新八の事をどう思いますか？』．．．ずばり答えましょう．．．一つ目は『真王』さんと同じ答えです。で、二つ目は．．．作者！」

作者「えゝ今のところは無いですが、StrikerS編には僕のお好きなアニメと特撮を入れたと思っています」

レナード「『黒龍』さんのところの新八か．．．すでにアニメオタクになって様な気がするな特にあのケン八はちょっと．．．」

思い出しただけでも顔を青くしたレナード。

銀八「．．．『黒龍』さん廊下に立って下さい」

フェイト「次が最後です。ペンネーム『charley』の質問。

『レナードから見て、戦国BASARAのキャラ（2までのキャラや3のキャラ問わず）で一番剣を交じり合いたい相手は誰ですか？』

「

レナード「そうだな．．．やっぱり独眼竜の伊達政宗かな」

銀八「と、言う事だ『charley』さん廊下に立って下さい」

第五話 知らない人は仲良くなる（後書き）

レナード「今日の話はグダグダだな」

作者「まあ、オリジナルの話だから・・・後、大事なお知らせがある」

レナード「お知らせ？」

作者「ああ、なんと2000PV以上と600ユニーク以上にいったぞ」

フェイト「ええっ！！？」

アルフ「そんなにいったのか！！」

作者「この作品を見てくれてた皆さん」

全員「本当にありがとうございます！！」

レナード「次回、『白騎士リリカルなのは』第六話「人には色々な展開がある」テイクオフ」

第六話 人には色々な展開がある（前書き）

作者「『白騎士リリカルなのは』無印編のOPとEDを考えました」

OP 白騎士物語 『旅人たち Fullver』

ED グレンラガン 『みんなのピース』

作者「こんな感じです」

フェイト「『白騎士リリカルなのは』第六話始まります」

第六話 人には色んな展開がある

台所にレナードが立つ。

レナード「それじゃ、始めるか」

調理を始めようとするレナード。そこへアルフがやって来た。

アルフ「ねえレナード」

レナード「ん？」

アルフ「今更なんだけど・・・レナードって料理できるの？」

アルフは心配そうにレナードに聞いた。

レナード「なに、こう見えて料理を習ったからだいじょうぶだ」

アルフ「ふーん。じゃあ任せたよ」

アルフは台所を離れた。

そしてレナードは調理を始めた。

夕食。

フェイトとアルフはレナードの作った料理を食べている。食べた感想。

普通においしい。

レナードは料理を習ったと言っていたが正直、味は普通だった。普通に美味しかった。

それでもフェイトは、初めて他人が自分達のために作ってくれた料理に感激していた。

フェイト「ごちそうさま。ありがとうレナード。美味しかったよ」

アルフ「味は普通だったけどね」

食べ終えてフェイトはお礼を言い、アルフは正直な感想を言った。

レナード「ドッグフードよりはマシだろ？」

アルフ「うーん」

アルフは腕を組んで悩んだ。

アルフ「ドッグフードの方が・・・」

レナード「お前、明日の朝食抜きな」

アルフ「ええ〜!？」

レナードの言葉にアルフはショックを受けた。

夕食を食べ終え、食器を片付け、レナードとアルフは席に座っていた。

レナードは前に座ってるアルフをジーツと見つめた。

アルフ「ん？何だいレナード？」

レナードの視線に気付いてアルフが聞いてきた。

レナード「いや、俺の世界にも獣の耳が付いている種族がいるんだ」

アルフ「ソイツらも使い魔なのかい？」

レナード「いや『ワグ族』だ」

アルフ「ワグ族？」

アルフは首を傾げた。

レナード「要は額に角を持った人間より巨体な種族だ。女性の場合は人間と同じ体格で猫の耳をしている」

アルフ「へえ」

レナード「まあ、お前の場合はネコ耳じゃなく・・・」

レナードは口元を吊り上げた。

レナード「イヌ耳だな！」

アルフ「狼だ!!」

アルフはレナードの言葉を即座に否定した。

レナード「はいはい。わかったよ」

そう言いながらレナードは席を立った。

アルフ「一回でいいから狼って言ってよ」

アルフがテーブルに突っ伏した。

レナード「お前がドッグフードを止めたらな」

レナードはそう言つて風呂場に向かつていた。ぺたぺたと素足で歩いて脱衣所の前に到着。

ガララと脱衣所の扉を開け、服を脱いでタオルに腰を巻いて風呂場の扉を開けた。

中には、シャワーを浴びているフェイトがいた。

フェイト「えっ！！？」

レナード「なあ！！？」

レナードはフェイトの裸が目に入つて。

フェイトはレナードの体格が目に入つて。

二人は顔を真っ赤にした。

そして、次の瞬間。

レナード・フェイト「「ブハッ！！」」

レナードとフェイトは盛大に鼻血を出して、二人は倒れた。

アルフ「どうしたんだい？」

アルフは二人の声に気づいて、風呂場にやって来た。

アルフは鼻血を出して倒れている二人を見て、驚いてすぐに二人に駆け寄った。

アルフ「どうしたんだい二人とも!？」

レナード・フェイト「きゅ~~~~~」

二人は鼻血を出しながら、目を回して気絶している二人。

アルフ「フェイトオオオオオオオオ!! レナードオオオオオオオオオオ!!
オ!!!!!! しっかりしてええええええええ!!!!!!」

部屋にアルフの叫び声が響渡った。

第七話 温泉の一時（前書き）

レナード「俺はいつになったら活躍するんだ？」

作者「『白騎士リリカルなのは』第七話始まります」

レナード「おい」

第七話 温泉の一時

フェイト達が一つ目のジュエルシードを回収した翌日。レナード達は次のジュエルシード発見場所に向かった。

レナード「温泉？」

レナードとアルフは『海鳴温泉』と書かれた旅館の前に立っている。ちなみに今のレナードの服装は白いジャージ上下の恰好だ。剣は袋にしまつて持っている。

アルフ「あたしが見つけた場所がこの辺りなのさ」

そう言つてアルフはレナードと腕を組んだ。

レナード「何やってんだ？」

アルフ「ねえレナード。こうしてるとあたし達、恋人同士に見えるかな？」

腕を組みながら旅館の中に入った。

レナードは旅館の従業員を見つけ。

レナード「あつ、フロントの人ですか？すみませーん。この犬つまみ出してもらえませんか？」

アルフ「あゝ！レナードひどい！ー！」

レナードの言葉にアルフは頬を膨らませた。

何故、レナードと一緒にいるのかというと。

フェイト「私達にご飯を作ってくれたお礼に温泉でゆっくりして
てね」

と、フェイトに言われたからだ。

レナードはアルフと一緒に部屋に向かった。

レナードはしばらく部屋で国語辞典や漢和辞典で文字や漢字を習っている。アルフは先に温泉に入りに行っている。

レナード「俺も入るとするか・・・」

レナードは立ち上がって部屋を出た。

温泉を目指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、先に温泉から上がった、なのはとアリサ、すずかとなのはの肩に乗ってのぼせているユーノと絡んでいた。

レナード「ん？何やってるんだアイツは？」

レナードは片眉を上げてゆっくり歩き出した。

レナードは、なのはがジュエルシードを集めてる魔導師だということとを知らない。だからアルフが念話で、なのはに警告している事にも気付かない。

レナード「おい」

レナードがアルフに声を掛けた。

レナードの声を聞いてアルフは慌てて振り返った。

アルフ「レ、レナード!？」

なのは達の視線がレナードに集まった。

なのは「レナー・・・ド・・・?」

なのははアルフが言った男の名前を聞いて士郎が言った事を思い出した。

なのは（お父さんが言ってたレナードさんって・・・もしかしてこの人？）

なのはレナードをじつと見つめた。

レナード「何やってるんだお前は？ 酔っ払いの絡みか？」

アルフ「い．．．いやだよレナード！ あたし酔っ払ってなんかないよー！」

動揺しながらアルフはレナードに答えた。

レナード「全く」

ため息をしながら、なのは達に視線を向けた。

レナード「悪かったな。コイツは俺の連れなんだ。後で説教しとくから、許してやってくれ」

なのは「は．．．はい．．．」

なのは達は頷いた。

レナード「ほら行くぞ」

アルフ「わっ！ ちょっと待ってよレナード！」

レナードはアルフの腕を掴んで歩き出した。

なのは「あ．．．あの！」

なのはが声を上げた。

レナード「ん？」

なのはの声にレナードは足を止めて振り返った。

なのは「私、高町なのは。なのはって言います！よかったら・・・その・・・貴方の名前を教えてください！」

なのははレナードを真っ直ぐに見つめた。

レナード「・・・レナードだ」

そう言ってレナードはアルフを連れて歩いて行った。

なのは（・・・そのままなんだ）

なのははレナードの後ろ姿を見つめながら思った。

レナード「お前は子供をいじめるのが趣味なのか？」

なのは達から離れたレナードはアルフを細目で睨んだ

アルフ「違うよレナード。実は・・・」

アルフはレナードに、なのはがジュエルシードを集めてる魔導師である事を話した。

レナード「本当か？フェイトと同じ年くらいじゃないか」

アルフ「うん」

レナード「何で俺に黙っていた？」

アルフ「……………」

レナードの質問にアルフは黙ってしまう。

レナードはため息を付いた。

レナード「同い年の女の子と戦ってる俺が知ったら、お前達から離れると思ってたのか？」

アルフ「う……………」

アルフは顔を俯かせてしまう。

レナード「そんなに俺は信用できないのか？」

アルフ「そ……………そんな事ないよ！」

アルフは声を大きくして否定した。

レナードは短く笑った。

レナード「安心しな。お前らを裏切るような事は絶対にしないから」

レナードはそう言った。

アルフ「う．．．うん！わかったよレナード！」

レナード「それじゃ俺は温泉にでも入るか」

レナードは男湯に向かった。え？なぜアルフが混浴に誘わなかった？理由は．．．

レナード「俺は．．．その．．．女の裸が．．．苦手なタイプなんだ」

．．．だそうだ。

レナードは温泉から上がって旅館の周りを歩いていた。旅館の周り

は森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中でレナードは探していた人物を見つけた。

木の上にフェイトが座っている。

レナード「おい」

フェイト「！」

声に気付いたフェイトは下にいるレナードを見つけた。

フェイト「レナード。どうしたの？」

レナード「散歩のついでにお前の様子を見に来たんだ」

フェイト見上げながらレナードは言う。

フェイト「そう」

レナード「ジュエルシード見つかったのか？」

フェイト「うん。でも封印の作業は夜にやるから」

レナード「わかった」

そう言つてレナードはフェイトに背を向けた。

レナード「なあフェイト」

フェイトに背を向けたままレナードは話し掛けた。

フェイト「何？」

レナード「今度は、お前も一緒に来い。アルフの奴も喜ぶ」

フェイト「！」

レナード「じゃあな」

手を振りながらレナードは旅館に向かって歩いて行った。

フェイトは頬を少し赤くしながらレナードの後ろ姿を見つめた。

嬉しさでフェイトは、いつの間にか微笑んでいた。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

アルフ「今回は、あたしがやるよ」

レナード「ではさつそく、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『1・レナード君はこっちの小説の誰と戦いたいですか？2・・・？？機関の中で勝てそうなのは誰ですか？』・・・ずばり答えよう・・・ソラだな」

アルフ「なんで？」

レナード「ソラのクウガの力がどれ程の者か試してみたいし」

銀八「なるほど。古代の戦士に古代の兵器かでもよお前が白騎士に変身したら勝負にならないじゃね？」

レナード「そうかな？」

アルフ「二つ目は？」

レナード「そうだな・・・ユウだと思っています」

銀八「はい、『黒龍』さん廊下に立って下さい。次はペンネーム『真王』さんの所のネプテューヌからの質問。一つ目は『作者はなのはの惚れる相手を考えていますか？』で、二つ目は『作者はレナードをハーレムにさせますか？』」

作者「一つは・・・なのはの惚れる相手はいません。二つは・・・レナードをハーレムにさせます」

銀八「と、そうゆう事で『真王』さん廊下に立って下さい」

アルフ「続いて、ペンネーム『支配者』さんからの質問だよ。『質問です。フェイトはレナードに恋をするのでしょうか？するとし

たら銀時のときみたいな感じですか？後もうひとつレナードに性転換薬を使って女にしてみたら面白いと思うのですがいかがでしょうか？」

作者「一つは．．フェイトはレナードに恋をします。二つは．．面白そうなのでStrikerS編でやりたいと思います」

レナード「嫌だあああああああああ！！！！！！！！」

レナードはそれを聞いて絶叫した。

銀八「．．．．『支配者』さん廊下に立って下さい。えゝ最後の質問だペンネーム『黒神』さんからの質問。『レナードへ 僕の小説『リリカル銀魂StrikerS』攘夷戦争鎮魂歌』でのスバルは、原作と違って刀を使って剣術を中心に戦う魔剣士となっています。これを見て、もし貴方もスバルにあつたら魔導騎士として剣が優れた魔剣士にさせたいですか？」

レナード「そうだな、させたいと思っている」

銀八「作者は？」

作者「秘密です。StrikerS編まで待って下さい」

銀八「そうゆう事で『黒神』さん廊下に立って下さい」

第七話 温泉の一時（後書き）

アルフ「次回、『白騎士リリカルなのは』第八話「白い魔王と金色の死神と白き勇者」テイクオフ」

フェイト・なのは「私は死神（魔王）じゃないよー!!」
「」

第八話 白い魔王と金色の死神と白き勇者（前書き）

作者「僕の小説ではデバイスの言葉はすべて片仮名になります。なぜなら僕は英語が全く解らないからです。すみません」

レナード「今回は、なのは頼む」

なのは「はい！『白騎士リリカルなのは』第八話始まります」

第八話 白い魔王と金色の死神と白き勇者

レナードとアルフは旅館をチェックアウトしてフェイトとの合流地点に向かった。

月が輝く夜の中、二人は森の中へ駆けていった。

レナード「なあアルフ」

レナードが隣にいるアルフに声を掛けた。

アルフ「何だいレナード？」

レナード「なのはって子は強いのか？」

アルフ「ああ、あの子かい？全然大した奴じゃないね。フェイトの敵じゃないよ」

レナード「ふん」

と、レナードは気の抜けた返事をする。

アルフ「何だいその返事は？レナードは違うのかい？」

アルフがムツとした顔で言う。

レナード「別に。俺は、魔導師の強さとかわかんないし」

アルフ「そういえばそうだったね」

そんな話をしてる内に合流地点に到着した。

アルフ「フェイト〜！」

フェイトを見つけてアルフが手を振る。

フェイトもレナード達に気付いて振り返った。

フェイト「レナード。少しは楽しめた？」

レナード「ああ。まあな」

フェイト「そう。良かった」

レナード「ジュエルシードは何処にあるんだ？」

レナードは周りをキョロキョロ見た。

フェイト「あそこだよ」

フェイトは川を指差した。川の中から淡い光を放っているジュエルシードがあった。

フェイト「バルディッシュ、起きて！」

バルディッシュ「イエス、サー」

フェイトの左手の手袋の甲から黄色い三角形が外れて、一振りの杖へと形を変えた。

フェイト「封印するよアルフ。サポートお願い」

アルフ「へいへい」

レナードは二人の後ろで封印の作業を静かに見守った。

封印作業が問題なく終わった時。

なのは「あ．．．あれって！」

なのはとユーノがやって来た。

アルフ「あゝあら。やっぱ来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

レナード「消灯時間はとくに過ぎてるぞ。良い子は寝る時間だぞ」

とレナードが言った。

なのは「あっ！レナードさん！」

レナードを見て、なのはは声を上げた。

ユーノ「それを．．．ジュエルシードをどうする気だ！？それは危険な代物なんだ！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

アルフ「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言ったよね？良い子にしないでないとガブツと行くよって・・・」

アルフは目をギロリと光らせた。

レナード「あれのどこが親切だ？ただの酔っ払いの絡み・・・」

と、レナードは途中で言葉を止めた。

レナードの隣で、アルフは人の姿から狼の姿へと変身したのだ。

レナード「なあ！？」

レナードは驚いた。

レナード「アルフ・・・お前い・・・じゃなくて。狼の姿に変身できるのか！？」

アルフを指差しながらレナードが言った。

アルフ「ああ。そういえばレナードにこの姿を見せるのは初めてだったね。ていうか今、『犬』って言おうとしなかったかい？」

鋭い目でアルフはレナードを睨んだ。

レナード「・・・気のせいだ」

レナードは明後日の方を向いている。

ユーノ「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う。

なのは「使い魔？」

なのはは首を傾けた。

アルフ「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全て賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

アルフ「先に帰ってて、すぐに追いつくから」

レナード「分かった」

フェイト「うん・・・無茶しないでね」

アルフ「オツケー！」

アルフは飛び上がって、なのはに突っ込んで行った。

なのは「あ！」

突然の行動になのはは慌てる。

しかし、なのはに襲い掛かる寸前でユーノが防御魔法を唱えてシールドを展開し、アルフの攻撃を防いだ。

ユーノ「なのは、あの二人をお願い！」

防御魔法を維持しながらユーノは叫んだ。

アルフ「させるんでも思ってたの！」

シールドを破ろうとしながらアルフが叫ぶ。

ユーノ「させてみせるさ！」

そして素早く移動魔法を唱えた。

アルフ「移動魔法？・・・マズイ・・・！」

アルフがそう感じた時には既に遅かった。

アルフの姿はそのまま消えてしまった。

レナード「アルフ！！」

レナードがアルフの事を叫んだ。そしたらフェイトがレナードの手を掴んだ。

フェイト「大丈夫。強制転移魔法をされただけだから」

フェイトがレナードに説明した。

レナード「・・・そうか」

レナードは落ち着きを取り戻して再度なのはを見た。

相対するなのはとフェイトとレナード、暫くしてなのはから先に口を開いた。

なのは「あ・・・あの・・・話し合いで何とかできないかな？」

フェイト「・・・私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴方も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になるね」

なのは「だから！そんな勝手に決めない為に話し合いって必要と思う！！」

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

フェイトは目を閉じた。

フェイト「言葉だけじゃ・・・何も変わらない・・・・・・伝わらない！」

そう言っつてフェイトは目を開く。バルディッシュを構えてフェイトは、なのはの背後に回った。

なのは「くっ！」

レイジングハート「フライアーフィン」

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

なのは「けど、だからって!」

フェイト「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトも、なのはを追って空を飛ぶが、一旦止まってレナードの方へ向く。

レナード「分かってる。これはフェイトとなのはの戦いだ俺は手を出さない」

レナードがそう言うのとフェイトは頷きなのはを追った。

レナード「・・・フェイト・・・」

一人地上に残ったレナードはフェイトの名前を呟いたその時。

ガサガサ ガサガサ

茂みの奥から音が聞こえてきた。

レナード「?」

レナードが何かと思い後ろを向いた瞬間。

レナード（殺気!?!）

殺気を感じた瞬間、黒い者がレナードに突っ込んで来た。

レナード「くっ」

レナードはとつさに避けて黒い者を見た。それは普通のハチよりもさらに大きい者だった。

レナードは知っていた自分の世界にいったインセクト種のモンスター。
！。

レナード「ジャイアントビー！？何故此处に！？」

レナードは驚いていたなぜ自分の世界にいたモンスターが。さらに
茂みの中から8匹のジャイアントビーが出てきた。

レナード「仕方ない」

レナードは腰から剣を抜いてジャイアントビーの群れに突っ込んだ。

フェイトと、なのはの空中戦。

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

バルディッシュ「サンダースマッシャー」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

レイジングハート「ディバインバスター」

なのはのレイジングハートからも桃色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

なのは「レイジングハート！お願い！！」

レイジングハート「了解」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。桃色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押していく。

フェイト「！」

金色の閃光は桃色の閃光に掻き消された。フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

ユーノ「なのは・・・強い！」

たがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

アルフ「でも．．．甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

ユーノ「なのは！！」

ユーノが叫ぶ。

なのは「あっ！？」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュ振り下ろす。

なのは「！！」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。

勝負は決した。

レイジングハート「プットアウト」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシードが一つ出てきた。

なのは「レイジングハート．．．何を！？」

フェイト「きつと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトがジュエルシードを受け取る。

その時なのはの背後に影が迫った。

フェイト「え！」

なのは「何．．．！」

なのはもフェイトもそれを見て驚く。

影の正体はレナードと交戦していたジャイアントビーの内の一匹であつたジャイアントビーは尻に付いている針をなのはに刺そうとしていた。

なのは（やられる！！）

なのはは瞼を閉じたが痛みが全く来なかった。

なのは（あれ．．．？）

瞼をゆっくり開けたなのはが見た物はなんと。

ジャイアントビーが真つ二つ切れていた。ジャイアントビーの後ろにはジャンプをして剣で切り裂いたレナードがいった。

ジャイアントビーの残骸は地上に落ちて、レナードは地上に着地した。

レナードはなのはの方へ向いて。

レナード「大丈夫か？」

つと、なのはに言った。

そう聞かれたなのはは。

なのは「だ．．．大丈夫です」

つと、なのはが答えた。

レナード「そうか」

安心したレナードは、剣を腰に差した。

そしてフェイトも地上に着地した。

フェイト「レナード。あれはいつたい何なの？」

フェイトはジャイアントビーの残骸を指を差して質問をしてきた。

レナード「あれはジャイアントビー、俺の世界にいったインセクト種のモンスターだ」

つと、レナードが答えた。

しかしレナードはある事に気が付いた。

レナード（しかし、何故こんな所にモンスターが？）

そう、何故この異世界にモンスターがいる事に。

アルフ「さっすが、あたしのご主人様♪」

アルフがフェイトの下へ戻る。

なのは「待つて！」

なのはも地上に降りる。なのはの声にフェイトは足を止めた。

フェイト「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きつと加減なんて出来ない」

振り向かずに、なのはにそう言った。

なのは「名前……あなたの名前は！？」

フェイト「フェイト。フェイト・テストロッサ」

なのは「わ……私は」

なのはが名前を言おうとして、フェイトは森の方へ飛び去ってしまった。

アルフ「ばいばい」

アルフもフェイトに続いた。

一人残ったレナードはフェイトが飛び去った方向へ歩いて行った。

なのは「あ．．．あの！あなたはフェイトちゃんと何の関係があるんですか？」

なのはがレナードに質問をした。レナードは歩くのを止めて顔をだけなのはの方に向いた。

レナード「俺は．．．．．あいつの世話になってる、それと．．．
．．．あいつの無茶をしない様に見守ってるだけさ」

そう言っレナードはフェイト達を追った。なのははレナードが去った方を静かに見つめていた。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

レナード「今回のアシスタントはなのはです」

なのは「よろしくお願いします」

銀八「まずはこの人ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

1・新八は今週のジャンプで廃人になってしまいましたが、そんな新八を見てレナードはどう思いますか？

2・レナードはアルフの裸はだめでもフェイトの裸なら見えますか？

3・レナードは最強の存在セラをどう思いますか？

『・・・はいレナード答えて』

レナード「ずばり答えよう・・・一つ目は・・・いや新八もここまです落ちたな、と思った。二つ目は・・・見れるわけないだろ!!」

銀八「お前はすでに見てるしなあ」

なのは「えっ!?レナードさんってフェイトちゃんの裸見たんですか!?!」

レナード「好きで見たわけじゃない!あれはただの事故だ!!・・・最後の三つ目は・・・最強すぎだろっと思った。『黒龍』さん小説書き直しだけど頑張って下さい」

レナード「次の質問はペンネーム『黒神』さんからの質問。』

レナードへ

貴方は志村新八を侍としての存在に認めていますか？

なのはへ

ヒロインとして目立ちたいですか？

以上です。』ずばり答えよう．．．俺は新八を侍として認めていません。特に『黒神』さんの新八は絶対に認めていません。．．．二つ目なのは答えは？」

なのは「できれば．．．目立ちたいです。白騎士君さんどうなんですか？」

白騎士君「あつ、やっと名前で呼んでくれた多分赤夜叉さんと同じかな？」

なのは「そんな〜」

レナード「まあ元気だせ。『黒神』さん廊下に立って下さい」

銀八「今回俺、なんか話す回数少なくなね？」

第八話 白い魔王と金色の死神と白き勇者（後書き）

白騎士君「投稿遅れてすみません！」

レナード「次は早く投稿しろよ」

なのは「次回、『白騎士リリカルなのは』第九話「無茶をする」テイクオフ」

第九話 無茶をする（前書き）

レナード「今回はアルフがやってくれ」

アルフ「はいよ！『白騎士リリカルなのは』始まるよ」

第九話 無茶をする

夕方。

アルフは尻尾を揺らしながら、美味しそうにドッグフードを食べている。

アルフ「んゝこっちの世界の食事もなかなか悪くないよねゝ」

満足したアルフは席を立つ。

アルフ「さて、ウチの姫様はっ」と

ドッグフードを一箱持つてフェイトの部屋に向かう。

部屋に入ると、バリアジャケットを着たフェイトがベットで横になってる。

アルフ「ああ。また食べてない」

台の上には、あまり手を出していない食事が置かれてあった。

アルフ「駄目だよ食べなきゃ。レナードに怒られるよ?。」

と、フェイトに言った。

フェイト「大丈夫だよ。少しだけ食べたから」

アルフ「まあそうみたいけど・・・」

フェイトはゆつくりと体を起こした。

その時に見えたフェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフは顔を悲痛に歪ませた。

アルフ「フェイト・・・レナードには言わないのかい？」

フェイト「・・・うん。レナードには余計な心配は掛けたくないから・・・」

アルフ「で、でもさフェイト。レナードなら、あの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ」

フェイト「大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だって言ってたし」

そう言ってフェイトは立ち上がった。

フェイト「ジュエルシードの位置特定は出来てるからレナードが帰って来たら出発しよう。確か散歩だったけ？」

アルフ「う、うん・・・けどフェイト・・・あんまり無理しないでね」

フェイト「大丈夫だよ。私、強いから」

フェイトは微笑みながらアルフに言った。

マンションの近くの公園。

そこにレナードがいた。誰も居ない公園で、レナードは一人ベンチに座って考え込んでいた。

（ジュエルシードは危険な物なんだ！）

アルフやユーノが言ってた言葉を思い出す。

レナード（危険な物か．．．．後でフェイトに見せて貰うか。それに．．．）

レナードはジュエルシード以外にもう一つ考え込んでいたそれは．．
．海鳴温泉に現れたジャイアントビー事に。

レナード（なぜ奴等はある所にいたんだ？俺と同じ此処に飛ばされたのか？．．．．まさか）

レナードは次元漂流、以外もう一つ原因あると予想したそれは。

レナード（異世界の門．．）

異世界の門。

それはレナードの世界にある謎の球体。そこに入るとギガース種、アークナイト種、アンデット種、魔像王などかつてレナードが立ち向かった強敵のモンスターがいる。たまにレナードの世界のモンスターが入って来たりする無事に生きて戻って来た人間も少ない。レナードはもしかやとすると何等かの影響で異世界の門と此処の世界が繋がったと考えた。

レナード「…………そろそろ帰るか」

レナードは立ち上がってマンションに帰った。

レナードが帰って来た後、三人は再び海鳴市へやって来た。因みにレナードは何時もの服装を着て、アルフは狼の姿になってる。

ビルの屋上に立って下を見渡す。

レナード「こんな街中から探すのか？」

レナードがフェイトに言った。

フェイト「うん。ちょっと乱暴だけど、辺りに魔力流を打ち込んで強制的に発動させるよ」

フェイトが始め様とすると、

アルフ「ああ、ちょっと待った。それあたしがやる」

自分がやると言ってアルフが前に出る。

フェイト「大丈夫？結構疲れるよ」

アルフ「あたしを一体誰の使い魔だと思いで？任せてよ」

フェイト「うん。それじゃあお願いね」

フェイトはアルフに任せた。

レナード「ちょっと待った」

レナードが待ったを掛けた。

フェイト「え？」

レナード「フェイト。悪いけど、ジュエルシード一個見せてくれな
いか？」

フェイト「ジュエルシードを？」

レナード「ああ」

レナードの目は、何時もの優しいそな目から鋭い目になつていた。

フェイト「は……はい」

言われてフェイトはバルディッシュからジュエルシードを一つ取り出した。

レナードはジュエルシードを受け取った。

フェイト「レナード？」

レナード「.....」

フェイトの声に応えず、レナードは険しい顔で、ジツとジュエルシードを睨む様に見つめた。

フェイトとアルフは黙ってその様子を見る。

レナード「……ありがとう。返すよ」

そう言ってレナードはジュエルシードをフェイトに返した。

フェイト「如何したのレナード？」

ジュエルシートを受け取ったフェイトは首を傾けた。

レナード「いや……何でもない」

それっきりレナードは黙ってしまった。表情は陰しいままだ。

アルフ「・・・それじゃあいくよ！」

アルフが構える。

アルフ「はあああああああー！」

アルフの足元にオレンジ色の魔法陣が展開される。それにジュエルシールドが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

なのは達も同じく街でジェルシールドを探していた。

ユーノ「こ・・・これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

ユーノ「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

ユーノ「くっ・・・!広域結界!間に合え!」

ユーノの足元に緑色の魔法陣が展開された。

空は暗くなり、ゴロゴロと雷が鳴る。

その時、街中に一本の青い光が立った。

フェイト「見つけた！」

アルフ「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

フェイト「早く片付けよ。バルディッシュ」

バルディッシュ『シーリングフォームセットアップ』

フェイトがバルディッシュを構える。

なのは達も別の場所でジュエルシードの光を確認して、なのははレイジングハートを構える。

なのは「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桃色の光が集束される。

フェイト「ジュエルシード、シリアス１９！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

なのは「封！」

フェイト「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのは達は急いでジュエルシードのある場所に向かった。

ユーノも走る。

レナード「やっぱりあの子達も来たか」

レナードはなのは達の姿を確認する。

フェイト「レナード。無理に戦わなくていいんだよ」

レナード「大丈夫だ。心配するな」

レナードは腰に差ししてある剣を抜いた。

フェイト「・・・御免なさい。私達のせいで私と同じ年の子と戦う事になって・・・」

表情を暗くしながらフェイトはレナードに謝った。

レナード「気にするな」

そう言つてレナードはフェイトの頭を軽く叩いた。

レナード「さつさと終わらせるぞ」

フェイト「・・・うん。アルフはフェレットの方をお願いね」

アルフ「はいよ!」

と、フェイトに答えた直後、レナードがアルフの背中に乗った。

アルフ「ちょっとレナード! 何勝手にあたしの背中に乗ってるんだい!?!」

レナード「俺はあのフェレットに話がある。それに俺は空飛べないから頼むアルフ」

ポンポンッと軽く背中を叩きながらアルフに言った。

アルフ「しょうがないねえ。じゃあしつかり掴まってるんだよ!」

レナードを背中に乗せてアルフはフェイトと一緒にジュエルシールドへ向かう。

なのははジュエルシールドの前に着く。そこへユーノもやって来た。

ユーノ「やった!なのは、早く確保を!」

アルフ「そうはさせるかい!」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが防壁を張って防御する。

レナードはアルフの背中から飛び降りた。

ユーノはアルフを引き付けて、なのはから離れる。

レナードはユーノの後を追う。

ユーノ「あなたは!？」

レナード「悪いけどお前に用がある」

そう言っレナードはユーノを追う。

なのははフェイトと対峙する。

なのは（目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかも
しれない・・・）

なのはは真っ直ぐにフェイトを見つめる。

なのは（だけど知りたいんだ！）

なのはは一步前に出る。

なのは「この間は自己紹介出来なかったけど・・・私、なのは！高
町なのは！私立聖祥大付属小学校三年生！」

なのははフェイトに自己紹介した。

だが、

バルディッシュ『サイズフォーム』

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた。

なのは「！！」

なのはもレイジングハートを構える。

なのは（どうしてそんなに寂しい眼をしているのか・・・）

フェイトがバルディッシュを振り上げて襲い掛かる。

レイジングハート『フライアーフィン』

なのは足に翼を展開させて空を飛んだ。

地上では、レナードとアルフとユーノが睨み合っていた。

ユーノ「君達の目的は一体何なんだ！そんなにジュエルシードが欲しいのか！」

ユーノがアルフに叫んだ。

アルフ「悪いけど、教える気は無いよ！！」

と、アルフがユーノに襲い掛かろうとしたが、レナードに止められた。

アルフ「レナード！？」

レナード「アルフ。俺はあのフェレットに話がある。フェイトのサ

ポートをしてくれないか？」

アルフ「で．．．でも」

レナード「頼む」

レナードの表情は険しくして、アルフは何時ものレナードと様子が違うと分かった。

アルフ「．．．．．分かった。出来るだけ早めに済ませておいて」

レナードにそう言ってアルフはフェイトの元へ向かう。

アルフが去ったのを確認してユーノの方に向く。

レナード「フェレット。君の名前は？」

ユーノ「ユーノ、ユーノ・スクライアです」

レナードに名前を聞かれたユーノは自分の名前を名乗った。

レナード「ユーノ。単独で言うすぐにジュエルシード集めを止めろ」

ユーノ「え？」

レナード「勿論、なのはにも止めさせる。こっちも何とかフェイト達を説得して止めさせる」

真剣な顔でレナードはユーノに言う。

突然、ジュエルシード集めを止めろと言われてユーノは戸惑った。

ユーノ「．．．急に如何してそんな事を？」

レナード「さつきフェイトに頼んでジュエルシードを一つ見せてもらった」

そう言つてレナードは宙に浮いてるジュエルシードを見た。

レナード手に取つて見て分かった。あれは願いを変な風に叶える迷惑な道具なんかじゃない。もっと、とんでもなく危ない物だ」

ユーノ「どう言つ事ですか？」

レナード「見た目は綺麗な宝石みたいだが．．．中身はとんでもなく危険な感じがするんだ．．．俺が想像してる以上にな．．．」

レナードは静かにユーノに話した。

ユーノ「確かに貴方の言つたとおりジュエルシードは危険です。ですがもし他のジュエルシードがまだ残つてるんですもし発動したら．．．」

街にはまだジュエルシードが散らばつてゐる。レナードの予想が本当なら、このまま放つて置くわけにはいかない。

レナード「フェイトから聞いたが、『時空管理局』つてのが、あるらしい。彼等に他のジュエルシードを任せればいい」

『時空管理局』。

数多に存在にする次元世界を管理・維持するための機関。

レナード「大体こういう場合はそういう組織に任せればいいだろう」

ユーノ「でも．．責任は僕にあるんです。僕の所為でこんな事に．．」

レナード「どんな責任があるか分からないがお前やなのは、フェイトは幼い。時空管理局に任せればいいさ」

ユーノ「しかし．．．．．ってあれ？なんで僕が幼いって分かったんですか？」

レナード「お前は元々人間だろ」

ユーノ「分かってたんですか！？」

レナード「動物に魔力は無いし、そもそもフェレットが喋っている時点でおかしいが」

レナードの答えにユーノは苦笑した。

レナード（フェイトを説得しても聞かないだろうし．．．もしフェイトを止められるとしたら、フェイトの母親か．．．．．）

レナードは険しい表情で考えた。

フェイトは、なのはの後ろに回る。

レイジングハート『フライアーフィン』

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

レイジングハート『デイベインシューター』

レイジングハートから桃色の閃光が放たれる。

バルディッシュ『デифエンサー』

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「!!」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

なのは「話し合いだけじゃ・・・言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど・・・話さないと、言葉にしないと伝わらない事だっ

てきつとあるよ!」

フェイト「……………」

フェイトは何も答えない。

なのは「何も知らないのぶつかり合うのは私、嫌だ!」

声を出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

なのは「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから!」

フェイト「……………」

フェイトは黙って、なのはの話を聞く。

なのは「これが……私の理由!」

フェイト「……私は……………」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

アルフ「フェイト! 答えなくていい!」

アルフがそれを止めた。

フェイト「!」

アルフ「優しくしてくれる人達の所で、又クヌクと甘ったれて過して来たガキンちよに何も教えなくていい!!」

アルフの言葉にレナードは更に顔を険しくした。

レナード（まさかフェイトの母親と何か関係があるのか？もしそうだとしたら、母親に頼んでフェイトを説得させるって、俺の作戦がクダクダじゃないか）

表情を険しくしたままレナードは考え込む。

アルフ「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人のデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

アルフ「フェイト!」

ユーノ「なのは!」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

フェイト「大丈夫？戻ってバルディッシュ」

バルディッシュ「イエス、サー」

バルディッシュは小さな三角形になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前で佇んでるジュエルシールド目掛けて走った。

アルフ「フェイト！駄目だ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシールドを掴み取る。するとジュエルシールドから強い光が放たれる。

フェイト「く．．．！！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

フェイト「止まれ」

光が激しさを増す。

フェイト「止まれ．．．止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

レナード「あの馬鹿！！」

剣を手放してレナードはフェイトに駆け寄った。

フェイト「こないでレナード！」

レナード「お前の意見は却下だ！！」

ジュエルシードを握るフェイトの手を握った。

直後、レナードの体に激痛が走り、手から血が吹き出した。

レナード「ぐうあああああ！！」

レナードは悲鳴を上げた。

フェイト「レナード！」

なのは「レナードさん！」

フェイト、なのはがレナード名を叫んだ

レナード「あああああ！！」

体に悲痛を受けてもレナードはフェイトの手を離そうとしなかった。

アルフ「レナード！魔導師でもないのに、なんて無茶をするんだい！！」

アルフが悲鳴に近い声を上げる。

フェイト「レナード！」

フェイトがレナードの名を呼ぶ。

レナード「早く．．．．．封印しろ．．．！」

フェイト「レナード．．．！くっ！止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

懇願するようにフェイトはジュエルシードを握り締める。

やがてジュエルシードの光は収まり、魔法陣も消える。

レナードは地面に膝をついた。

フェイト・アルフ「レナード！！！」

フェイトはレナードの体を抱え、アルフはレナードの剣を拾い、人型に戻って駆け寄る。

フェイト「レナード！しっかりして！」

レナードの手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

レナード「．．．フェイト．．．．．お前はやれば出来る子だと信じてた．．．ぞ．．．．．」

そう言つてレナードは、ゆっくりと目を閉じて気を失った。

フェイト「レナード！」

フェイトはレナードを抱く腕に力を入れた。

なのは「レナードさん！」

ユーノ「レナードさん！」

なのは、ユーノが駆け寄ろうとした。

その時、アルフは振り返って射抜く様な鋭い目でなのは達を睨み付けた。

なのは「！」

アルフの眼になのは達は動きを止めた。

そしてアルフはなのは達から視線を外した。

アルフ「あたしが運ぶよ、フェイト」

フェイト「……………うん。お願いアルフ」

アルフはレナードを抱き抱えて、フェイトと共にビルを渡りながら去って行った。

なのは達は、ただ黙ってその姿を見つめる事しか出来なかった。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

レナード「今回はユーノがアシスタントだ」

ユーノ「こ、こんにちは」

銀八「では早速、ペンネーム『支配者』の質問。『レナードは銀時と戦ってみたいと思いますか？戦ったら勝てる自信はありますか？』で、レナード答えは？」

レナード「銀さんとか・・・勝てるかどうか分かんないが戦ってみたいな」

銀八「別にシンナイトに変身すれば良いじゃねーか？」

レナード「それはズルだろ」

銀八「っと、言う訳で『支配者』さんレナードと戦うならシンナイトになって戦います」

レナード「おいおい続いてペンネーム『黒龍』さんの質問。」

黒龍「どうやら今回はレナードの世界のモンスターが出てきましたね」

銀時「コレはアレだな。なんか、レナードの世界の敵キャラみたい

のが出てくるフラグだな」

黒龍「レナードの変身も見られるかもしれませんね」

銀時「つつか、シンナイトって下手したらチートだもんな」

黒龍「それにしても、なのはの扱いは赤夜叉さんがなのはにした扱いとは、なんか可哀想ですね」

銀時「まあなのはファンがいるようにアンチなのはも結構いるからな」

黒龍「まあそれで、なのはの思想を変える小説とかがあったりしますからねえ」

銀時「ま、理解する奴もいれば、理解するできない奴もいるって事だな」

黒龍「じゃあ今回はここまでにして質問いきます。

1、レナードに質問。もし、アルティメットクウガかダグバにシンナイト変身なしで勝って言われたら勝てますか？

2、レナードは銀時や高杉や桂やソラの子供時代を見てどう思いますか？

3、とりあえず、アリスのドS行為をどう思いますか？」

銀時「じゃあ俺から特別に『宇治銀時丼』をプレゼントだ。心して食いやがれ」

『心して食べました』

ユーノ「質問の答えは？」

レナード「1番はダクバたぶん勝てるアルティメットクウガは無理」

銀八「いやダグバは怪人だろうが！勝てんのか？」

レナード「たぶん。2番は子供の頃の高杉はあんな風に突っ込んで
たんだ3番はとんでもないドSだなアリスは」

銀八「ああ沖田以上にドSだな」

ユーノ「そこまで言うんですか！？」

レナード「『黒龍』さん廊下に立って下さい」

銀八「次が最後だペンネーム『黒神』さんからの質問。『質問です。』

レナードへ もしくクロノがクソ生意気な偽善ぶり（フェイトを見捨
てるようなシーン）があつたら、思いっきり剣でクロノの尻を浣腸
して、あの馬鹿を切れ痔にさせちゃってください。

フェイトへ 僕の小説での『バルディッシュ』のパーアップ版『バ
ルディッシュ・デスサイズ』どう思いますか？』ってレナード？」

レナード方を見る銀八。レナードの後ろからなぜか黒いオーラが出
ていた。

レナード「フッフッフ．．．．クソガキカクゴシロ」

何時の間にか剣を持っていた。

銀八「レナードがめっちゃ恐いんですけどおおおおおおおお
おおおおっ!？」

レナードを見て顔を青くさせて叫ぶ銀八。

ユーノ「レナードさああああああああん!」

ユーノも思わず叫ぶ。

銀八「フェ．．．．フェイトと思う別の小説のバルディッシ
ユは？」

フェイト「なんか本物の死神の鎌って思った」

銀八「『黒神』さんあんまりレナードを怒らせないように!」

第九話 無茶をする（後書き）

レナード「馬鹿作者あああああああ（怒）！！！！」

レナードが作者に飛び蹴りを喰らわす。

白騎士君「ぎゃああああああああつ！！！！！」

吹っ飛ぶ作者。

レナード「なんでまた投稿が遅くなったんだよ！！！」

白騎士君「ぐふつ、バイ。ハザード5をやつて遅くなった」

レナード「このアホがあああああああ（怒）！！！！！」

作者に思い切り殴る。

白騎士君「ぐぎゃああああああああつ！！！！！」

また吹っ飛ぶ作者。

ユーノ「じ、次回『白騎士リリカルなのは』第十話「もう一人のフ
エイト」テイクオフ」

第十話 もう一人のフェイト（前書き）

作者「ようやく第十話です．．．．．長かった」

レナード「シリアスになってきた第十話『白騎士リリカルなのは』始まるぞ！」

第十話 もう一人のフェイト

フェイト達はマンションの部屋に戻った。気絶してるレナードを、フェイトの部屋のベットに寝かせて傷の手当てをしている。フェイトの方の傷はレナードが庇ったおかげで軽いもので済んだ。

アルフ「これでよしと」

アルフが傷の手当てを終える。

フェイト「レナード・・・」

フェイトはそつとレナードの手に触れた。

フェイト「御免なさい・・・私の所為で・・・」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

アルフ「フェイト・・・」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

フェイト「御免ねレナード・・・本当に御免なさい・・・」

俯きながらフェイトが謝った。

その時。

レナード「何勝手に自分の所為にしてるんだ？」

声がした。

フェイトは顔を上げてレナードを見た。レナードは何時の間にか目を開けていてフェイト達を見ていた。

フェイト「レナード！」

アルフ「気が付いたのかい！？」

レナード「ああ」

ゆっくりとレナードは上半身を起こした。

フェイト「レナード．．．本当に御免ね。私の所為で．．．レナードを危ない目にあわせて．．．．．」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

レナードが溜め息を付いた。

レナード「顔を上げろ、フェイト」

レナードの優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

フェイト「レナード．．．」

レナード「コイツは俺の意思で動いて、できた傷だ。だからそうやって自分を責めるな」

フェイト「レナード・・・」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

レナード「けどな、フェイト」

レナードは微笑んで、暫し間をとった。

レナード「それとこれとは話しは別だ」

レナードは急に真顔になり、フェイトの頭に拳骨を食らわせた。

フェイト「っ！ー！」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

アルフ「レナード！あんた何やってんだい！？」

アルフがレナードに飛び掛ろうとして、

レナード「おすわり！」

アルフ「わんっ！・・・ハッ！」

レナードの言葉でアルフは思わず、おすわりをしてしまった。この時レナードは思った。アルフは立派な、犬だと。

レナード「フェイト。前にお前が、俺に何て言ったか覚えてるか？」

フェイト「・・・」

フェイトはレナードに何と言ったか記憶を辿る。

レナード「お前は俺に”一人で無茶するな”って言ったんだ」

フェイト「．．．．．」

フェイトは顔を俯かせたまま黙って聞いている。

レナード「ところが、一人で無茶したのはフェイト。お前の方だ」

フェイト「．．．．．」

レナード「まだ子供なのに、何でも一人で背負おうとして．．．お前は俺が信用出来ないのか？」

フェイト「そ．．．そんな事は．．．」

レナードの言葉にフェイトは目を泳がせてしまう。

フェイトの様子にレナードは二度目の溜め息を付いた。

そしてゆっくりと片手をフェイトに伸ばした。

フェイト「！」

また殴られると思ったフェイトは、ビクツと体を震わせて目を閉じた。

だが、頭には痛みでは無く暖かさを感じた。ゆっくり目を開けると、

レナードはフェイトの頭に手を乗せていた。

レナード「お前は、まだ子供なんだから。もつと周りを頼れ。甘えていいんだ。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ？」

微笑みながらレナードはフェイトの言った。

言われてフェイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

レナード「ついでに俺もな」

そう言つてレナードはフェイトの頭から手を離れた。

フェイト「レナード・・・」

フェイトはレナードに顔を向けた。

レナード「もう一人で無茶するんじゃないぞ。いいな？」

フェイトを真つ直ぐに見ながらレナードが言う。

フェイト「・・・うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答えにレナードは満足そうに笑った。二人の様子を見守つてたアルフも嬉しそうに笑って尻尾を振ってる。

レナード「それじゃ、夕食にするか」

アルフ「あつ、レナード。その手で料理作れるのかい？」

レナード「あ」

アルフに言われてレナードは自分の手を見た。

包帯でグルグル巻きになってる今の手では調理は出来ない。

レナード（まあ、この位の傷だったらヒール？で治せるか）

と、レナードは自分の手にヒール？を掛け様としたその時、

フェイト「わ．．．私が作るよ！」

フェイトが手を挙げた言った。

レナード「え？」

レナードは目を細めた。

夕食。

テーブルの上には黒焦げになってる料理が並べられていた。

全てフェイトが作った料理だ。レナードはジッと黒い料理を見つめた。さすがのアルフもちよっと引いている。

最初に口を開いたのはアルフだ。

アルフ「ねえフェイト、これって・・・何？アート？」

フェイト「・・・料理です」

フェイトは少しムツとした顔で言った。

アルフは意を決してフェイトが作った黒い料理を食べた。

アルフ「うつ！？」

余りの不味さにトイレに直行した。レナードはアルフの変な行動に

首を傾けてフェイトの料理を食べた。

アルフ「はあく不味かった・・・」

アルフはトイレの中で黒い料理を全部吐いたのだ。

リビングに戻ってドアを開けたアルフ。だが、アルフは思いもよらない物を見た。

なんと、

レナード「ガッツ！ガッツ！パクッ！パクッ！モグモグ！ゴクン！
！」

レナードはフェイトの作った料理を美味しそうに食べていた。テーブルにはお皿が積み重ねられていった。

レナード「美味しいよフェイト」

フェイト「ありがとうレナード」

フェイトはレナードが美味しいと言ってくれて喜んだ。

レナードは食べて、おかわり、食べて、おかわり、繰り返しとなっている。

アルフは有り得ないぐらいに驚いてそして言った一事は、

アルフ「嘘．．．．．だろ．．．」

だった。

レナードは寝巻きに着替えて寝る準備をしている。

フェイトの料理？食べたよ全部。とても美味かった。この世界に来てこんな美味しい料理を食べたのは初めてだ。

そんなこんなでレナードの大変な一日は終わろうとしていた。

レナード（明日はフェイトの母親の・・・プレシアだっけ？とにかく母親に報告しに行くから、その時に母親を説得してフェイトのジユエルシード探しを止めさせるか・・・。）

そんな事を考えながらレナードがソファで寝ようとした時、フェイトがやって来た。

フェイト「・・・レナード」

レナード「うん？何だフェイト眠れないのか？」

フェイト「あの・・・その・・・」

フェイトは顔を赤くしながら、胸の前で手をモジモジさせてる。

レナードは首を傾けた。

フェイト「えっと・・・一緒に・・・寝てくれる？」

レナード「は？」

レナードは片眉をあげた。

レナード「何言ってるんだ？」

フェイト「あ．．．あの．．．レナード．．．一人で寝るのは．．．寂しいかなって思ってた．．．ええっと．．．」

フェイトは顔をキョロキョロさせながら言う。その顔はどんどん赤くなっていく。

レナード（顔すごい赤いな。このままいくと爆発するんじゃないかな？）

顔を赤くしているフェイトを見ながらレナードは思った。

フェイト「．．．えっと．．．ダメかな．．．？」

上目遣いでフェイトが聞いてくる。

レナードは本日三度目の溜め息を付いた。

レナード「分かった。一緒に寝ていいぞ」

レナードがそう言った瞬間、フェイトは笑顔になった。

フェイト「うん。待ってるね」

フェイトは嬉しそうに自分の部屋に向かった。

この夜、三人は一緒の部屋で寝る事になった。

ちなみにレナードは狼姿のアルフと一緒に床で寝た。

翌日。

レナード達はマンションの屋上にいる。

フェイト「レナード。準備はいい？」

レナード「ああ」

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しに行く。

フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親のお土産だろう。

フェイト「じゃあ行くよ」

レナードは頷いた。

フェイト「次元転移。次元座標。 8 7 6 C 4 4 1 9」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。

フェイト「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロッサの主の所へ
！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

高次元空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。

その直後、レナードは顔を青くして、

レナード「うつ！？」

口を抑えた。

フェイト「レナード！？」

アルフ「どうしたんだい！？」

フェイトとアルフはレナードの変化に気付き心配そうに聞いてくる。

レナード「何だか．．．気持ち悪い．．．」

レナードが気分を悪くした理由。

それは『高次元空間内』と言う空間が、今まで居た所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れてないレナードは気分を悪くしたのだ。

レナード「わ．．．悪いが．．．．．先に行ってくれないか？
．．．後から行くから．．．」

フェイト「う．．．うん。わかった。無理しないでねレナード」

アルフ「ゆっくり休んでな」

そう言つて二人は母親の所に向かった。

一人残つたレナードは、座り込んで気分を落ち着かせた。

暫くしてレナードの気分は落ち着いて来た。

レナード「ふー。やっと落ち着いたか」

ゆっくりと立ち上がった。

レナード「あ．．．フェイトに部屋の場所を聞くの忘れてた．．．」

仕方なく適当に中を歩く事にした。

暫く歩いていると長い廊下に出た。レナードは歩きながらどうやってフェイトの母親を説得させるか考えた。

レナード（ジュエルシードを欲しがってるのは母親の方だからな．．
．こっちの説得も難しそうだな．．．．．まずい、どうやって
説得させるか分からなくなってきた．．．）

頭を掻きながらレナードは悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

レナード「何やってるんだ？」

レナードは首を傾げた。同時にある事に気が付いた。

フェイトが居ない。

レナード（一人で母親に報告しているのか？）

そう思いながらレナードはアルフに近寄った。

レナード「おい。こんな所で何やってるんだ？」

アルフに声を掛けた。

レナードの声に反応したか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げてレナードを見た。

アルフ「レナード・・・」

アルフは立ち上がり、涙目になってレナードに抱き付いた。

アルフ「レナードッ!!」

レナード「うわっ!?!おいアルフ!如何したんだ急に!?!」

レナードは慌てながらアルフに尋ねた。

アルフ「レナード・・・お願いだよ・・・・・・フェイトを・・・助けて・・・」

レナード「!!」

泣きながら懇願するアルフにレナードは目を細めた。

その時、扉の中から何か音が聞こえて来た。

レナード「・・・これは何の音だ?」

レナードは扉を覗んだ。

アルフ「フェイトが・・・フェイトが・・・」

レナード「此処にいる」

レナードはアルフを残る様に言って、扉の前に立った。

大きく息を吸い、

レナード「うおおおおおー!!」

叫びながら扉を蹴った。扉は開き、レナードは部屋の中に入った。

レナード「!!」

部屋に入ってレナードは目を見開いた。

バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷が出来たフェイトが倒れていた。

レナード「フェイト!!」

レナードは駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

レナード「フェイト!おい!しっかりしろ!」

フェイト「...あ...レナード...」

フェイトは薄っすらと目を開けてレナードを見た。

???「いきなり扉を開けて入って来て...貴方、一体何者?」

前から声が聞こえた。

レナードは顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

この時が、レナードと大魔導師プレシア・テストロッサが初めて対峙した瞬間だった。

レナード「．．．人に名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だっ
てお母さんに習わなかったか？」

レナードの言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

プレシア「．．．私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサ
よ」

レナード「俺はレナードだ」

レナードはフェイトを抱いたまま立ち上がった。

レナード「アルフ！」

レナードは大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄った。

アルフ「フェイト！！」

レナード「フェイトを連れて傷の手当をしろ」

そう言っ
てレナードはアルフにフェイトを預けた。

アルフ「う．．．うん。レナードは？」

レナード「俺はあの人と話がある」

アルフ「・・・レナード・・・気を付けなよ・・・」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋にはレナードとプレシアの二人つきりになった。

レナード「貴方、フェイトの母親だろ？何であんな仕打ちをした？」

プレシア「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収して来たジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから躰をしただけよ」

プレシアの言葉にレナードは怒りを燃やした。

レナード「・・・フェイトがどれだけ頑張ったか・・・どれだけ辛い思いをしたのか、分かっているのか？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

プレシア「さあ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

レナード「貴様あ！！」

プレシア「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷がレナードに向かって放たれた。

レナード「ちっ！」

レナードは横に跳んで雷をかわした。

プレシア（速い！）

レナードの素早さにプレシアは少し驚いた。

プレシア（魔力による肉体強化？違うわ。あの男は魔力はあるけどそんな事はしていない）

プレシアは杖をレナードに向けて再び雷を放つ。

レナードの魔法は詠唱が長い為避ける事しか出来ない。

プレシア「何時まで逃げ切れるかしら！？」

プレシアの容赦の無い雷がレナードに迫る。

レナード「くっ！」

レナードは後ろに跳び、雷はレナードの前に落ちた。

後ろを向くと壁があった。

レナード（まずい！このままじゃ壁にぶつかる！）

だがレナードは、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ。

プレシア「！！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

レナード「うわっ！」

レナードは床に倒れた。

レナード「何だここは？隠し通路か？」

立ち上がりながらレナードは隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

レナード「なっ！？」

ソレを見てレナードは驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースの様な物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

レナード「・・・フェイト・・・！？」

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

レナード「では早速、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「ほほ。レナード君もジュエルシードの危険性に気づいたみたいですね」

銀時「ユーノを使ってなのは説得しようとしてるけどよ、たぶんダメだろうな」

ソラ「なのはの性格から考えるとそうだろうな」

黒龍「フェイトもフェイトで頑固な所がありますからね」

銀時「それによ、次回はなんかメンドーな事になる気配がプンプンだな」

ソラ「アリシアの存在に気づくアレだな」

黒龍「どうなるか気になりますね」

銀時「それとクロノが切れ痔になるかどうかも気になるな」

ソラ「そこはどうでもいいだろ」

黒龍「それじゃあ質問します。

1 白騎士君さんに質問です。『劇場版銀魂〜新訳紅桜編〜』は見ましたか？

2 白騎士君さんはバイオハザード5はどれくらい怖かったですか？

3 レナードがこの世で一番恐れてるモノはなんですか？」

銀時「じゃあまたな」

ソラ「じゃあな」

黒龍「次回も楽しみにしています」・・・作者回答は？」

白騎士君「劇場には行っていませんが動画で見ました」

銀八「感想は？」

白騎士君「いや〜面白かったですよ。劇場版のラストシーンの銀さんカッコ良かったです。バイオハザード5はそれ程怖くないです。最初の頃は怖かったですが慣れました」

銀八「で？レナードの回答は？」

レナード「この世で一番恐れてるモノ、それは……
……女の裸だ！！」

銀八「やはりか！つつかぁなんでそんなに女の裸が苦手なんだよ？」

レナード「聞くな！思い出したくも無いんだ！！『黒龍』さん水が入ってるバケツを持って廊下に立ってなさい！」

白騎士君「感想待っています」

第十話 もう一人のフェイト（後書き）

白騎士君「お前大丈夫か？そんなの食べて？」

レナード「モグモグ。ひやにはあ？（何が？）」

フェイトの作ったおにぎりを食べているレナード。

レナード「ひゃへふ？（食べる？）」

白騎士君「いらんわ！そんな黒い塊なんか！」

レナード「ゴクンツ！次回『白騎士リリカルなのは』第十一話「命は一つだ」テイクオフ」

第十一話 命は一つだ（前書き）

フエイト「あれ？レナード、作者は？」

レナード「モグモグ。ん？作者はなんか黒神さんから貰った贈り物を食べたら倒れて40の熱を出したらしい」

レナードはsibugakiさんから貰った『ケモノダマシの実』を食べながらフエイトに答えた。なお、すでに50個、完食している。

フエイト「そ、そうなんだ。・・・『白騎士リリカルなのは』始まります」

第十一話 命は一つだ

レナードの前に、ガラス張りの大きなケースがあった。

その中には、緑色の液体の中を漂う金髪の少女がいた。

レナード「もう一人の・・・フェイト？」

中に居る少女はフェイトに瓜二つだった。

レナードがケースに近づこうとした時、

プレシア「アリシアに近寄らないで！！」

レナード「！」

プレシアの怒声と共に雷がレナードを襲った。

レナード「うわっ！！」

レナードはなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

レナード「これはどう言う事だ？」

レナードは目の前に居るプレシアを睨み付けた。

レナード「何でフェイトがもう一人居るんだ？」

プレシア「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

レナードの言葉にプレシアは鼻で笑った。

プレシア「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

レナード「人形だと・・・？」

プレシアの言葉に、レナードは目を細めた。

プレシア「フェイト・テストロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。”フェイト”の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

レナード「な・・・！？」

レナードは目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

プレシア「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

レナードは黙って聞いている。

プレシア「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった・・・何時も私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

プレシア「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカッと見開かれた。

プレシア「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』に向かって、アリシアを蘇らせるのよ!!」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

レナード「違う」

レナードの言葉に上げていた視線をレナードに戻した。

レナード「プレシアさん。貴方は娘の為に、娘を生き返らせ様としてる訳じゃない」

プレシア「………何ですって？」

レナードの言葉にプレシアは目を鋭くする。

レナード「フェイトを造ったのも、アルハザードに行って娘を生き返らせ様としてるのも全部、自分の為だ」

プレシア「!?!」

プレシアの目が見開かれる。

レナード「貴方は自分の寂しさを埋める為に、フェイトとアリシアの魂を弄んでるんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る力が入る。

プレシア「………黙りなさい」

レナード「貴方は、娘が死んだ事実から逃げてるだけなんだ」

プレシア「……黙れ」

レナードの言葉に心に突き刺さる。

レナード「今の貴方が、胸張ってアリシアに”母親”だと言えるのか!?!」

プレシア「黙りなさいって言ってるのよ!?!」

プレシアから、巨大な雷がレナードに向かって放たれた。

レナード「ぐあああああ!?!」

雷はレナードに直撃した。

プレシア（避けなかった!?）

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷が収まる。

レナードは火傷を負い、服は所々焦げて煙が出てる。

肩で息をしながらレナードはプレシアを見る。

レナード「・・・気が済んだか？」

プレシア「く・・・！五月蠅い！その減らず口を黙らせ・・・」

杖を揚げようとしてプレシアの動きが止まった。

プレシア「う・・・ごほっ！」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝を付いて咳き込んだ。

レナード「どうした!？」

プレシアの異変にレナードが駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

レナード「プレシアさん・・・まさか病に・・・」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

プレシア「・・・ふふ。大魔導師でも・・・不治の病は治せないの

よ．．．」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

プレシア「．．．私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前のレナードを睨み付ける。

レナード「．．．そんな事はしない。貴方を殺すのが目的じゃない。それに．．．」

レナードは一旦、言葉を切った。

レナード「フェイトが悲しむ」

プレシア「．．．．．．．．．」

プレシアは顔を俯かせた。

プレシア「レナード．．．」

レナード「ん？」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

プレシア「貴方なら．．．雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その剣で切ったはずよ．．．．．何故そうしなかったの．．．？」

レナード「言っただけです、俺は貴方を殺すのが目的じゃない」

溜め息をしてレナードは答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

プレシア「・・・レナード・・・」

レナード「今度は何ですか？」

プレシア「・・・私は・・・間違っていたの・・・？」

俯いたままプレシアはレナードに聞いた。

だがレナードはその問いには答えない。

プレシア「もし・・・間違っているなら・・・私は・・・
私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

レナード「・・・さあ」

レナードは歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前でレナードは足を止めた。

レナード「ただ」

プレシア「！」

プレシアは振り返ってレナードの後ろ姿を見た。

レナード「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中で貴方だ
けなんだ」

プレシア「!!」

レナードの言葉にプレシアは目を見開いた。

レナード「じゃあ」

レナードは通路から出て行った。

一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

プレシア「アリシア．．．．．私は自分の為に．．．貴方を弄
んでいたの．．．?」

近寄ってケースに触れる。

プレシア「私は．．．どうすれば．．．．．」

プレシアは力無く床に座った。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

プレシア「フェイト．．．」

廊下を歩いて、フェイト達が居る部屋を目指すレナード。

レナード「・・・これはプレシアさんを説得するのは無理かもしれないな」

レナードは悩んでいた。

レナード「全く。とんでもない頑固親子だな」

レナードはフェイト達が居る部屋に入った。

アルフ「レナード!」

レナードに気付いたアルフが駆け寄った。

アルフ「あんた・・・! 如何したんだい、その体は!？」

プレシアの雷を受けてボロボロになったレナードの姿を見てアルフが叫んだ。

レナード「ん? これはアレだ。ケーキ作りに失敗したんだ」

アルフ「何言つてんだい！？あの女にやられたんだろ！？」

レナード「大丈夫だ。それよりフェイトは？」

レナードは、ベットで寝てるフェイトを見た。

アルフ「・・・今は落ち着いて眠ってるよ」

レナードは椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

フェイト「ん・・・」

フェイトが目を覚ました。

アルフ「フェイト！」

アルフが目には涙を浮かべる。

フェイト「・・・アルフ・・・レナード・・・」

フェイトは二人を見て小さく呟いた。

レナード「よお」

レナードが声を掛けた。

フェイトはボロボロになってるレナードの姿を見て驚いた。

フェイト「レナード・・・！その傷・・・如何したの？」

レナード「これか？」

レナードは、アルフにも言った言葉を口にした。

レナード「ケーキ作りに失敗した」

翌日。

レナードはフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシード集めを続ける事になった。

屋上にレナード達が立ってる。

フェイト「もうすぐ発動するジュエルシードが近くにある」

夕焼けの空を見上げながらフェイトが言う。

後ろにはレナードと狼形態のアルフがいる。

レナード（マズイな・・・今はまだフェイトにアリシアの事はバレ

っていないが、ジュエルシード集めれば、いずれバレる)

レナードは表情を険しくして考える。

レナード(何か・・・何か方法は・・・・・・無いか!?)

夕方。

学校からの帰り道。

なのははユーノと出会った。

ユーノが赤い宝石をなのはに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

なのは「レイジングハート。直ったんだね?よかった」

レイジングハート』ご心配をお掛けました』

レイジングハートは、なのはに答える。

なのは「また、一緒に頑張ってくれる？」

レイジングハート『はい、マスター』

なのははレイジングハートを握った。

なのは「ありがとう」

レナード達はジュエルシードがある場所にやって来た。海が見える公園。公園内にはレナード達以外、誰も居ない。

公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。

一本の木の中に、ジュエルシードが入っていた。木に変化が起こる。

木の化け物「ゴオオオオオオオ!!」

二本の腕が生えた巨大な木の化け物になった。

レナード「なんか、俺の世界にいったトレントに似てるな」

木の化け物を見ながらレナードが呟いた。

アルフ「フェイト」

アルフがフェイトに声を掛けた。

フェイト「うん。あの子達も居る」

フェイトは、なのは達の姿を捉えた。

レナード「フェイト」

今度はレナードがフェイトを呼んだ。

フェイト「何？」

レナード「あの化け物の相手は俺がするから、お前は封印だけやってくれ」

フェイト「え？」

レナードの提案にフェイトは戸惑った。

フェイト「でも・・・」

レナード「言っただろ？」

レナードはフェイトの頭に手を乗せた。

レナード「お前はまだ子供なんだから、もっと周りを頼れ」

フェイト「！」

レナードは前に出る。

木の化け物と対峙するレナード。

なのは「レナードさん！」

レナードの姿を見つけたなのは声を上げた。

ユーノ「まさか・・・彼は一人でアレに立ち向かうつもりなのか！
？無茶だ！」

ユーノは、レナードの行動を無謀だと思った。なのははレナードの所に走り出しユーノはなのはの跡を追う。

木の化け物は、目の前に居るレナードを睨み付けている。

木の化け物「ゴオオオオオ！」

レナードを睨みながら木の化け物は雄叫びを上げた。

レナード「全く。五月蠅いヤツだな」

そう言ってレナードは、腰に差してあるエクスカリバーを抜いた。

その時。

なのは「レナードさん！」

ユーノ「レナードさん！」

なのはとユーノがやって来た。

レナード「なのは、ユーノ！？」

レナードは振り返って二人を見た。なのはとユーノはレナードの後ろで足を止めた。

なのは「レナードさん。あの時の傷は大丈夫なんですか？」

レナード「ああ」

レナードは後ろに居る、ユーノを見つけ近付きしゃがんで小声でユーノと話した。

レナード「ユーノ、ジュエルシード集めを止めろって言っただろ？（ヒソヒソ）」

ユーノ「すみません。なのはを説得する事が出来ませんでした（ヒソヒソ）」

ユーノは小声で謝りながらレナードに言った。

なのははそれを見て首を傾げる。

ユーノ「そう言うレナードさんこそ、ジュエルシード集め止めてないじゃないですか。あの二人の説得は如何したんですか？」

ユーノは目を細めてレナードを睨む。

レナード「仕方ないだろ。こっちだって色々あるんだから」

二人がそんな会話をしていると、

木の化け物「ゴオオオオオオオ!!」

木の化け物が雄叫びを上げた。

レナード「何だ？無視されて怒ったのか？」

レナードは再び木の化け物を睨み付ける。

なのはもレイジングハートを構えようとしたが、レナードに止められた。

なのは「レナードさん!？」

レナード「なのは。あの化け物は俺がやるから離れてくれ」

と、レナードはなのはにそう言って下がらせた。

木の化け物「ゴオオオオオ!!」

木の化け物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そしてレナードに目掛けて木の根を振り下ろす。

レナード「さて、行きますか！」

レナードはそう言つて木の化け物に目掛けて走り出した。

レナード「てやああああ！」

レナードは、エクスカリバーを振るつて次々と襲い掛かる木の根をもともせず、レナードは木の化け物に迫る。

アルフ「つ．．．強い！」

戦いの様子を見るアルフが驚きの声を上げた。

フェイト「レナード．．．こんなに強かったんだ．．．」

隣に立つてるフェイトも驚いてる。レナードが強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

ユーノ「レナードさん．．．強い！」

なのは「凄い！」

ユーノとなのはもレナードの実力に驚いていた。

特にユーノは魔力があるのに魔法を使わずに、あの木の化け物と戦ってるレナードの力に驚愕を隠せなかった。

ユーノ「一体・・・彼は何者なんだ？」

レナード「うおおおおおお！！」

レナードは木の根を斬ったり防いで木の化け物の目の前まで迫り攻撃するが、

木の化け物「ガアアアア！！」

木の化け物は、防壁を展開して防いだ。

レナード「くっ！」

レナードは一旦、木の化け物から離れた。

アルフ「あいつ、生意気にバリアなんか張ったよ!」

フェイト「今までのより強いね」

フェイトはバルディッシュを持つ手に力を入れる。レナードを助きたい気持ちを必死に抑える。

フェイト（大丈夫・・・レナードならきつと・・・）

フェイトはレナードを信じて待った。

木の化け物「ゴオオオオ!」

木の化け物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

レナード「近所迷惑だ」

レナードの目を鋭くしエクスカリバーを下右斜めに構えて、

レナード「ソニック」

レナードは凄まじい気迫を放つ。

木の化け物「ゴオオ!」

レナードの気迫に、初めて木の化け物は動揺した。

レナード「エッジ!」

レナードはエクスカリバーを上左斜めに振り上げた瞬間、音速の衝撃波が出て来た。

木の化け物はすぐさま防壁を展開した。レナードの攻撃は防壁に当たり、ガラスが砕ける様な音を立てながら防壁は割れた。

レナード「はあああああ!!」

レナードは木の化け物の眼前にまで迫った。

レナード「これで！終わりだあああああ!!」

上段からエクスカリバーを振り下ろし、木の化け物を縦に斬った。

レナードは着地をした。レナードが斬った木からジュエルシードが出て来た。

アルフ「やった！やったよフェイト！」

フェイト「うん！」

レナードの勝利にアルフとフェイトは喜んだ。

レナード「フェイト！今の内に封印しろ！」

フェイト「あつ！は・・・はい！」

レナードに言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。

なのはもレイジングハートを構える。

なのは「ジュエルシード、シリアル7!」

フェイト「封印!」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟む様に対峙する。

フェイト「・・・ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

なのは「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

フェイト「・・・だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

なのは「私は・・・フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど・・・」

なのはもレイジングハートを構える。

レナード達は地上で二人の様子を見る。

レナード「何か・・・嫌な予感がする」

二人を見上げてレナードは言う。

ユーノ「まさか．．．なのはとあの黒い魔導師戦う気だ！しかもジュエルシードの近くで！」

ユーノは叫んだ。ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

レナード「待てえええええ！フェイト！お前そんな所で戦ったら、またジュエルシードが暴走するぞ！！」

ユーノ「なのは！一旦降りて！お願いだから降りて！！」

アルフ「フェイトオオオ！早まらないでえええ！！」

レナード達が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

レナード・アルフ・ユーノ「あああああああ！！！！」

レナード達は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ！」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

なのは・フェイト「?!?!?」

突然の乱入者に二人は驚いた。

???「ここでの戦闘は危険すぎる!」

地上に居るレナード達も呆然と見上げている。

クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しく事情を聞かせてもらおうか」

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はい。まずはこの人、ペンネーム『黒神』さんからの質問。
」

質問します。

レナードへ

その1 原作の最新話、新八のブリーフ姿を見てどう思いました？

その2 シヤマパイを50個送りましたのでどうぞ。

では♪

『一つ目の質問、レナード答える』

レナード「いや、なんとも思っていない」

銀八「思ってたねえーのか！．．．で、二つ目の質問．．．
黒ガミイイイイイ！テメエは何、毒薬を送ってるんだあああ
あああ」

レナード「黒神さん、シヤマパイは全部食べました♪」

銀八「マジか！？．．．．．つと言つ事で『黒神』さん廊下に立ってろ」

レナード「続いてペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「ついに、アリシアちゃんの登場ですね」

銀時「アレじゃね？レナードならプレシア説教すんじゃない？」

ソラ「正義感強そうだからな」

黒龍「そろそろ、管理局登場ですね」

銀時「ああ、あの偽善者集団ね」

ソラ「気に入らない組織か」

黒龍「まあ俺も管理局の偽善ぶりには愛想が尽きますね」

銀時「じゃあとりあえず質問いったらどうだ？」

黒龍「そうですね。じゃあ質問します。

1 レナードに質問。管理局の偽善を見てどう思いますか？

2 レナードに質問。ぶっちゃけ、屁怒組様を見てどう思いますか？

今回はこの二つです」

ソラ「だいたい予想できるな」

銀時「だな」

黒龍「次回も楽しみにしています」『では、『黒龍』さん一つ目の質問をお答えします。確かに管理局は偽善の組織でやり方が許せない。だが」

銀八「だが？」

レナード「その管理局が変わる事を俺は信じた。彼らが自分達のやり方が間違ってる事に何時か気付く事を」

銀八「そうだな」

レナード「．．．．．では二つ目の質問は．．．あの人の何処が怖いんだ？」

銀八「いや、怖いだろ普通に！？」

レナード「『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

第十一話 命は一つだ（後書き）

銀八「・・・レナード。そのダンボールは何？」

レナードの手には大量のダンボールを持っていた。

レナード「これか？黒神さんから貰ったシャマパイとシャマル鍋50日分と残りの『ケモノダマシの実』で作った漬物だ」

銀八「終わった！俺の人生終わった！！」

レナード「次回『白騎士リリカルなのは』第十二話「時空管理局」
テイクオフ

その頃、作者は・・・

白騎士君「うゝん」

なのは「大丈夫ですか？」

ユーノ「おかゆ作って来ました」

今、作者はレナードにシャマパイ食べさせられて40の熱を出し

ている

白騎士君「二人ともありがとう（嬉し泣き）」

第十二話 時空管理局（前書き）

白騎士君「自分、復活！」

電〇のポーズをマネしている作者。

なお作者は黒神の贈り物のシャマパイをレナードが無理やり食べさせられて40の熱を出して、なのはとユーノに看病されて治ったのだ。

レナード「復活するの早いな」

白騎士君「まあね。今回の話ではあの組織がちょっとだけ出ます」

アルフ「『白騎士リリカルなのは』始まるよ！」

第十二話 時空管理局

クロノ「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。

ジュエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

レナード（管理局のお出ましか・・・）

レナードは、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を陰しくした。

フェイトと、なのはの間に立ってるクロノは交互に二人を見た。

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら・・・」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降って来た。

クロノ「はっ！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。

全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

アルフ「フェイト！レナード！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシールドに目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。レナード達も離れる。魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

レナード「フェイトッ！」

レナードは、素早くエクスカリバーを魔力弾に向かって投げた。投げたと同時にレナードは走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾はレナードの投げたエクスカリバーによって弾かれた。

フェイト「ああっ！」

フェイトは、魔力弾とエクスカリバーがぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

アルフ「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。

クロノは意識をフェイト達からレナードに向けた。

クロノ「何の真似だ!？」

レナードに向かって叫びながら黒いデバイスを構える。

だがレナードはクロノには何も答えない。

クロノ「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾をレナードに向かって放つ。

レナードは魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

アルフ「レナード！」

アルフが叫んだ。

レナードとクロノの距離はどんどん縮まる。

クロノ（こいつ！魔力があるのに魔法を使ってない！なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノはレナードの身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃った。レナードは上に跳んで魔力弾をかわした。

クロノ（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだレナードの姿を見た。

レナードの右手には、先ほど投げたはずのエクスカリバーが握られていた。

クロノ「なっ!？」

レナード「ふっ!」

レナードは、上段からエクスカリバーを振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、エクスカリバーをクロノの顔に向けた。

レナード「チェックメイトだ。管理局さん」

そう言って、レナードはニヤリと笑った。

レナードが上に跳んだのは、落ちて来るエクスカリバーを掴む為。

その場に居る全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユーノは驚愕を隠せなかった。

アルフ「か．．．勝っちゃった．．．」

レナードの後ろに居るアルフは、開いた口が塞がらなかった。

アルフ（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔

導師にレナードは勝った！？しかもアツサリと！？）

木の化け物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

フェイト「凄い・・・」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

エクスカリバーを突き付けられてるクロノは動けなかった。

クロノ「き・・・君達はどれだけ危険な事をしているのか分かって
いるのか！？」

レナード「さあ？どれだけ危険か教えてくれませんか？黒井教務
官さん」

クロノ「僕はクロノだ！それに教務官じゃなくて執務官だ！」

レナードに向かってクロノが怒鳴る。

レナード「そう怒らないで下さいよ。黒田君」

クロノ「クロノだ！！」

またクロノが怒鳴った。

レナードの後ろで様子を見てるアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、レナードはチラッとアルフに目配せした。

アルフ「！」

アルフはレナードの意図に気付いた。レナードは”逃げる”とアルフに目配せしたのだ。

アルフ（レナード．．．．．ありがとう．．．ごめんよ．．．）

アルフは心の中でレナードにお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、アルフは去って行った。

なのは「フェイトちゃん！」

なのははフェイト達が去って行くのを見て、声を上げる。

クロノ「しまった！」

クロノは顔を険しくして、レナードを方に向いて鋭い目で見つめる。

クロノ「．．．貴方。わざと僕を怒らせて．．．」

レナード「何の事だ？」

クロノ「くっ」

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

???「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情も色々聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

公園。

レナード達の前にリンディの映像が現れた。

リンディ「クロノ。お疲れ様」

クロノ「すみません。片方は逃がしてしまいました」

リンディ「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線をレナード達に向けた。

リンディ「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら?。」

クロノ「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をする则映像は消えた。

その頃・・・

茂みの中でレナード達の様子を見ていた二人の黒いフードの男達。

黒いフード男A「まずいぞ！管理局の奴等、この世界に来たぞ！どうする！？」

黒いフード男Aが黒いフード男Bに話し掛けた。

黒いフード男B「落ち着け。奴等はロストログアを回収に来ただけだ。我々の存在に気付いた訳ではない」

冷静に答える黒いフード男B。

黒いフード男A「レダム司祭様に何て報告する？」

黒いフード男B「『管理局はロストログアを回収に来ただけで、我々の存在は気付いていません。だが管理局が居る間は、大きな行動は出来ません。目的である闇の書の探索を速めた方がよいかと』とレダム司祭様に報告しよう」

黒いフード男A「分かった」

黒いフード男達は話し合いを止めて転送魔法を詠唱し消えた。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はい。まずはこの人、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。
」

銀時「レナードの奴も言うじゃねえか」

黒龍「そして現れた管理局」

銀時「ああ、KYな」

黒龍「銀さん、クロノ君嫌いなんですか？」

銀時「いや、なんかいつもあいつはKY呼ばわりされてるからよ」

黒龍「ま、まあ確かにそうですね・・・」

ソラ「ま、それが読者の見解なんだろ」

黒龍「それにしても、やっぱり浣腸するんでしょうか？」

銀時「黒神の奴か？」

黒龍「ええ。やっぱりクロノ君が頑としてレナードの意見を聞かなかつたらそうなるんじゃないかな」って」

銀時「ありえるな」

ソラ「まあ何しようとアイツの勝手だがな」

黒龍「そうですね。じゃあ質問しますか」

1、レナードに質問。フェイトがもし自分のお嫁さんになったらどうしますか？

2、レナードは原作のレナードとは段々違ってきてますけど、自覚

ありますか？

黒龍「今回はここまでです」

銀時「じゃあな」

『．．．．．確かにありえるな。んじゃレナード、一つ目の質問答える」

レナード「いや待て！フェイトと俺じゃ歳の差が違うだろ！」

フェイト「私とレナードが私とレナードが私とレナードが私とレナードが私とレナードが私とレナードが私とレナードが（以下繰り返し）」

レナード「フェ、フェイト!？」

銀八「自分の世界に行ってるな。次の質問作者答える」

白騎士君「確かに自覚しています。原作のレナードはあんな事は言わないと思います．．．．．多分」

銀八「はい、そう言う事で『黒龍』さん廊下に立って下さい」

第十二話 時空管理局（後書き）

レナード「確かにちょっとだけ出たなああの組織」

白騎士君「白騎士物語を知ってる人ならもう分かっているはずですよ」

フェイト「次回『白騎士リリカルなのは』第十三話「管理局と話
テイクオフ」」

第十三話 管理局と話（前書き）

白騎士君「あつううううううううううい」（パタパタ）」

銀八「何でこんなに暑いんだ！（パタパタ）」

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まります。．．．．．
暑い．．．（パタパタ）」

あまりの暑さに団扇を扇ぐ三人。

第十三話 管理局と話

レナード達はアースラにやって来た。

レナード「もう．．．何でもありだな」

レナードが呟いた。

使い魔やらジュエルシードなど、色んなモノを見て来たレナードは、もう驚きはしなかった。

先頭に立つてるクロノが、なのは達に振り返った。

クロノ「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

なのは「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

クロノ「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

ユーノ「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

なのは「え？」

なのは首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

なのは「えっ!？」

ユーノの姿を見て、なのは驚いた。

レナードは、

レナード「やっぱりか」

と、呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

ユーノ「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔をなのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

なのは「ふええええええ!!？」

アースラに、なのはの声が響いた。

ユーノ「な・・・なのは？」

ユーノは首を傾げた。

なのは「ユーノ君って．．．ユーノ君って．．．嘘お！？」

なのはは、ユーノの正体に動揺隠せなかった。

レナード「そんなに驚く事か？家のい．．．狼も人の姿に変身してたじゃないか」

レナードは冷静に言う。

クロノ「君達の間で、何か見解の相違でも？」

ユーノ「えっと．．．な、なのは、僕達が最初に出会った時って、僕はこの姿じゃ？」

なのは「違う違う！最初からフェレットだったよー！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

ユーノ「ああっ！」

そして思い出した。

ユーノ「ああ。そ、そうだそうだ！ごめんごめん！こ、この姿見せてなかった」

なのは「だよね！？そうだよね！？ビックリしたー！」

なのは大きく息を吐いた。

レナード「ん？そういえば・・・」

レナードも何か思い出した。

レナード「海鳴温泉の時、ユーノ。お前フェレット姿で、なのはの肩に乗って何かのぼせていたらしいけど何かあったのか？」

ユーノ・なのは「・・・・・・・・！！！」

思い出した、海鳴温泉の時ユーノはなのはに女湯に連れて行かれ一緒に入ったのだ。二人は顔を赤くして俯かせた。

レナード「どうした？」

レナードは首を傾げる。

なのは・ユーノ「い、いえ！何でもないです！」

なのはとユーノは首を横に振りながら答えた。

その後、なのはとユーノは念話をした。

ユーノ（なのは、ごめんね。初めて出会った時にこの姿で自己紹介していれば・・・・・・）

なのは（ううん。ユーノ君は悪くないよ。あの時の事は、私の方が悪かったんだから）

ユーノ（なのは。．．．．分かったよ）

どうやら二人は海鳴温泉の時の事で謝罪した。

クロノ「艦長。来てもらいました」

レナード達は艦長が居る部屋に到着した。

中に入って、レナード達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

何なのこの妙な和風空間？となのはは思った。

レナードの場合は、何だこの妙な空間？この世界の風習か？と思った。

畳の上には、艦長のリンディが正座していた。

リンディ「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

笑顔でリンディが言った。とりあえずレナード達は畳の上に座った。

リンディ「どうぞ」

レナード達の前に、お茶と羊羹が差し出された。

なのは「ありがとうございます」

なのはが礼を言った。

リンディ「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラウンです」

それから互いに自己紹介をしてレナード達は、これまでの事をリンディ達に話した。

リンディ「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

ユーノ「・・・それで僕が回収しようと・・・」

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど同時に無謀でもある！」

クロノ言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

なのは「あの、『ロストロギア』って何なんですか？」

なのはがリンディ達に尋ねた。

事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

なのは「あっ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリンディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

レナード「あの・・・リンディさん」

リンディ「はい？」

レナードはリンディに質問した。

レナード「今のがこの世界のお茶の飲み方ですか？」

レナードの質問になのはとユーノ、そしてクロノがズッコケた。

なのは「レ、レナードさん!？」

ユーノ「レナードさんそれは違います!絶対違います!」

クロノ「すみません。それ艦長の趣味なんです」

なのは達はなんとか数分間、説明させて納得したレナードであった。リンディがコホン、と小さく咳をする。

リンディ「これよりロストログア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

なのは・ユーノ「えっ!？」

リンディの言葉に、なのはとユーノは戸惑った。

クロノ「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

なのは「でも・・・そんな・・・」

クロノ「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。

リンディ「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

レナードは、リンディの言葉に目を細めた。

レナード「ちょっと待て下さい」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、レナードが口を開いた。

リンディ「何かしら？」

リンディがレナードに顔を向けた。

レナード「何で考える時間なんて与えるんですか？民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなものは必要無い筈だ」

リンディを睨みながらレナードが言う。

レナード「まっ、貴方の考えてる事は大体読めた。大方、なのは達の方から協力を申し出るようにに誘導して、足りない人員を補強しようって魂胆、ですよな？」

レナードの鋭い眼がリンディを射抜く。

リンディ「.....」

リンディは無言で表情を険しくした。

クロノ「本当ですか艦長！？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていた様だ。

レナード「そんな姑息なマネをしないで、堂々となのは達に頼んだらどうだ？そしたら俺も余計な口は挟まない。決めるのはなのは達だ」

そう言つて、レナードは腕を組んだ。

暫く場が沈黙に包まれた。

なのは「あ．．．あの．．．!」

なのはが沈黙を破った。

なのは「私にお手伝いさせて下さい!」

全員、なのはへ振り向いた。

なのは「その．．．リンディさんに言われなくても．．．きっと私、自分から頼んでいたと思います」

クロノ「し．．．しかし．．．．．」

なのはの言葉にクロノが戸惑う。

なのは「お願いします!」

立ち上がって、なのはは頭を下げた。

ユーノ「ぼ、僕もお願いします!」

ユーノも立ち上がって頭を下げた。

レナード「だつてさ艦長さん」

レナードが笑みを浮かべて言った。

レナード「確かに貴方のやり方は気に入らないが。けどなのは達は、貴方に言われたんじゃないく、本当に自分の意志で手伝うと言っ

ている」

レナードは真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディもレナードの視線を受け止めてる。

リンディ「．．．．．分かりました。あなた方の乗艦を許可します」

クロノ「艦長！？本気ですか！？」

リンディ「二人の善意を利用しようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語った。

リンディ「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、貴方達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

なのは「い．．．いえ．．．そんな．．．」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

リンディ「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしくお願いします」

なのは「は．．．はい！よろしくお願いします！」

ユーノ「お願いします！」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

リンディ「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園に来て下さい」

なのは「はい！」

リンディ「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

クロノ「・・・はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。

なのはとユーノ、クロノが部屋にから出て行った。

リンディはレナードに顔を向けた。

リンディ「貴方はどうしますか？」

レナード「ん？俺か？」

レナードはお茶を飲み干した。

レナード「俺も協力するよ。なのは達だけじゃ心配だからな」

レナードはリンディに答えた。

リンディ「分かりました。貴方もこれからよろしくお願いします。それと・・・先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事をレナードにも謝った。

レナード「まあ・・・なのは達なら、どっちにしろ協力を申し出たと思うな」

レナードが言った後、リンディはレナードに質問した。

リンディ「一つ質問していいですか？貴方はなのはさんと同じ住人ですか？」

レナード「いや・・・この世界に跳ばされたんだ」

レナードは自分はこの世界に跳ばされたと答えた。

リンディは彼が次元漂流者だと分かった。確かになのはの世界の服装と違うのだ。

リンディ「どうやら貴方は次元漂流者ですね。こちらで調査すれば貴方の世界が見つかる筈です」

レナード「本当か!？」

リンディの話を、驚くレナード。

リンディ「少し時間は掛かりますが。貴方の住んでる国を教えてくださいませんか？」

レナード「バランドール王国だ」

リンディ「えっ!？」

レナードの答えに驚くリンディ。

レナード「どうしたんですか？」

リンディ「い、いえ。暫くの間アースラに居て下さい。夕食の時間ですし食堂へ案内します」

レナード「ありがとうございます」

レナードが礼を言い、リンディが先頭に立ってレナードを案内した。

リンディ（・・・バランドール王国って・・・まさか・・・
彼がね）

リンディはレナードを案内をしながら考え事をしていた。

レナード（・・・フェイトとアルフ・・・大丈夫だろうか？）

レナードは二人の事を思いながら、リンディの後を歩いた。

遠見市のマンション。

フェイトはソファーに座って、アルフはフェイトの前に座ってる。

アルフ「ごめんよフェイト……あたし……レナードを置いて来ちゃたよ……」

アルフは今にも泣きそうな顔をしていた。

レナードに目で逃げる、と言われたとはいえ、レナードを置いて来た事は辛かったようだ。

フェイト「大丈夫だよアルフ。レナードは次元漂流者だから、管理局は保護してくれるよ」

安心させるようにフェイトが言う。

アルフ「……ねえフェイト……もう止めようよ……」

アルフはフェイトに詰め寄った。

アルフ「本気で捜査されたら……此処だっていずればバレちゃう

よ」

フェイト「．．．でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

アルフ「あたしは．．．！」

アルフが声を荒げる。

アルフ「フェイトには幸せになってほしんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

フェイト「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃっているんだね．．．ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなかった。

アルフ「なら．．．約束して．．．あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に頑張るって！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

フェイト「うん。ありがとうアルフ．．．」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

フェイト（レナード．．．）

フェイトの表情が少し暗くなった。

フェイト（ごめんねレナード．．．無理しないって約束．．．破るかもしれない）

もう、レナードとアルフの騒がしい会話も聞けない。レナードの手料理も食べれない。レナードと一緒に寝れない。

いつも私達を心配してくれたレナード。

フェイトの目から一筋の涙が流れた。

フェイト（あれ．．．？もう泣かないって．．．決めたばかりなのに．．．．．）

アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いてる事に気付いていない。

フェイト（レナード．．．）

レナードの事を考えると、胸が苦しくなる。

フェイト（．．．会いたいよ．．．．．レナード．．．．．）

フェイトは、アルフに気付かれないように、そっと涙を拭いた。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はあい。ではまずこの人、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「レナードもやりますね」

銀時「まあ主人公だしな」

ソラ「白騎士で出てきた敵か・・・」

黒龍「闇の書を狙っているみたいですね」

銀時「じゃあ本格的に出てくんのはASあたりだな」

黒龍「白騎士変身もそのあたりでしょうね」

ソラ「さあな」

黒龍「じゃあ質問いきますか」

1 質問。レナードはこれからいくつフラグを立てるんですか？

2 フェイトに質問。レナードと新婚旅行に行くならどこですか？

黒龍「今回はコレです」

銀時「いつの間にか結婚した後に後の話になってなえか？」

ソラ「質問が思いつかないんだろ」

黒龍「次回も楽しみにしています」

『質問されたヤツ答える』

白騎士君「今のところは不明です」

フェイト「新婚旅行は・・・やっぱりレナードの生まれ故郷のバルンドール王国です」

銀八「と、言う事だ。『黒龍』さん廊下に立って下さい」

レナード「続いてペンネーム『黒神』さんからの質問。」

リクエストです。

レナードへ

もし、クロノがフェイトを見殺しするような事をして偽善的な事を言うのであれば、木刀で浣腸してやってイボ痔にしてください。

馬鹿でもこれなら反省して懲りますので。

『心配はない。そのつもりだ』

レナードは何時の間にかエクスカリバー持っている。エクスカリバーから黒いオーラが出ていた。

銀八（何か剣から黒いオーラが出てるんですけどおおおおおおお
おおおおお！？）

思わず心の中で叫ぶ銀八。

レナード「『黒神』さん廊下に立って下さい」

第十三話 管理局と話（後書き）

なのは「次回『白騎士リリカルなのは』第十四話「ジュエルシード回収」テイクオフ．．．．暑いな（パタパタ）」

ユーノ「うん（パタパタ）」

第十四話 ジュエルシード回収（前書き）

白騎士君「もうすぐ夏休み終わりか」

レナード「だけど、暑いのはまだ続くらしい」

フェイト「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第十四話 ジュエルシード回収

アースラの食堂。

此処でレナードは食事をしていた。

クロノ「ちよつといいかな？」

なのは達の送りに行つたクロノが、戻つて来た。

クロノ「レナード。貴方に聞きたい事があります」

レナード「ん？何だ？失望官さん」

クロノ「失望官じゃない！執務官だ！！いい加減覚えろ！」

レナード「はいはい」

レナードは手をヒラヒラ動かしながら答えた。

クロノが、コホンと咳をする。

クロノ「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情でレナードに尋ねるクロノ。

だが、レナードは。

レナード「あつ、すいません。ご飯の御代わりをお願いします。で、何の話だっけ？」

クロノ「人の話を聞けえええええ！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

レナード「あゝ。あの子の目的な」

クロノ「ちゃんと聞いてたのか!？」

クロノは肩で息をしている。

レナード「何だ？もう疲れたのか？若いのに」

クロノ「聞かれた質問にだけ答えろ!!」

さらに叫ぶクロノ。

レナード「質問の答えな。目的は分らない。ちなみにあの子は、ある人物に言われてジュエルシード集めしてるだけだ」

クロノ「それは一体誰なんだ？」

レナード「……さあ。俺もそこまでは分からない」

クロノ「本当か？」

クロノは疑いの目をレナードに向ける。

レナード「信じる信じないは、君の自由だ」

互いに睨み合う。

先に視線を外したのはクロノだった。

クロノ「・・・これ以上聞いても、何も言わないようだな」

クロノは溜め息を付いた。

クロノ「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来て下さい」

レナード「ああ」

レナードは軽く返事をし、クロノは食堂を去って行った。

翌日。

アースラ会議室。

局員達が椅子に座ってる。

その中にはレナード、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これからの事について説明している。

リンディ「・・・・・・と言う訳で本日をもって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

リンディ「また、今回は特例として問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師であるこちら」

リンディがユーノを見る。

ユーノ「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

リンディ「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

なのは「た・・・高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

リンディ「最後に一般の協力者です」

レナード「レナードだ」

レナードは普通に自己紹介をした。

森の中。

なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所に居た。

そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥が居た。怪鳥は、ユーノの緑色の鎖とレナードの白い鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

ユーノ「レナードさんもバインドが、出来るんですね」

レナード「殆んど使わないからな。まさか、こんな所で使うとはな。
．．．．．ところでユーノ」

ユーノ「はい？」

レナードがユーノに尋ねる。

レナード「不死鳥の鶏肉は美味しいのか？」

ユーノ「え！？．．．．．さあ？」

レナードの質問に戸惑うユーノ。

二人がそんなやり取りをしてる間に、なのははジュエルシードを封印した。

遺跡。

フェイトとアルフが居た。

アルフ「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」

フェイト「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

アルフ「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」

フェイト「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

フェイト（レナード・・・今頃どうしてるかな？）

時の庭園。

プレシアは一人玉座に座っていた。

プレシア（フェイト．．．．．今頃、私の為にジュエルシードを集めてるのかしら．．．．．）

プレシアは考えた。

プレシア（レナード．．．あの男の言葉を聞いてから．．．何故かフェイトの事を考えるようになったわ．．．．．）

レナードに言われた言葉を思い出す。

プレシア「ああ．．．そうか．．．．．」

プレシアは気付いた。

プレシア「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない．．．．．こんな事に今まで気付かなかったなんて．．．」

プレシアは溜め息を付いた。

プレシア「アリシアもフェイトも私の娘。私は二人の母親」

ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

プレシア「レナード．．．．．魔力はあるのに魔法を使わず、この大魔導師に向かってあんな事を言うなんて．．．．．いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑った。

プレシア「．．．自分の大切な者を．．．自分で傷つけていたなんて．．．．．」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しずつ暗くなっていた。

プレシア「何故．．．」

手が震える。

プレシア「何故．．．．．やっと大切な者をに気付いたのに．．．．．」

目には涙が浮かぶ。

プレシア「私は死に近付いていくの？」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。 フェイトが大事だって気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆った。

プレシア「・・・フェイト・・・」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

クロノとオペレーターのエイミー・リミエッタがフェイトについて調べていた。

クロノ「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

エイミィ「じゃあ、その関係者かな？」

クロノ「分からない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしれない」

クロノがそんな事を言った時、エイミィは何か考え事をしていた。

クロノ「どうした？エイミィ。なんか考え事をしているけど」

エイミィ「え？実は．．．．．レナードさんからロストログリア反応があつたの」

クロノ「なんだて！？」

エイミィの話に驚愕するクロノ。

エイミィ「うん。最初は機械の故障かと思ったけど、レナードさんに反応していたの」

クロノ「ランクは？」

そうクロノに聞かれたエイミィは、今も信じれないと言った表情で小さく答える。

エイミィ「．．．．．SSS+だよ．．．」

クロノ「なっ！？」

流石のクロノでも驚き目を丸くする。

ジュエルシールドよりもさらに高いランクを持つロストロギア、もし危険な物ならかなり確率で人に被害が及ぶ。

クロノ「何処に反応しているんだ！？まさか！彼が持っている剣が！？」

クロノはレナードの、剣が反応していると睨む。

エイミィ「ううん。私も最初は剣に反応してると思ったけど、違ってたわ」

剣には反応してないと答えるエイミィ。

クロノ「じゃあ・・・一体何処にあるんだ？」

レナード達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

レナード達は食堂に居た。

それぞれの料理を持って、席に着いた。

ユーノ「あの・・・レナードさん・・・」

ユーノが声を掛けた。

レナード「何だ？」

レナードは、ユーノを見た。

ユーノ「フェイトの事なんですけど・・・本当に管理局に保護を頼まなくていいんですか？」

ユーノは、前から思ってた事を口にした。

公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護ったのだ。レナードな

ら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

レナード「今、フェイト達を管理局に保護してもらっても、何の解決にもならない」

料理を食べながらレナードは答えた。その顔は険しかった。

ユーノ「何か訳があるんですか？レナードさん」

レナード「まあな」

レナードは、箸をテーブルに置いた。

レナード「フェイトは、まだ子供なのに一人で何でも背負うとして、無茶ばかりするんだ」

そう言つてレナードは腕を組んだ。

なのは「・・・レナードさん」

レナード「ん？」

唐突に、なのはがレナードに話し掛けた。

なのは「私もね。小さい頃はよく一人だっただんだ」

レナード「・・・そうか」

レナードは腕を組むのを解いて話を聞く。ユーノも黙って話を聞い

てる。

なのは「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって……しばらくベットから動けなかった事があるの」

なのは話を続ける。

なのは「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

レナード「……………」

なのは話を、レナードは黙って聞いている。

話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた。

なのは「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で……………」
「から私、割りと最近まで家に居る事が多かったの」

そう言って、なのはは笑顔を作った。

なのは「レナードさん」

レナード「ん？」

なのは「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

レナード「……………」

レナードは黙って、なのはの答えを待つ。

なのは「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分こに出来る事だと思うんです」

なのはが答えを言う。

答えを聞いたレナードは、静かに目を閉じた。

かつてレナードは赤ん坊の頃、シンナイトを動かす道具だった。親の顔も知らない。一人だった。しかし、レナードには仲間が出来た。冒険の中で出会い、時には別れ去った者もいたが、分かり合い戻って来た。だから、今のレナードも、一人ではない。

レナードは目を開けた。

レナード「・・・そうだな」

そう言ってレナードは微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はい、ではまずこの人、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「確かに最近暑いですね。まあ家にはクーラーがあるから快適ですけど」

銀時「なんだア？俺ら万事屋にはクーラーなんて贅沢なもんはねえんだぞコラ！！自慢かこの野郎！」

なのは「な、なんか銀さんが怖いの・・・」

ソラ「今年は例年に増して暑いからな」

銀時「イライラする！！暑いのが余計にイライラする！！」

黒龍「まア我慢するしかないでしょ」

ソラ「また扇風機か・・・」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1・レナードに質問。クロノをどう思いますか？

2・フェイトに質問。レナードを好きな女性が居たらどうしますか？

黒龍「じゃあ今回はここまでです。次回も楽しみにしています」
質問されたヤツ答える」

レナード「クロノ？まあ・・・クロノは正義感はあるが・・・」

銀八「あるが？」

レナード「もし黒神さんの言うとおりフェイトを見捨てるような事があるなら・・・その時は・・・（ジャキッ）」

レナードはエクスカリバーを抜いた。何故か、レナードの後ろから黒いオーラが出ていた。

銀八「あれ？なんかレナードがものスゴく怖いんだけど・・・で、フェイトは？」

銀八先生はレナードの黒いオーラを見て冷や汗を掻き、フェイトの方に向く。

フェイト「勿論、皆殺しします」

フェイトはニコツと笑って言うてるが、まだ九歳なのに恐ろしい事を言うてる。

銀八（フェイトオオオオオオオオオオ！！！！まだ九歳なのに、何！？恐ろしい事を言ってるんだあああああ！！！！）

心の中でフエイトにツツコム銀八先生。

レナード「『黒龍』さん廊下に立って下さい。続いてペンネーム『支配者』さんからの質問。」

支配者「久しぶりに質問します。

レナードに質問

私が考えたあらゆる世界の全ての不味い食べ物を混ぜ合わせて作った『地獄汁』と言う物があるんですが飲んでみたいですか？因みにシヤマパイの百倍不味いです。

では、今日はこの辺で」
「ん？」

レナードは支配者の質問に片眉を上げた。

レナード「なあ、銀八先生。支配者さんの質問に間違いがあるぞ」

銀八「間違い？何処が？」

レナード「ほら、シヤマパイの所が不味いになっているぞ。美味しい間違いじゃないのか？」

銀八「それを思っているのはお前だけだ・・・（ぼそっ）」

銀八は小声でツツコンだ。

銀八「で？質問の答えは？」

レナード「ああ。飲んでみたいな美味しそうみたいだし」

銀八「マジかよ。と、言う事で『支配者』さん廊下に立って下さい」

第十四話 ジュエルシード回収（後書き）

ユーノ「次回『白騎士リリカルなのは』第十五話「管理局のやり方
には許せない」テイクオフ」

なのは「次回も見て下さい」

第十五話 管理局のやり方には許せない（前書き）

白騎士君「まだまだ暑いな」

レナード「ああ。『白騎士リリカルなのは』始まります」

第十五話 管理局のやり方には許せない

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

フェイト「アルタス、クルタス、エイギアス・・・」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

アルフ（海の中にあるジュエルシードの位置を特定する為に、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違っていないけど・・・）

アルフの表情が険しくなる。

フェイト「はぁあああー!!」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

フェイト「見つけた・・・残り六つ!!」

フェイトの呼吸が荒くなる。

アルフ（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて．．．いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒に居た。茶髪の男を思い浮かべた。

アルフ（レナード．．．．．あんなら．．．フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

フェイト「アルフ！」

フェイトがアルフに声を掛けた。

フェイト「空間結界とサポートお願い！」

アルフ「あ．．．ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

アルフ（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！レナードは体を張ってフェイトを護ったじゃないか！だったら）

アルフは決意を固めた眼をする。

アルフ（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。

フェイト「いくよバルディツシュ。頑張ろう」

バルディツシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

緊急事態のアラームを聞いたレナード達は、ブリッジに入った。

レナード達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

レナード「フェイト！」

なのは「フェイトちゃん！」

レナードとなのはが、フェイトの名を叫んだ。

リンディ「なんとも呆れた無茶をする子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った。

クロノ「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、レナードは眉を顰めた。

クロノ「あれは個人が出せる魔力を限界を越えている」

なのは「あの．．私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

クロノ「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

なのは「!？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

レナードは、表情を陰しくした。

クロノ「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを

叩けばいい」

なのは「でも・・・」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

クロノ「今の内に捕獲の準備を」

オペレーター（男）「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

リンディ「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。

画面を見上げていたレナードが口を開いた。

レナード「最善の選択？ 最低の選択の間違いだろ」

クロノ「何だと!？」

クロノは、振り返ってレナードを睨んだ。

レナード「前から管理局は腐っていると思っていたが、こんなに腐っているとはな」

クロノ「貴様・・・！口を慎め！！」

クロノがレナードに向かって叫んだ。

直後、レナードの眼がカツと見開かれた。

レナード「目の前で苦しんでる彼らを救おうともしないで、世界を管理するなんて大層な事を吐かしてんじゃない！！！」

レナードの怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンディだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

クロノ「貴方は、事の重大さが分か「少し黙れ」！？」

レナードは素早く後ろに回り、

ザシュ

クロノ「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

クロノのケツにおもいきりエクスカリバーを刺した。クロノはあまりの痛さに悲鳴を上げる。

それをリンディや局員は啞然と見ていた。

リンディ「あ、あの・・・その、いくらなんでもやりすぎですよ・・・」

リンディもクロノを止めようとしていたが、いくらなんでもレナードのやり方は酷いと思った。

レナード「聞きわけのない子供はこのくらいした方がいい」

レナードはエクスカリバーを抜き、悪びれた様子もなく、そう言う。

クロノ「．．．．．僕は子供じゃない！！何するんだ！！」

クロノは尻を抑えながら、怒鳴る。ちょっと涙目になりながらのた打ち回っていた。

クロノの怒鳴りにレナードは全く動じずになのは達の所に戻る。

なんとか立ち上がってまた近づこうとしたクロノをリンディが制した。

クロノ「か．．．艦長！？」

クロノは戸惑いながら、リンディに顔を向けた。

なのは「リンディさん！」

なのはの声がブリッジに響いた。

なのは「私．．．フェイトちゃんを助けたいです！！」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはが言った。その瞳には、

強い決意が宿っていた。

リンディ「……………分かりました。行動を許可します」

クロノ「艦長!？」

リンディの言葉に、クロノは驚いた。

なのは「ありがとうございます!」

ユーノ「急ごう、なのは!」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

その時、

レナード「なのは」

レナードが、なのはを呼び止めた。

なのは「は、はい」

なのはは、足を止めてレナードを見た。

レナード「悪いが今回は、俺は力になれない。空飛べないからな」

そう言ってレナードは、なのはに顔を向けた。

レナード「フェイトを頼む」

なのは「はい！」

レナードの言葉に、なのはは力強い声で返事をした。

ユーノ「なのは！早く！」

なのは「うん！」

なのはが、走り出した時、

レナード「それから、なのは」

再びレナードが、なのはを呼び止めた。

レナード「一つ、フェイト達に伝えてほしい事がある」

なのは「え？」

なのはは、首を傾げた。

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたか分からない。バルディッシュの魔力の刃も失った。

それでもジュエルシードを封印しようとした時。

フェイト「!!」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

アルフ「フェイトの邪魔をするなあああ!!」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。

間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

ユーノ「待ってくれ！僕達は戦いに来たんじゃない！」

アルフ「えっ？」

アルフが驚きの声を上げる。

ユーノ「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻き付いて動きを抑える。

なのは「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

なのは「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桃色の魔力が出る。桃色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入って行った。

バルディッシュ『パワーチャージ』

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

レイジングハート『スリープモード』

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

なのは「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

なのは「二人で”せーの!”で一気に封印するよ!」

レイジングハートを構える。

なのは「デイベインバスター、フルパワー!」

レイジングハート『了解。マイマスター』

なのはの足元に、巨大な桃色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

なのは「せーの!」

なのはが合図する。

フェイト「サンダー・・・」

なのは「デイベイン・・・」

二人ともデバイスを構える。

フェイト「レイジー!!!」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

なのは「バスター!!!」

桃色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桃色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

アースラのブリッジ。

エイミー「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました!」

オペレーターのエイミーが報告する。

クロノ「な・・・なんてデタラメな・・・!」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

画面を見ているレナードは、小さく微笑んだ。

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

なのは「えっと・・・半分個・・・で良いよね？」

フェイト「・・・」

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印をした。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろう

とした。

なのは「待つてフェイトちゃん！」

なのはは、フェイトを呼び止めた。

フェイトは振り返らずに止まった。

なのは「レナードさんが、フェイトちゃんとアルフさんに伝えてほしいって」

フェイト「えっ!？」

思わずフェイトは振り返った。隣にいるアルフも少し驚いた顔をした。

なのは「」また無茶したら、二人とも拳骨だ”って」

フェイト「．．．．．!!!」

フェイトは、目を見開いて一瞬肩を震わせた。

アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

なのは「フェイトちゃん．．．」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

マンションに向かうフェイトとアルフ。

フェイト（レナード．．．．私達の事．．．心配してくれて
たんだ．．．．．）

フェイトは、胸に手を当てた。

フェイト（ありがとうレナード．．．）

心の中でお礼を言いながら、フェイトとアルフと共にマンションに
戻った。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「では早速ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「レナードからロストロギア反応ですか・・・」

銀時「それってやっぱアレだよな？」

ソラ「白騎士か・・・」

黒龍「これから管理局がレナードに対してどう動くが問題ですね」

銀時「もしかしたら、追われる立場になるかも知れねえな」

ソラ「もちろん抵抗はするな」

銀時「ま、さすがにあのKYじゃ白騎士倒せないだろうしな」

黒龍「白騎士意外にチートに近いですから」

銀時「いや、さすがにチートはねえだろ」

黒龍「まあ人の見解にもよりますね。じゃあ質問します」

1. フェイトへ。なんとなのはがレナードの事を好きだと言っていました。どうしますか？（黒笑）

2・レナードへ。クロノがフェイトはどうしようもない犯罪者だと言っていました。どうしますか（黒笑）

黒龍「今回はこの二つです」

銀時「おいしいおいしい！！！！なにとんでもない質問してんだよ！！！」

黒龍「面白ければなんでもありです」

銀時「限度があるわ！！」

ソラ「じゃあな」

「黒龍ウウウウウウ！！！！てめえはなに二人を怒らせるような質問してんだあ！！！！じゃあフェイト質問を答え・・・・」

銀八は黒龍に怒鳴りながらフェイトに質問の答えを聞こうとフェイ

う訳で『黒龍』さん。二人を怒らせるような質問はしないで下さい。
続いてペンネーム『黒神』さんからの質問。』

質問します。

レナードへ

その1・力の剣と技の剣、どちらの剣が好ましいですか。

その2・リリカル銀魂が始まった原因は、そもそも新八が親衛隊の
隊員の一人である軍曹と言う男からリリカルなのはDVDを親衛
隊の鉄の掟として捨てようとしたけどこっさり保存したのが始まり
です。

それはすなわち、強盗と一緒にそうですね。

侍としてあるまじき行為に、どう思いますか？

では。

『ずばり答えます』

レナードはクロノを切り刻むのが終わって質問の答えを言う。

レナード「やっぱり力の剣だな。大切な者や仲間を守れるからな」

銀八「じゃあ、二つ目は？」

レナード「最初の行動は良いが、アニメのキャラクターを見て保存するとは侍失格だな」

銀八「と、言う訳で『黒神』さん廊下に立って下さい」

第十五話 管理局のやり方には許せない（後書き）

クロノとなのはは今、全身包帯まみれになりベットで横たわっていた。

白騎士君「二人ともどうしたんだ？」

銀八「修羅どもにやられたらしい」

白騎士君「そ、そう」

フェイト「次回『白騎士リリカルなのは』第十六話「決闘」テイクオフ」

第十六話 決闘（前書き）

銀八「いよいよ無印編も終盤に近づいたな」

白騎士君「長かったようで短かったような」

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まるぞ」

第十六話 決闘

会議室。

レナード、なのは、ユーノ、クロノとリンディが集まっていた。

クロノ「全く。勝手にジュエルシードを半分ずつ分けて・・・」

壁に寄り掛かりながら、クロノが溜め息を付いた。

なのは「す・・・すみません」

なのはが謝る。

レナード「何もしようとしなかった奴が、文句を言う資格があるのか？」

クロノ「何！？」

レナードの言葉に、クロノは喰って掛かる。

リンディ「止めなさいクロノ」

クロノ「・・・はい」

リンディに言われて、クロノは渋々下がった。

リンディ「クロノ。事件の大本について何か心当たりか？」

クロノ「はい。エイミイ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

エイミイ「はいはい」

スピーカーからエイミイの声が聞こえた。

エイミイの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

リンディ「あら」

レナード「！」

映像を見て、リンディは少し驚き、レナードは表情を険しくした。

クロノ「そう。僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサだ」

映像を見ながらクロノが説明する。

クロノ「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

なのは「テストロッサって・・・」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

クロノ「あのフェイトという少女は恐らく」

リンディ「プレシアの娘・・・ね」

リンディが険しい表情で呟いた。

なのはは、プレシアの映像を見つめる。

なのは「この人が、フェイトちゃんのお母さん・・・」

クロノ「プレシア・テストロッサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それから暫くの内に行方不明となる。今分かつてる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

リンディ「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言った。

なのは「あ・・・でも・・・」

リンディ「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」

優しく微笑みながらリンディが言う。

リンディ「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう。レナードさんも、その間は自由に休んで下さい」

そう言ってリンディは席を立った。

レナードは険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

レナード（プレシアさん・・・）

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しに来た。

プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立ってる。

フェイト「・・・ジュエルシードを、全ては回収出来ませんでした・
」

怯えながらフェイトが報告する。

プレシア「．．．回収したジュエルシードの数は．．．全部で九つ．．．」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

フェイト「ご．．．御免なさい、母さん．．．」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

プレシア「．．．．．．．．．．残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

フェイト「え．．．？あ．．．はい．．．」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。

何時もなら、此处でプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

プレシア「何をボートとしているの？早く行きなさい」

プレシア「．．．はい．．．」

言われてフェイトは部屋を出た。

扉の前で待ってたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。

二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

プレシア「ゴホッ．．．！ゴホッ．．．！」

プレシアは口を押さえて咳き込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池が出来ている。

プレシア「．．．．．私には．．．もう時間がないわ．．．．．」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。

プレシア「こんな私としても．．．フェイトは幸せにはなれない．．．」

自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

リンディ「……とまあ、そんな感じの十日間でしたのよ」

桃子「まあ、そうなんですか」

リンディと、なのはの母親の高町桃子は、意気投合して楽しく談笑している。

二人の様子を見て、なのはとユーノは内心苦笑いを浮かべていた。

一方、レナードはフェイト達が使ってるマンションの部屋にいた。部屋の中に、フェイト達の姿はなかった。

レナード「やっぱりいないか」

レナードは部屋を見渡した。

レナード「まあ向こうは、管理局と一緒にいる俺とは会いたくない
と思ってるだろうな」

言いながらレナードは、部屋に出ようとした。扉を開けて、一度振り返って誰もいない部屋を見た。

レナード「・・・じゃあな」

小さく呟いて、レナードは部屋を出て扉を閉めた。

時刻は夕方。

レナードは、高町家を目指して歩いていた。

なのは「あつ、レナードさん！」

歩いていると、なのはと出会った。

レナード「なのは。どうした？」

なのは「心配になったから、迎えに来ました」

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

レナード「そうか。わざわざ悪いな」

なのは「いいえ」

二人は並んで歩いた。

なのはは、隣に歩くレナードを見上げた。

なのは「あの・・・レナードさん」

レナード「何だ？」

なのは「レナードさんは・・・フェイトちゃんとは、どんな関係な
んですか？」

レナードを見上げながら、なのはが尋ねた。

レナードは顎に手を当てて、うつんと少し考えた。

レナード「保護者代理かな？」

なのは「保護者代理・・・ですか？」

レナード「ああ。何でそんな事聞くんのだ？」

今度はレナードが尋ねた。

なのは「えっと．．．フェイトちゃんの事を心配してる時のレナードさん．．．フェイトちゃんのお父さんみたいに見えまして．．．」

少し恥ずかしそうに、なのはが答える。

レナード「おいおい。俺はまだ18だ。まだお父さんって呼ぶ歳じゃないぞ」

なのは「ははは」

レナードの言葉に、なのはは笑った。レナードも軽く微笑む。それから二人は、なんてことない話をしながら家に向かって歩いた。

レナード「なのは」

なのは「何ですか？」

呼ばれて、なのははレナードを見上げた。

レナード「多分近い内に、フェイトはジュエルシードを手に入れる為に、なのはの前に現れる」

さっきまでと違って、レナードは真剣な表情で話す。

なのは「はい」

なのはも真剣な表情で、レナードの話を聞く。

レナード「分かっていると思うが、フェイトは強いぞ」

なのは「はい」

なのはは、頷いて答える。

なのは「フェイトちゃんと戦うのは辛いけど．．．．でも私、どうしてもフェイトちゃんを助けたいんです！」

強い決意を表すように、力強くなのはが言った。

なのはの、決意の顔を見てレナードは微笑んだ。

レナード「どうやら、次も俺の出番はないみたいだな」

なのは「レナードさん．．．」

レナード「なのは」

レナードは、なのはを見た。

レナード「思いっきりぶつかっていけ！」

なのは「はい！」

レナードの言葉に、なのはは笑顔で力強く答えた。

その後、高町家に着いて、レナードは翠屋の士郎が居る事に驚き、

なのはの父と聞いてさらに驚いた事を追加しておく。

二日後の早朝。

時間はAM5:27。

なのは達は家の門の前に立ってる。

レナード「ふあゝ。何でこんな朝早く出なくちゃいけないんだ？」

欠伸をかきながら、レナードは背伸びをする。

なのは「ごめんなさいレナードさん」

なのはは謝った。

レナード「別にいいけど」

そう言っつてレナードは歩き出した。

海鳴臨海公園。

時間はAM5:55。

なのは、レナード、ユーノの三人がいた。

なのはは小さく深呼吸をする。

なのは「ここなら・・・いいよ」

なのはが口を開いた。

なのは「出て来て、フェイトちゃん！」

姿の见えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。

朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。

なのはとレナードは、後ろに振り返った。

バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

フェイト「レナード・・・」

レナードを見つめながら、フェイトが呟いた。

レナード「安心しろ。これはフェイトと、なのはの戦いだ。俺とユーノは余計な手は出さない」

そう言ってレナードは腕を組んだ。

なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

なのは「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

なのは「逃げればいいってわけでもない」

真っ直ぐにフェイトを見つめる。

なのは「きっかけはジュエルシード・・・だから賭けよう。お互いが持つて全部のジュエルシードを！」

レイジングハート『プットアウト』

なのはの周囲にジュエルシードが現れる。

バルディッシュ『プットアウト』

フェイトの周囲にも九つのジュエルシードが出る。

なのは「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトも下段にバルディッシュを構える。

なのは「私達の全てはまだ始まってすらいない・・・」

レナードとユーノ、アルフが黙って見守る。

なのは「だから、本当の自分を始める為に・・・」

対峙する二人の魔導師。

なのは「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はあい、早速質問をするぞペンネーム『真王』さんからの質問。」

真王「クロノザマア（笑）」

ロリータ・ザ・ハード「このお兄ちゃん弱い」

サムライ・ザ・ハード「私だったらこう・・・アナログスティックをすりつぶすかな？」

真王「さすがに死ぬよ？」

ロリータ・ザ・ハード「ねえ？アナログスティックってなに？」

真王「知らぬが仏。質問タイムだ。『レナード、愛って何だと思う？』」

ナース・ザ・ハード「愛、それはためらわないこと」

真王「おめえに聞いてねえよ」

ロリータ・ザ・ハード「え〜っと『フェイトってレナードお兄ちゃんの裸見たあ？』」

サムライ・ザ・ハード「何エロい事言ってるの！？」

エッチ・ザ・ハード「エロいという単語を聞いて飛んできたあ！！レナードに恋をしている二人に！『大人になったら夜這いするの！？』」

サムライ・ザ・ハード「お前も何言ってるんだああああああああああああ！！！？？」

真王「收拾つかん。切り上げる。じゃあな」

『久しぶりの質問、全部エロい質問ばっかじゃねえか！質問された奴答える』

レナード「愛か．．．．．大切な人と傍にいる．．．かな？」

銀八「はあい。レナードの次にフェイト。次の質問を答える」

フェイト「レナードの上は見たけど下はまだ……」

銀八「フェイト！男の下は見てはいけません！次の質問もフェイトか」

フェイト「もちろんしようと思います！（ダラダラ）」

解答と同時に鼻血を垂らすフェイト。

銀八（鼻血を垂らしてるうううううううううう！?!?!?!?）

レナード「フェイト！鼻血！鼻血！」

レナードはフェイトが垂らしてる鼻血を拭いている。

何故フェイトが鼻血を垂らしているかそれは、三つ目の質問を聞いて、想像し、鼻血を垂らしてしまったらしい。

銀八「と言う事で『真王』さん。あまり工口い質問は程々に」

レナード「続いてペンネーム『Sibugaki』さんからの質問。」

クロノに質問

実は今回短編で上げた小説でクロノ君はあの『デビルマン』となりデーモンを次々と血祭りにあげました。

その光景を見てどう思いますか？

今回は以上です
では

クロノ質問の答えは？」

[illegible]

クロノはリリカルデビルマンを見て驚愕した。それもその筈、自分がデビルマンになり次々とデーモンを殺しているのだ。

レナード」と言う事で『sibugaki』さん廊下に立って下さい」

第十六話 決闘（後書き）

白騎士君「ついにフェイトとなのはが最後の勝負をします！」

レナード「次回『白騎士リリカルなのは』第十七話「決着！なのは対フェイト！！」テイクオフ」

第十七話 決着！なのは対フェイト！！（前書き）

なのはVSフェイト、勝つのはどっち？

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第十七話 決着！なのは対フェイト！！

アースラ。

エイミィ「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミィが言った。隣にはクロノが立っている。

クロノ「ああ」

クロノとエイミィは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。

なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

クロノ「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ」

エイミィ「おう！任せとけ！」

エイミィが親指を立てて返事をした。

公園の上空で、激しくぶつかり合う二人の魔導師。

バルディツシュ『フォトンランサー』

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

レイジングハート「デイベインシューター」

なのはも、複数の桃色の魔力弾を出す。

フェイト「ファイア!!」

なのは「シュート!!」

金色の魔力弾と桃色の魔力弾が、同時に発射される。

なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾を避ける。

フェイトは、追跡してくる桃色の魔力弾を障壁で防ぐ。

フェイト「!」

フェイトは気付いた時には、なのははもう次の攻撃態勢に入っていた。

なのは「シュート!!」

再び桃色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

バルディッシュ『サイスフォーム』

バルディッシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桃色の魔力弾を切り裂く。

なのは（フェイトちゃん・・・やっぱり強い!）

振り下ろされるバルディッシュを避けながら、なのはは思った。

なのは（でも・・・負けられない!）

距離を取って、再び桃色の魔力弾を放つ。

なのは（フェイトちゃんの為にも・・・私を信じてくれてるレナードさんの想いに応える為にも・・・）

揺るがない決意を胸に、なのははレイジングハートを強く握り締めた。

なのは（絶対に負けない!!）

フェイト（最初は、ただの魔力が強いだけの素人だったのに．．．）

フェイトは自身に迫る桃色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

フェイト（．．．強い！）

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

フェイト（でも．．．負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

フェイト（母さんの為にも．．．絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。フェイトの足元に、巨大な金色の魔法陣が展開された。

レナード「ん？フェイトのヤツ、何か大技でも出すのか？」

ユーノ達と、地上で観戦していたレナードが目を細めた。

アルフ「マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

レナード「と言う事は・・・アレがフェイトの切り札か・・・」

焦るアルフの隣で、レナードが冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の・・・いや、無数の魔力弾が佇む。

なのはがレイジングハートを構えようとした時、

なのは「あっ!!」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

フェイト「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

ユーノ「なのは!今サポートを!」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

レナード「止める、ユーノ」

レナードがそれを制した。

レナード「余計な事はするな」

ユーノ「余計な事!?!」

アルフ「でもレナード……フェイトのアレは本当にマズ
インだよ!」

アルフが戸惑いながら言う。

レナード「これはなのは達の決闘だ。それを邪魔する事は俺が許さ
ない」

今のレナードの言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アル
フとユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

なのは（レナードさん・・・ありがとう）

三人の様子を見ていたなのは、心の中でレナードに礼を言った。

フェイト「アルカス、クルタス、エイギアス・・・」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

フェイト「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかけ。バリエル・ザリエル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

フェイト「フォトンランサー・フランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

フェイト「打ち砕け！ファイア！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

ユーノ「なのは！」

アルフ「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。レナードは黙って見つめてる。

やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。

フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。

やがて煙が晴れてくる。

なのは「撃ち終えると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。

障壁を張って、あの魔力弾を雨を防ぎきったのだ。

レナード「・・・ウソだろ？」

流石のレナードも、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

なのは「今度は・・・こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

なのは「受けてみて・・・ディバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

レイジングハート『スターライトブレイカー』

桃色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桃色の魔力弾が生成された。

なのは「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

なのは「スターライト・ブレイカー！！！」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桃色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

フェイト「はあ！！！」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桃色の閃光目掛けて放った。

フェイトの魔力弾は、桃色の閃光に掻き消された。

フェイト「！！！」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は桃色の閃光の前に簡単に破れてしまう。

フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

ユーノ「なのは！」

アルフ「フェイト!!」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

なのは「フェイトちゃん！」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのははレナード達の元へ飛んで行った。

フェイト「ん・・・」

レナード達の元へ着いたところで、フェイトは目を覚ました。

アルフ「フェイト！」

なのは「あつ、フェイトちゃん気が付いた？」

アルフとなのはが声を掛けた。

フェイト「．．．．．私．．．負けたんだね．．．」

フェイトの表情が暗くなった。

レナード「フェイト」

レナードが声を掛けた。フェイトは、レナードに顔を向けた。

レナード「よくやったよフェイト。最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんて何もない」

そう言つてレナードは微笑んだ。

フェイト「レナード．．．」

レナードの言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

アルフ「あんた．．．本当にいい奴だねえレナードお．．．．．」

レナードの隣にいるアルフは泣いていた。

レナード「何でアルフが泣いてるんだ」

とレナード。

バルディッシュ「プットアウト」

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

フェイト「アアアアア！！！！」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

レナード「フェイト！！！」

なのは「フェイトちゃん！！！」

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えて行った。

よろけるフェイトをレナードが抱き抱える。

レナード「プレシアアアアアア！！！」

雲の歪みに向かって、レナードは怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。

エイミィが座標を割り出した。

リンディが立ち上がる。

リンディ「武装局員、転送ボードから出動！任務は、プレシア・テ
スタロッサの身柄確保！」

時の庭園。プレシア・テストロッサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳き込んでいた。

プレシア「ハア．．．ハア．．．次元魔法は．．．もう体が耐えられないわね．．．．．」

顔を苦痛で歪ませる。

プレシア「それに．．．今のでこの場所も掴まれた．．．．．」

プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。

プレシア「フェイト．．．よくここまで戦ったわね．．．．．」

フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。

プレシア「こんな母さんの為に．．．．．今まで、よく頑張ったわね．．．」

愛おしそうにフェイトを見つめる。

プレシア「レナード・・・アルフ・・・フェイトをお願い・・・」

プレシアは、二人にフェイトの事を託した。

プレシア「さあ・・・全てを終わらせましょう」

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。

アースラのブリッジにレナード、それにフェイトと人間形態のアルフが入室して来た。

フェイトはレナードとなのはの間に立っている。局員がフェイトに

拘束具を付けようとしたが、

レナード「それでフェイトをどうする」

と、レナードの脅しと殺気で拘束具は付けられなかった。

ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた。

リンディ「お疲れ様」

リンディがレナード達に近寄って来た。それから、フェイトに顔を向けた。

リンディ「フェイトさん？初めまして」

フェイトは、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。

オペレーター（男）「総員、玉座の間に進入。目標発見」

時の庭園では、武装局員がプレシアの居る部屋に突入していた。

武装局員（男）1「プレシア・テストロッサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します」

武装局員（男）2「速やかに武装を解除して下さい」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。

局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。

プレシアは後ろに回った局員を睨み付けた。

レナード（ん？ちょっと待て．．．．．このまま映像が映し出されると．．．．．）

レナードの顔に焦りの色が浮かんだ。

局員が隠し通路を見つけてしまう。

レナード「しまった。映すんじゃない！！」

レナードが慌てて叫んだ。

だが、もう遅かった。

全員（レナード以外）「！！？」

映し出された映像に、レナード以外の全員が絶句した。

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

フェイト「．．．．．」

なのは「．．．．．」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

ユーノ「レナードさん．．．．．これはどういう事ですか？」

動揺しながらユーノは、レナードに尋ねた。

だがレナードは、ユーノには答えず顔を険しくして齒を食い縛った。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

武装局員（男） 3「ぐわあああ!!」

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

プレシア「私のアリシアに近づかないで!!」

局員を睨みながら叫んだ。

武装局員（男） 4「う・・・撃てえ!!」

局員は武器を構えて、閃光を放った。

だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

プレシア「五月蠅いわ・・・」

プレシアは、手を前に突き出した。

リンディ「危ない、防いで!!」

リンディが叫ぶが、

武装局員全員「ぐわあああ!!」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

リンディ「いけない！局員達を送還して！」

リンディの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいなかった。

その事に、レナードは疑問に思った。

レナード「おかしい」

ユーノ「え？」

レナードの呟きに、ユーノが反応した。

レナード「俺が受けたプレシアさんの雷の威力は、あんなものじゃなかった・・・」

ユーノ「どう言う事ですか？」

ユーノが尋ねるが、レナードは答えなかった。

レナード（手加減しているのか？・・・それとも予想以上に病が進行しているのか？）

プレシアを見つめながらレナードは考えた。

フェイト「アリ・・・シア？」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめた。

プレシアはゆっくりアリシアに近寄った。

プレシア「もうダメね．．．時間がないわ．．．たった九つジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるか分からないけど．．．」

プレシアは後ろに振り返った。

プレシア「．．．フェイト。そこにいるんでしょ？」

フェイト「！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

プレシア「貴方はね．．．アリシアの代わりにしようと．．．私が造ったアリシアのクローンなのよ．．．」

フェイト「！？」

驚愕の真実に、フェイトは信じられないと言った表情をする。

エイミー「．．．プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テストロッサを亡くしているの。」フェイト”と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミーが険しい表情でみんなに話した。

プレシア「よく調べたわね．．．．．」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

プレシア「フェイト。正直に言っわ．．．．．私ね．．．貴方を造り出した時から、貴方を好きになれなかったの．．．．．」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクツと震わせた。

プレシア「何故、貴方を嫌っていたのか．．．．．ある人のお陰でようやく分かったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった．．．．．」

フェイトもレナードも周りにいる全員が、黙ってプレシアの話を聞く。

プレシア「．．．でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない．．．貴女は『フェイト』だもの．．．．．」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

プレシア「フェイト．．．貴女を『フェイト』と言う、私の娘として見た時に．．．．．私の気持ちは大きく変わったわ．．．．．」

フェイトはジッとプレシアを見つめる。

プレシア「御免なさいフェイト．．．今更謝っても許されないのは、

分かってるわ．．．．．でも．．．これだけは貴女に
伝えておきたいの．．．」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

プレシア「フェイト．．．貴女の事が大好きよ」

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はい。今回も始まりました、レナード先生コーナー」

レナード「いよいよ無印も終盤に近づいたな」

銀八「んじゃ。質問いくぞペンネーム『支配者』さんからの質問。」

質問なんですがレナードって嫌いな食べ物あるんですか？

元の世界にレナードの事好きな人っていますか？

自分より強い、あるいは互角に戦える『銀魂』キャラっていると思いますか？

『おいおい。レナードの質問ばっかだな。レナード答える』

レナード「嫌いな食べ物はないな。俺の事を好きな奴いたかな？」

銀八「ユウリやシズナ姫じゃねえのか？」

白騎士君「どうやら鈍感らしいな」

銀八「三番は？」

銀八「で？どうなんだレナード？」

レナード「え．．．．．えっと．．．．．」

レナードはどう答えていいか分からなかった。

銀八「どうやら答えられないな。フェイトはどうなんだ？」

銀八はフェイトの方に向いた。

フェイト「勝てるかどうか分からないけど、全力で戦おうと思います」

銀八「と言う事だ。『黒龍』さん廊下に立って下さい」

第十七話 決着！なのは対フェイト！！（後書き）

銀八「おい、レナードは？」

白騎士君「あっち」

作者は指でレナードがいる所に指した。

そこには体育座りをして、ブツブツ言ってるレナードだった。

銀八「どうしたんだ？」

白騎士君「どうやらまだあの質問を抱えてるらしい」

なのは「次回、『白騎士リリカルなのは』第十八話「フェイトの決意」テイクオフ」

フェイト「次回をお楽しみに」

第十八話 フェイトの決意（前書き）

白騎士君「今回は早く出来ました」

フェイト「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第十八話 フェイトの決意

プレシア「フェイト．．．貴女の事が大好きよ」

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

フェイト「．．．．．！！！」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。

目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

プレシア「アルフ。貴女もいるんでしょ？」

プレシアは、今度はアルフに声を掛けた。

プレシア「こんな私が頼めた義理じゃないけど．．．．．これ
からもフェイトをお願い．．．」

アルフ「プレシア．．．」

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

エイミィ「大変！屋敷内に魔力反応多数！」

クロノ「何だ！？何が起こつてる！？」

クロノが動揺する。

屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵が現れる。

オペレーター（男）「庭園敷地内に魔力反応！しかも50、80と数を増やしていきます！！」

リンディ「プレシア・テストロッサ！一体何をするつもり！？」

プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。

プレシア「それからレナード」

レナード「！」

レナードは画面のプレシアを見上げた。

プレシア「最後に貴女に礼を言うわ・・・」

笑みを浮かべるプレシア。

プレシア「有り難う」

次の瞬間、九つのジュエルシードが強い光を発した。

オペレーター（男）１「次元震です！中規模以上！！」

リンディ「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンディが局員に指示を出す。

オペレーター（男）２「ジュエルシード九個発動！次元震、更に強

くなります!」

リンディ「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動!」

オペレーター（男）3「了解!」

指示を受けた局員が動く。

オペレーター（男）2「規模は更に拡大!このままでは『次元断層』が!」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。

局員達が慌ただしく騒ぐ中、レナードは画面のプレシアを見つめていた。

レナード（バカヤロー・・・）

爪が食い込む程に、拳を強く握る。

オペレーター（男）1「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと三十分足らずです!」

局員が焦った声で、報告する。

エイミィ「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロ

ギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」

エイミィが説明した。

リンディは、顔を陰しくした。

アルフ「．．．．．レナード」

レナードの後ろに立っているアルフが呼んだ。

レナードは静かに振り返った。

アルフ「あんた．．．．．全部知ってたのかい．．．？」

怒り、悲しみ、様々な感情が混ざった視線をレナードに向ける。

レナード「．．．．．」

レナードは黙ってる。

なのは達、周りの視線もレナードに集まる。

アルフ「答えてよ！」

アルフが声を荒げる。

レナード「．．．．．すまない」

アルフ「謝って済む問題か!!」

感情に任せて、アルフは右拳をレナードの顔に振るった。

殴った後、アルフはハツとなる。

アルフ「あ．．．．．ご．．．御免、レナード．．．．．
あたし．．．．．」

アルフは、震える右手を引つ込める。

レナード「．．．お前が謝る事はない」

場が重い沈黙に支配される。レナードは、隣で泣き崩れてるフェイトを見た。

レナード「フェイト」

レナードが声を掛けた。

レナード「すまない」

フェイトに謝った。

フェイト「．．．．．レナードは．．．．．悪く
ないよ．．．」

小さな声で、フェイトは答えた。

フェイトを見つめながら、レナードは口を開いた。

レナード「．．．フェイト。プレシアさんはアルハザードに行こうとしてる。アルハザードに辿り着けるかどうか、本当にアルハザードがあるかどうか．．．それは俺にも分からない」

フェイトは俯いたまま、レナードの話を聞いている。

レナードは、話を続ける。

レナード「ただ、このままプレシアさんを放っておけば．．．．．あの人がお前の手の届かない所に行ってしまう事だけは確かだ」

レナードの言葉に、フェイトはかすかに、本当にかすかに肩を震わせた。

レナード「このままここで泣き崩れるか、今の自分の殻を破って前に進むか．．．今ここで決める」

その言葉を最後に、レナードは黙った。

再び、場が沈黙になる。フェイトは考える。これからどうすべきか。

隣にいるレナードは、静かにフェイトの答えを待つ。

フェイト「．．．．．私は．．．今まで母さんの為に頑張ってきた．．．．．母さんに笑ってほしくて．．．．．」

顔を俯いたまま、フェイトが沈黙を破った。

フェイト「．．．さつき母さんは．．．私に笑ってくれた．．．
．．．でも．．．!」

フェイトは、ギョツと両手を強く握った。

フェイト「あの時の母さんの笑顔は．．．．．凄く寂しい．．．
悲しい笑顔だった．．．．．!」

涙を流しながら、フェイトは言う。

フェイト「私は、もう母さんに、あんな笑顔をさせたくない!」

フェイトの声が、ブリッジに響いた。

やがてフェイトは、ゆっくりと顔を上げた。涙は止まっていた。

フェイト「レナード」

フェイトは、レナードを見上げながら言葉を繋げた。

フェイト「私、母さんを助けたい!」

迷いのない、固い決意の宿った瞳でレナードを見つめながら、フェイトが答えを出した。

その答えを聞いて、レナードは微笑んだ。

アルフ「フェイト」

アルフが声を掛けた。

フェイト「アルフ．．．また、私に力を貸してくれる？」

立ち上がりながら、フェイトはアルフに尋ねた。

アルフ「もちろんだよ！フェイト！」

フェイトに抱き付きながら、アルフは答えた。

フェイト「有り難う。アルフ」

フェイトは微笑みながら、アルフに礼を言った。

なのは「フェイトちゃん！」

呼ばれてフェイトは、振り返った。

なのはとユーノが立っていた。

なのは「私も一緒に行くよ！！！」

ユーノ「僕も！」

二人が力強く、フェイトに言った。

フェイト「．．．．．！！！」

なのは達の言葉に、フェイトは目を見開いた。

クロノ「僕も行く！このまま放つてはおけない！」

クロノが言った。

フェイト「みんな・・・」

フェイトは、なのは達を見渡した。

レナード「お前は一人じゃない」

横からレナードの声が聞こえた。

フェイトは、レナードに顔を向けた。

フェイト「あの・・・レナード・・・」

フェイト「ん？」

レナードは片眉を上げた。

フェイトは、頬を少し赤くしながら、何を言おうとして戸惑ってる。

フェイト「その・・・一緒に来てくれる？」

上目遣いに、おずおずとフェイトが尋ねた。

レナードは微笑みながら、溜め息を付いた。

レナード「ああ」

フェイト「!!」

レナードの答えを聞いて、フェイトは笑顔になる。

レナード「マンションに泊めてもらった分、何でもやるさ！」

レナードは、力強くフェイトに言った。

レナード「それじゃあ行くか。お前の母さんの、本当の笑顔を取り戻しに」

フェイト「うん！」

レナードの言葉に、フェイトは力強く頷いた。

第十八話 フェイトの決意（後書き）

レナード「今回は早く出来たな」

白騎士君「ええ。ただ、感想が来てないのが残念ですけど」

アルフ「次回、『白騎士リリカルなのは』第十九話「突入！時の庭園！」テイクオフだよ！」

第十九話 突入！時の庭園！（前書き）

白騎士君「無印編の最終決戦が始まります！」

レナード「白騎士リリカルなのは始まります」

第十九話 突入！時の庭園！

レナード達は、時の庭園に転送された。

レナード達の前には、様々な鎧の形をした、沢山の傀儡兵が剣や槍などを持って構えていた。

レナード「おいでなすったか」

前方にいる傀儡兵を見据える、レナード。

フェイト達もデバイスを構える。

なのは「い．．．いっぱいいるね」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

クロノ「まだ入口だ。中にはもつという」

クロノは、前方の敵を見据える。

レナードがゆつくりとフェイト達の前に出た。

レナード「フェイト。俺がこいつ等を片付けるから、お前達は俺の後に続け」

フェイト「え？」

フェイトは、レナードを見上げた。

フェイト「でもレナード・・・」

心配になって、フェイトが声を掛ける。いくらなんでも敵が多すぎる。

レナード「お前は母さんを助ける事だけに考える」

レナードは眼前にいる敵を倒す為に、

レナード「俺は俺の護りたいものを護る」

鋭い目で、眼前の敵を見据えて風属性の魔法を詠唱し始めた。

沢山の傀儡兵が一斉にレナードに襲い掛かる。

傀儡兵達がレナードの所まで1メートルまで来た時、レナードは右手を振りかざした。

レナード「ヘブントルネードッ!!」

突然、強力な風が吹き傀儡兵達が次々、バラバラになり吹き飛んだ。

そして風が吹き止んだ、入り口前にいた大量の傀儡兵は全滅した。

なのは「す・・・すごい・・・!!」

なのは達は、デバイスを持ったまま呆然した。

ハッキリ言って、なのは達が出る幕は、これぼっちもなかった。

クロノ「な．．．なんてデタラメな魔法なんだ．．．」

クロノは、驚きを通り越して半分呆れていた。

クロノ（それに今、レナードが使った魔法は．．．．．まさか．．．）

クロノはレナードの魔法を見て何か考え事をしていた。

レナード「よし！行くぞフェイト！」

フェイト「うん！」

レナードの声に答えながら、フェイトは走り出した。

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

クロノ「その穴『虚数空間』だから気を付けて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

レナード「虚数空間？」

レナードは首を傾げた。

クロノ「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、なのはは冷や汗を流した。

レナード「要は落ちなきゃいいんだろ」

言いながらレナードは、走り続ける。

前にある扉を開けて中に入る。部屋には、更に沢山の傀儡兵がいた。

クロノが上に行く階段を見つけた。

クロノ「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案をした。

レナード「よし。それじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとするか」

クロノ「え？」

レナードの案にクロノは顔をしかめた。

クロノ「レナード！こんな時にジャンケンなんて・・・」

レナード「ジャンケン！」

クロノの異議をスルーして、ジャンケンを始めるレナード。他のみんなも、戸惑いながらも手を構える。

レナード「ポン！」

ジャンケンの結果、なのは、ユーノ、アルフが最上階の駆動炉のロストロギア封印。レナード、フェイト、クロノが最下層にいるプレシアの元へ向かう事に決まった。

ちなみにさっきの部屋にいた傀儡兵軍は、またもレナードの魔法によって全滅した。

最上階。

なのは達はエレベーターを使って最上階にやって来た。

エレベーターから出ると、駆動炉を守る大量の傀儡兵がいた。

アルフ「素直に通す気はないみたいだね」

なのは達がデバイスを構える。

ユーノが前に出る。

ユーノ「防御は僕がやる！なのはは封印に集中して！」

なのは「うん！いつも通りだね！」

ユーノ「え？」

なのはの言葉に、ユーノは振り返った。

なのは「ユーノ君、何時も私と一緒にいてくれて、守ってくれた

よね？」

ユーノに笑顔を向けながら、なのはが言う。

なのは「だから戦えるんだよ。背中が何時も暖かいから！」

そう言ってなのはは、レイジングハートを構えた。

その様子を見ていたアルフは、

アルフ「青春だね」

と言いながら、傀儡兵を倒していく。

なのは「シュート!!」

なのはは、桃色の魔力弾を複数放った。傀儡兵に当たり爆発する。

アースラ。

リンディが席を立った。

リンディ「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

レナード「うおおおおー!!」

レナード達は、迫り来る傀儡兵達を倒しながら前に進む。飛行型の傀儡兵は、フェイト達が相手をする。

フェイト「サンダー・レイジー!!」

フェイトから金色の雷が放たれた。雷を受けた傀儡兵達は爆発した。

クロノ「スナイプ・ショット!!」

クロノの黒いデバイスから、青い閃光が放たれた。閃光は傀儡兵達を貫いて、傀儡兵達は爆発した。

レナード「どけ! お前等に構ってる暇はないんだ!!」

叫びながらレナードは、エクスカリバーで傀儡兵を切り伏せながら先に進む。

広い部屋に着いた瞬間、大きな音を立てて壁が崩れた。崩れて出来た穴から、両肩に砲身を付けた大型の傀儡兵が姿を現した。

レナード「今度はデカイのが来たな」

大型傀儡兵を睨みながら、レナードはエクスカリバーを構えた。

フェイト「レナード! いくらレナードでも・・・」

レナード「お前達は此处にいる!」

フェイトの言葉を最後まで聞かず、レナードは大型傀儡兵に向かって走り出した。

フェイト「レナード!」

クロノ「レナード!」

フェイトとクロノが叫んだ。

大型傀儡兵は、レナードに狙いを定めて砲身に魔力を集束する。

魔力の光が強くなり、砲身から魔力砲が発射された。大爆発を起こして、部屋に轟音が響いた。

フェイト「レナード!!」

煙が立ち込める中、フェイトが叫んだ。

大型傀儡兵がフェイト達に狙いを定めた時、

レナード「どこを見ている!!」

煙の中から、レナードが飛び出して、大型傀儡兵の前に現れた。

クロノ「レナード!!」

クロノが叫んだ。

レナード「シャイニングレイブ!!」

エクスカリバーを高速で切り込む。大型傀儡兵はバリアを張る。レナードのシャイニングレイブは、バリアが亀裂が入り広がり、バリアはガラスのように粉々に碎け散った。

レナードは着地した。

レナード「俺の・・・」

脚に力を入れる。

レナード「勝ちだぁぁぁ!!!!」

叫びながらレナードは、地を蹴って大型傀儡兵の顔の前まで跳んだ。

レナード「うぉぉぉぉ!!!!」

エクスカリバーを真っ直ぐに伸ばし、そのまま大型傀儡兵の頭を貫いた。

レナードが離れた後、大型傀儡兵は爆発した。

フェイト「レナード!!」

フェイト達がレナードに駆け寄る。

レナード「二人とも。大丈夫か?」

フェイト「うん」

クロノ「・・・全く、貴方のデタラメさには本当に呆れる」

クロノは、溜め息を付いた。

レナード「それじゃ、先に進むか」

レナード達は再び走り出す。

時の庭園。最下層。

プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。

プレシア「誰か乗り込んで来たみたいね・・・」

上を見ながら、プレシアは呟いた。

プレシア（恐らく管理局の執務官・・・）

プレシアは短く笑った。

プレシア「でも無駄よ。私を捕まえても・・・私はもう長くはない・・・」

悲しい表情を浮かべながら、プレシアはアリシアを見つめた。

プレシア「アリシア・・・御免なさい。こんな事になってしまって・・・」

庭園が激しく揺れる。

プレシア「フェイト・・・貴女だけでも幸せになって・・・」

プレシアがそう言った直後、背後から爆音が聞こえた。

プレシア「！」

慌ててプレシアは、振り返った。

プレシア「来たわね」

執務官が来たと思い、プレシアは杖を構えた。

だが、

???「此处が、最下層か？」

聞こえてきた声にプレシアは驚いた。

聞き覚えのある声。

プレシア（いえ、まさか・・・あの男が此处に来るなんて

．．．．．

そして、壁に空いた穴から、人影が姿を現した。

レナード「どうも。来ちゃいました」

茶髪の男。

そして、

フェイト「母さん!!」

自分の愛する娘。

プレシア「レナード．．．フェイト．．．．．」

プレシアは、信じられないと言った顔をする。

フェイトは、固い決意の宿った眼でプレシアを見つめた。

銀八「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八「はい。レナード先生コーナーの時間だ」

レナード「今回のアシスタントは」

フェイト「こんにちは。フェイト・テストロッサです」

白騎士君「はい、未来の変体死神様がアシスタントです」

フェイト「私は、死神じゃありません！それと、変体ってどう言う事ですか！？」

フェイトは知らないが、未来じゃフェイトは金色の死神と呼ばれます。それに、感想の答えでレナードと夜這いしたい時点で、変体です。

不名誉な事を言われて怒るフェイトをスルーする作者。

白騎士君「んじゃ。銀八先生。質問を」

銀八「おう。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「おお、ついにクライマックスですね」

銀時「ま、レナードならプレシア救うだろうな」

ソラ「そう簡単なことじゃないと思うけどな」

黒龍「まあ、レナードたちがどうなるか見守っていきましょう。じやあ久々に質問します」

1・フェイトに質問。もしここにレナードのコスプレ写真があったらどうしますか？

2・フェイトに質問。エイリアンと戦って勝てますか？

3・レナードに質問。レナードの胃袋は鋼ですか？

黒龍「今回はこれで終わりです。次回も楽しみにしています」

『では、質問された奴答えろ』

フェイト「もちろん。部屋で大切にします!」

銀八「二つ目は?」

フェイト「怖いですけど戦ってみせます」

銀八「んじゃ。レナード質問の回答を言ってくれ」

レナード「それはどう意味だ？俺の体が異常じゃないって言いたいのか？（怒）」

出された質問にレナードは怒りの表情を浮かべる。

銀八「事実だろ。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立って下さい」

第十九話 突入！時の庭園！（後書き）

白騎士君「次回はついにレナードが」

フェイト「白騎士に変身します」

なのは「次回、『白騎士リリカルなのは』第二十話「レナード変身！白騎士登場！」テイクオフ」

第二十話 レナード変身！白騎士登場！

その頃、なのは達は駆動炉のロストロギアの封印に成功した。

ユーノ「やった！」

ユーノが声を上げた。

その時、

リンディ（三人とも、よく頑張りました）

なのはとユーノ、アルフに、リンディからの念話が聞こえた。

リンディ（私も現地で次元震を抑えています。おそらく、これで次元断層は起こらないでしょう）

なのは「よかった・・・」

リンディの言葉に、なのはは安堵する為息を付いた。

これで最悪の事態は防げた。

残すは・・・。。。。。

最下層。

フェイトはレナード、クロノと共に、プレシアの前に降り立った。

プレシア「フェイト．．．．．どうして来たの．．．？」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

フェイト「母さん．．．」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

プレシア「貴方．．．何しに来たの．．．？」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまう。

フェイト「私は．．．」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

フェイト「母さんを助けに来ました」

プレシア「!!」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

フェイト「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった・・・」

自分の想いをプレシアに伝える。

フェイト「母さんは・・・さっき私に笑ってくれた・・・
けど、私が見たかった母さんの笑顔は・・・あんな悲しそうな笑顔
じゃない!」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。

プレシアとレナード達は、黙ってフェイトの話を聞く。

フェイト「母さんには・・・
笑ってほしいの・・・心からの、本当の笑顔になってほ
しい!」

母に伝える娘の想い。

フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまで来た。

杖を握るプレシアの手が震える。

フェイト「だから、母さん．．．」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

フェイト「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。

フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。

フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答えを待つ。

プレシア「．．．．．」

プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

プレシア「フェイト．．．」

顔を上げてフェイト見る。

その時、

ドガアアアアアンツ！！

突然、天井が割れてから何かが降ってきた。

全員「!!」

レナードやフェイト、クロノとプレシアも天井を見上げた。

ドシンンンッ!!!

それが落ちてきて辺りが煙に包み込まれる。

そして、煙が止みレナード達は落ちてきた物の方に向く。

そこには、五体の仮面を被った緑の巨人が立っており、二体は盾と巨大な棍棒を持ち、もう二体は棍棒だけを持っていた。

そして、最後の一体はリーダーらしき仮面を被り、更に巨大な鉄槌と盾を持つ、緑の巨人。

フェイトはその巨人を見て体が小刻み震えていた。しかし、レナードは何故此処に言った顔をして、プレシアとクロノは信じられないと言った顔をしていた。

そう、フェイト以外、三人は知っていた。あの巨人の事を、

プレシア「そんな・・・あれは・・・四万年前に
絶滅したんじゃない」

最初にプレシアが口を開いた。

レナード「何故、奴等がこんな所に！」

レナードは緑の巨人を睨んだ。

アルフは、突如、最下層に現れた。緑の巨人に驚愕した。

ユーノは、緑の巨人を見て信じられない顔をしていた。

ユーノ「トロル!? 絶滅した生物が何で」

なのは「ユーノ君、知ってるの!?!」

ユーノ言葉に、なのはとアルフはユーノ方向に向いた。

ユーノ「四万年前、ミッドチルダに生息した凶暴なモンスターだ」

なのは「モ、モンスター!?!」

アルフ「んじゃ、何でそいつ等が今此处にいるんだよ!?!」

アルフが画像に映ってるトロルを、指差した。

その時、

リンディ（三人とも、聞こえる!）

またリンディの念話が聞こえた。

リンディ（今すぐ、最下層に向かって下さい。このままだとレナー
ドさん達が）

リンディの指示に、なのは達は最下層に向かった。

最下層。

クロノ「二人とも、今は達が此処に向かつてる。その間、ト
ロル達の気を逸らす」

クロノがそう言って、デバイスを構える。フェイトもデバイスを構
えた。

すると、レナードがゆっくりとフェイト達の前に出た。

フェイト「レ、レナード!？」

レナード「フェイト。こいつ等は俺がやる。下がってくれ」

フェイト「何言ってるの！？レナード！」

クロノ「無謀だ！幾ら君でもあの五体じゃ、無理がありすぎる！」

確かにあのトロルは凶暴だ。しかもそれが五体、幾らなんでも無謀すぎる。

しかしレナードは、

レナード「大丈夫だ」

そう言つて、トロルの方に見据える。

するとレナードの左腕から、手甲が現れた。白騎士のアークだ。

クロノ「あれは・・・？」

クロノがレナードの左手に付いてる手甲を見詰める。その時、エイミィから通信がきた。

エイミィ『クロノ君！』

クロノ「どうしたエイミィ！？」

エイミィ『あれだよ！ロストログリア反応はあの手甲に反応したるんだよ！』

クロノ「何だつて!？」

エイミィの言葉に驚くクロノ。トロル達は一斉にレナードに襲い掛かった。

レナード「古の剣を携えし白き勇者ウイゼルよ．．．」

腰から短剣を引き抜き、

レナード「我に力を！」

短剣をアークに差し込んだ。

レナード「変身！」

その瞬間、眩しい閃光がレナードを包み込む。

フェイト「くっ！」

プレシア「うっ！」

クロノ「ぐっ！」

それぞれ、目を覆うフェイト達．．．次第に光が収まり、腕を下ろすと．．．そこには、

フェイト「．．．．．ッ!！」

フェイトは見開いた。

プレシア「あれは．．．」

プレシアは驚いた。

フェイト達の前には．．．青いマントを纏い、巨大な盾、そして聖王ファルシオスを持つ7mの白銀の騎士が立っていた。

そう、これがレナードのシンナイト、その名を．．．．．白騎士。

フェイトとプレシアが驚いてる中、クロノだけは険しい顔をしていた。

エイミィ『あ、あれって．．．』

クロノ「間違いない．．．あれは、古代のデバイスと言われ、そしてもっとも危険なロストログア．．．．．何故彼が!？」
．．．『シンナイト』．．．．．

そして、白騎士は剣をトルル達の方に向けた。

第二十話 レナード変身！白騎士登場！（後書き）

銀八「ちよつとしか、出てねーじゃねかああああああ！！
！（怒）」

白騎士君「じ、次回は戦闘に入りますので楽しみにして下さい（汗）」

レナード「次回、『白騎士リリカルなのは』第二十一話「白騎士の力！そしてプレシアの答え！」テイクオフ」

銀八「次回も見ろよ」

第二十一話 白騎士の力！そしてプレシアの答え！（前書き）

白騎士君「ついに白騎士が戦闘を始めます。戦闘描写はうまく書けるかな？」

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第二十一話 白騎士の力！そしてプレシアの答え！

白騎士はファルシオスを前に構える。

トルルA（盾無し）「グオオオオオオオオ！！」

トルルA（盾無し）が白騎士に向かって襲い掛かる。

白騎士『ハアッ！！』

白騎士はファルシオスを水平に構え、腹部に目掛けて切りつけた。

ズバンッ！

トルルA（盾無し）「グギヤアアアアア！！」

トルルA（盾無し）が悲鳴を上げた。その瞬間、トルルA（盾無し）の上半身と下半身が離れ、地面に落ちて息絶えた。

白騎士はファルシオスに付いた血を振り払う。

ブンッ！

フェイト・プレシア・クロノ「………」

啞然とするフェイト達。

トルルA（盾有り）「グオオオオオオオオオオオ！！」

トルルA（盾有り）が怒り、白騎士に襲い掛かる。

白騎士は左手に有る盾を消して、両手でファルシオスを構え、縦にトルルA（盾有り）を切りつけた。

トルルA（盾有り）は左手に有る盾で防ごうとしたが、盾ごと切られて息絶えた。

トルルBの盾有りと盾無しがそれぞれ白騎士に突撃する。

トルルB（盾無し）「グオオオオオオオオ！！」

トルルB（盾無し）が棍棒で白騎士に殴ろうとしたが、白騎士は簡単に避け、トルルB（盾無し）の頭にファルシオスを突きつける。

ドスッ！

トルルB（盾無し）「ゲガア！！」

頭を突きつけられたトルルB（盾無し）はそのまま息絶えたが、後からトルルB（盾有り）が襲い掛かる。

白騎士は再び、左手に盾を装備する。そして、盾でトルルB（盾有り）を殴る。

ドガンッ！

トルルB（盾有り）「グオッ！！」

トルルB（盾有り）は後ろに吹っ飛んだ。

白騎士はファルシオスが刺さったトロルB（盾無し）から抜き、トロルB（盾有り）の方に走り出す。

そのまま、トロルB（盾有り）の頭に突きつけた。

ドスッ！

声も上げないまま、息絶えた。

白騎士はトロルキングの方に向く。

トロルキング「グッ．．．．グググググ、グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

トロルキングは物凄い音圧を咆哮上げる。そして、トロルキングは走り出し、跳んだ。

巨大な鉄槌で白騎士を殴ろうとしていた。

フェイト「レナードッ！」

フェイトが声を上げた。

白騎士はファルシオスを天井に揚げた瞬間、

白騎士『雷帝剣！』

レナードの言葉と同時に雷が物凄い勢いでファルシオスに当たる。雷が纏った剣になった。

そして、白騎士はトロルキングの方に跳び、ファルシオスを縦にし切りつけた。

ザンッ！

白騎士は地面に着地する。

着地した瞬間、トロルキングは空中で爆発した。

フェイト「す、すごい・・・」

フェイトは啞然とした。

だが、クロノだけは顔を顰めていた。

クロノ（間違いない・・・あれは）

白騎士は変身を解除した。

レナード（ホッ、この世界に来て初めて変身したが・・・
問題はないようだな）

レナードは心の中で安堵の息を吐いた。

レナードはプレシアに顔を向ける。

レナード「そう言えばプレシアさん。まだ、フェイトの言葉に対しての答えを聞いていなかったな」

レナードの言葉でフェイト達はプレシアに顔を向ける。

そして再びフェイトは手を伸ばしプレシアに、

フェイト「母さん・・・一緒に帰ろう」

優しく微笑みながら言う。

プレシア「フェイト・・・」

プレシアはフェイトの方を見る。

プレシア「御免なさい」

フェイト「!」

プレシアは杖を揚げる。

プレシアの動きに気付いたレナードは、走り出す。

プレシアは揚げた杖を地面に叩いて、魔法陣を展開した。プレシアの足場が崩れていく。

フェイト「母さん!」

フェイトが叫んで走り出す。フェイトの横をレナードが通り過ぎた。

崩れた足場が、プレシアとアリシアを飲み込もうとした時、

レナード「うおおおお!!」

レナードは叫びながら、アリシアの入ってるケースを左手で掴み、崩れた足場に落ちていくプレシアの手を掴んだ。

プレシア・フェイト「レナード!!」

プレシアとフェイトの声が重なった。

レナード「く...!!」

レナードは両膝を地面に着き、右手でプレシアの手を掴んでる。

プレシア「は...離しなさいレナード!このままだと貴方まで...」

プレシアは、レナードの手を離そうとする。

レナード「プレシアさん...貴方は、まだフェイトから逃げてる事に気付かないんだ?」

プレシア「え...?」

プレシアの手の動きが止まる。

プレシア「フェイトが、本当はまだ自分を恐れているんじゃないかと...自分が一緒にいたら、フェイトは幸せになれないと恐れて...貴方はフェイトから逃げてるんだ」

歯を食いしばりながら、レナードが言う。

レナードの後ろに立ってるフェイト、様子を見守ってるクロノモレナードの言葉を聞いている。

レナード「プレシアさん．．．貴方を助ける為に、危険を覚悟でここまで来たフェイトが貴方を恐れてると思うか？自分を想ってくれる親がいて、他に何がいるんだよ」

プレシアを真っ直ぐに見つめながら、レナードが言う。

レナード「もう逃げるんじゃない！！」

プレシアに向かって怒鳴る。

レナードの声に、プレシアは目を見開く。

レナード「本当にフェイトの事を想っているなら、あの子の傍にいろ！！」

レナードの言葉がプレシアの心に響く。

レナード「その手で、その腕で、思いつきり抱きしめろ！涙が出るくらいに強く抱きしめろ！」

レナードの叫び声が、最下層に響いた。

レナード「この手は絶対に離さない！」

プレシアの手を、更に強く握る。

プレシア「レナード．．．」

必死に自分を助けようとするレナードを見つめた。

レナードがプレシアを引き上げようとした瞬間、地面に亀裂が入った。

ガラガラと音が立てて、レナードの足下が崩れる。

フェイト「え？」

後ろで見ていたフェイトが小さな声を出した。

目の前の光景が信じられなかった。フェイトの目の前で、レナードとプレシアが崩れていく足場に飲み込まれていく。

フェイト「レナード！！母さん！！」

フェイトは走り出した。

クロノ「レナード！！」

クロノもフェイトの所に駆け出した。

フェイトが落ちていくレナードに手を伸ばす。

だが、フェイトの手は虚しく空を掴み、レナードとプレシアは虚数空間に落ちていく。

フェイト達は、ただその光景を見ている事しか出来なかった。レナードとプレシアは穴の中に消えていった。

フエイト「・・・母・・・さん・・・レナード・・・」

穴を見つめながら、フエイトは呟いた。

やっと、母さんと解り合えたかもしれないのに。レナードが必死に母さんを助けようとしたのに。

フエイトは、悲痛な顔で穴を見つめた。

その時、アースラにいるエイミィから連絡が入る。

エイミィ「皆！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！！」

焦った声で脱出を求めた。

クロノ「フエイト・テストロッサ！脱出するぞ！！」

クロノがフエイトに向かって叫んだ。

フエイトは、拳を強く握った。

フエイト「・・・分かった」

穴に背を向けて、走り出す。

崩壊する庭園の中、転移魔法を使い、アースラに帰還した。

アースラ。

オペレーター1「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

オペレーター2「次元震停止します」

オペレーター3「断層発生ありません」

リンディ「了解」

オペレーターの報告を聞いて、リンディは頷いた。

医務室。

アルフ「レ．．．レナードが！？」

クロノから、レナードとプレシアが虚数空間に落ちた事を知らされた。アルフとなのは、ユーノは愕然とする。

クロノ「．．．すまない」

クロノは頭を下げ、心からの謝罪をした。

なのは「あの．．．何か助ける方法はないんですか？」

僅かな可能性を求めて、なのはは尋ねた。

クロノ「．．．．．方法は．．．ない」

目を固く閉じ、拳を震わせながら、クロノは悔しそうに答えた。

なのは「そんな．．．」

なのは達は、表情を暗くした。

しかし、彼らは諦めなかった。心の中で、僅かな希望を持ちながらレナード達の無事を信じて。

独房。

フェイトとアルフが入っている。

フェイトへの拘束具の取り付けはなかった。

やはりレナードとプレシアの事がショックなのか、フェイトは顔を俯いたまま黙っている。隣にいるアルフは、心配そうにフェイトを見つめてる。

フェイト（レナード．．．母さん．．．．．私、二人が必ず無事でいるって、信じてるから）

だが、心の中では二人が帰って来る事を願っていた。

銀八先生「教えて！」

生徒全員「レナード先生！」

銀八先生「はあい。まずはこの人ペンネーム『真王』さんからの質問。なんか久しぶりだな」

真王「白騎士とはな。原作知らんからあんまわからんが」

ネプテューヌ「意味ないじゃん」

真王「うっさい。質問行きます。『なのはを誰に惚れさせる予定ですか？』『レナードをこちらの学園に入学させますか？』」

ネプテューヌ「レナードを『超次元学園』に入学させるの？」

真王「面白そうだから。最後に、『レナードが食べられない食べ物もしくは生き物は何ですか？』」

ネプテューヌ「っというわけで以上作者・真王からの感想でした」

『おいおい、入学させるのかよ。作者どうなんだ？』

白騎士君「ユーノとくつつける予定です。後、入学させていいですよ」

銀八先生「次、レナード答えろ」

レナード「特に嫌いな物はないぞ」

銀八先生「はあい。と、言うわけで『真王』さん廊下に立って下さい」

第二十一話 白騎士の力！そしてプレシアの答え！（後書き）

白騎士君「ふう〜。うまく書けたかな？」

銀八先生「おいおい。こんなで更新が遅れたのか？」

白騎士君「うるさい！初めてなんだから」

レナード「次回、『白騎士リリカルなのは』第二十二話「アルハザード」テイクオフ」

第二十二話 アルハザード（前書き）

白騎士君「やっと出来た」

銀八先生「おせーぞ作者」

レナード「今年ももうすぐ終わりだな」

白騎士君「そうですね。では、はりきって」

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第二十二話 アルハザード

プレシア「ん．．．」

プレシア・テストロツサは意識を取り戻した。

プレシアが起き上がると前に、倒れているレナードとアリシアの体が入ったケースを見つけた。

プレシア「レナード！」

プレシアは急いでレナードに駆け寄った。

プレシアはレナードの脈を確認したり、息もしているか確認する。脈はあるし、息もしている。レナードはただ眠っているだけだった。

プレシア「よかった．．．」

レナードが無事な事に、プレシアはひとまず安心した。

レナードの無事を確認した後、周囲を見渡した。何もない真っ暗闇。だが明かりもないのに、自分の体とレナードの姿だけ妙にハッキリと見える。

プレシア「此処は一体．．．？」

プレシアは考えた。

自分達は確か、虚数空間に落ちたはず。という事はここは死後の世

界？天国？地獄？少なくとも天国という感じではない。

顎に手を当てて考えていると、

レナード「ふあゝ」

レナードが欠伸をかきながら、上半身を起こした。

プレシア「レナード！気が付いたのね」

レナード「あ．．．？プレシア．．．？」

寝ぼけながらプレシアを見た後、レナードは周りを見渡した。

レナード「何だ．．．この真っ黒い空間は？」

レナードは目を細めた。

プレシア「私にも解らないわ」

プレシアは床に落ちてる、自分の杖を拾った。

レナードが立ち上がった時、

「???」おお。これは驚きました。自力でこの空間に来るとは」

何処からか、男の声が聞こえてきた。

レナード・プレシア「!?!?!」

直ぐにレナードとプレシアは、周囲を警戒した。

周りには誰も居ない。

???「まあ待って下さい。私は敵ではありません」

また男の声が聞こえる。

レナード「コソコソ隠れていないで、出て来たらどうだ？」

レナードは、腰に差してあるエクスカリバーを掴む。

プレシアも、杖を構えながら警戒を続ける。

???「私なら、此处に居ますよ」

レナード「何処だ？」

レナードはキョロキョロと周りを見る。やはり誰も居ない。

???「今、貴方達がいるこの空間ですよ」

レナード・プレシア「え？」

レナードとプレシアはポカンとなる。

互いに顔を見合わせる。それから顔を前に向ける。

プレシア「この空間が・・・貴方？」

プレシアが戸惑いながら尋ねた。

???「はい。申し遅れました。私『アルハザード』と言います」
空間が自己紹介をした。

レナード・プレシア「は?」

レナードとプレシアは間抜けな声を出した。

しばし呆然となって、場が沈黙する。

アルハザード「あの」

沈黙に耐えられず、『アルハザード』を名乗る空間が二人に声を掛ける。

レナードの目が、カツと見開かれる。

レナード「アルハザードオオオ!?!?」

ありったけの声で、レナードは叫んだ。レナードの声が空間に響いた。

プレシア「まさか・・・ここが・・・アルハザード・・・」

プレシアも驚きながら、再び周囲を見渡した。

自分達以外、誰も居ない。何も無い。殆んど『無』に等しき空間。

此処が、自分が探し求めてた場所『アルハザード』。

レナード「嘘をつくな！こんな何も無い真っ黒い空間がアルハザードだったら、俺の家の物置もアルハザードだろうがぁ！」

アルハザード「ちょっとぉ！物置と一緒にしないで下さいよぉ！」

レナードの言葉にアルハザードは怒る。

その時、

プレシア「ゲホッ．．．！ゲホッ．．．！ゴホッ．．．！」

レナードの隣にいるプレシアが、急に咳込んだ。

レナード「プレシアさん！！」

レナードが駆け寄る。

レナード「大丈夫か！？しっかりして下さい！！」

レナードは、プレシアの肩を抱きながら声を掛けた。咳は激しくなり、最後には吐血をした。

プレシア「ハア．．．ハア．．．．．どうやら．．．もう限界みたいね．．．」

手に付着してる、自分の血を見ながらプレシアは呟いた。

レナード「諦めるな！俺がなんとかしてやる！」

と、レナードが回復魔法をかけようとした時、

アルハザード「あゝ」

アルハザードの声がした。

アルハザード「そちらの男ばかりに、気を取られて気付かなかったんですが．．．、貴女は病気なんですか？」

プレシア「ええ．．．不治の病よ．．．．．」

顔を上げながらプレシアは答えた。

プレシアの答えを聞くと、アルハザードはしばし黙り込んだ。時折、うゝんと何か考え込んでいる声が聞こえた。

アルハザード「．．．分かりました。貴方達がここに来たのも何かの縁。すみません。そちらの男は？」

レナード「レナード」

アルハザードに聞かれて、レナードは名乗った。

アルハザード「女性の方は？」

プレシア「プレシア。プレシア・テストロッサよ」

プレシアも自己紹介をした。

アルハザード「では、レナードさん。テストロッサさんから少し離れて下さい」

レナード「何するんだ？」

レナードは目を細めて空間を睨んだ。

アルハザード「テストロッサさんの体を調べます。大丈夫です。絶対に危害は加えないと約束します」

ハッキリとアルハザードは言った。

レナードは暫し考えた後、プレシアに顔を向けた。咳は収まったが、プレシアは苦しそうな顔をしている。

まだアルハザードの事を、完全に信用した訳ではない。だが、他には方法はない。

レナード「・・・分かった。頼む」

アルハザード「はい」

レナードの言葉に、アルハザードは力強く答えた。

レナードはプレシアから離れて様子を見る。

アルハザード「では、テストロッサさん。そのまま動かないで下さい」

プレシア「え．．．ええ．．．」

戸惑いながらも、プレシアはアルハザードの声に従った。

プレシアの足下に巨大な魔法陣が展開された。

アルハザード「ふむふむ．．．．．なるほど」

魔法陣を展開してから、アルハザードはブツブツ呟く。プレシアの体を調べているのだろう。

レナードは静かに様子を見守り、プレシアも黙って座っている。

暫くして、

アルハザード「あゝはいはい。分かりました」

アルハザードの軽い声が響いた。

アルハザード「じゃあ今から治しますんで、そのままじっとしてて下さい」

プレシア「え？」

アルハザードの言葉に、プレシアはポカンとなる。

足下の魔法陣が少し強い輝きを放った。時間にして二、三秒くらいか。輝きは治まり、足下の魔法陣も消えた。

アルハザード「オッケーです」

アルハザードの声が聞こえるとプレシアの姿がはつきり見えてきた。

レナード「!?!」

レナードは目の前の光景を見て目を丸くした。

なにせ二十代位にツヤのある肌を持った、女性が居たのだ。

レナード「あれプレシアさん? いや、まさか . . .
」

レナードは目の前の光景を必死に否定する。

すると、二十代の女性が近づく。

女性「どうしたのレナード? 私の顔に何か付いてるの?」

女性はレナードに声を掛けた。しかもその声はプレシアの声とそっくりだった。

レナード「あの〜貴方プレシアさんですか?」

プレシア「そうよ。何当たり前の事を聞いているの?」

レナード「じゃ〜コレ見て下さい」

レナードは何処から出したか分からないが、手鏡をプレシアに渡す。

プレシア「!?!」

プレシアは鏡に写った自分の姿を見て目を丸くした。

そして自分の肌を触ったりした後、

プレシア「ええええええええええ！？！？何で若返ってるのとおお
おおおおお！？！？」

ありえないとばかりに大声を上げて叫ぶ。

レナード「アルハザード……貴方、病気を治したんじゃないのか？」

アルハザード「ええ、病気を治すついでにサービスで若返らせました」

と、アルハザードは言った。

プレシアは、かなり嬉しそうな顔をしていた。

女性にとって夢である若返りが出来たからである。

プレシア「それにしても……信じられないわ。不治の病が治るなんて……!」

レナード「俺は若返った事も十分凄いなと思うがな」

プレシアは改めて自分の体の調子を確認して体になんの異常も感じられない事に驚いていた。

アルハザード「そちらの世界では、不治の病かもしれませんが、私にとってはそうではありません。あつついでに病気で弱ってた体を回復させて、健康状態も良好にしました。それなら別の病気にかかる心配はないでしょう。あ、後さっきも言ったようにサービスで若返らせときました」

と、軽い口調でアルハザードが説明をした。

プレシアは、まだ信じられないと言った顔をして、自分の体を眺めている。

レナード「やるじゃないかアルハザード」

アルハザード「いやゝそれほどでも」

レナードの言葉にアルハザードは照れた。

その時、プレシアはある事をアルハザードに聞く事にした。

プレシア「あの．．．アルハザードさん」

アルハザード「あつ、呼び捨てで結構ですよ」

プレシア「じゃあ．．．アルハザード．．．．．貴方に聞きたい事があるの」

アルハザード「何ですか？」

そこでプレシアは一旦、言葉を止めて目を閉じた。深呼吸をして、ゆっくりと目を開ける。

プレシア「貴方．．．死者の蘇生は可能かしら？」

険しい表情でプレシアは尋ねた。

隣に居るレナードは少し驚いたが、口は挟まなかった。

アルハザード「死者の蘇生．．．ですか」

ポツリとアルハザードが呟いた。

プレシアは、手に汗を握りながら答えを待った。

そして、アルハザードはプレシアの問いに答える。

アルハザード「申し訳ありませんが、いくら私の力でも死者の蘇生は出来ません」

プレシアは、アルハザードの答えを聞いて目を閉じた。

プレシア「そうよね．．．無理よね．．．．．そんな方法があるはず無いわね．．．．．」

顔を俯いて呟いた。

アルハザード「．．．すみません」

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。

プレシアは顔を上げた。

プレシア「いいえ。もう諦めていたから」

プレシアは悲しい表情を浮かべた。

すると、レナードがプレシアの所まで来て、真剣な表情をする。

レナード「プレシアさん．．．一つだけ．．．．．アリシアを
生き返る方法がある」

プレシア「え？」

プレシアはポカンとする。

レナード「俺の知っている魔法で．．．．．アリシアを生き返
らせる！」

銀八先生「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八先生「はい。んじゃまずはこの人ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『

黒龍「さすが白騎士！！圧倒的な強さですね！」

銀時「最後の最後に出て来た奴等あっけなかったな」

ソラ「白騎士が強すぎたんだろ」

神楽「私も変身したいアル！」

黒龍「仮面ライダーで我慢してください」

銀時「いや、仮面ライダーもなれないからね？」

黒龍「それにしても、これからレナードとプレシアがどうなるのか気になりますね」

銀時「それにクロノの奴も白騎士の存在しっちまったしな。どう言う対応をするんだろうな」

黒龍「ロストロギア不法所持とかで逮捕か拘束しそうですね」

銀時「ま、大体そんなもんじゃね？」

黒龍「とりあえず、気になる事がまだある所です。では質問といきましよう」

1. フェイトに質問。レナードと夫婦になって、更にはベッドインした時の事を想像してみてください。

2・フェイトとなのはとレナードに質問。うちの小説に出て来たナシをどう思いますか？戦って勝てると思いますか？

3. フェイトとレナードへ。なんでもクロノと銀八先生が、フェイトの料理は死ぬほど不味いと言ってますが、どうしますか？

銀時「おいしいiiiiiiii!最後になんて質問してんだよ!」

黒龍「まあ良いじゃないですか。では、次回も楽しみにしています」

『黒龍ううううううう！！！！てめえは俺を殺すきかあああああああ！！！！！！』

フェイト「私とレナードが夫婦……そして、ベッドイン……」

フェイトが夫婦とベッドインを想像した瞬間・・・

クロノ「これには．．．その．．．理由が．．．」

フェイト「大丈夫。二人には私の料理を食べれば分かるから」

クロノ・銀八先生「いやあああああああああああああああ
あ！！！！！」

クロノと銀八先生は悲鳴を上げながらフェイトに連れて行かれた。

白騎士君「．．．．．『黒龍』さん廊下に立って下さい」

レナード「銀八先生が不在な為、俺がやります。続いてペンネーム『ねぎとろどん』さんからの質問。」

ソード「はい、読ませてもらいました！つつか、レナードオーーーーーッ！！！！」

アリサ「落ちたわね．．．．．でも、次回のタイトルから察すると、あのまま『アルハザード』に行くのかしら？」

すずか「レナード君、プレシアさん、アリシアちゃん．．．．．どうなるのかな？」

ソード「それはこれから期待だな！それじゃあ、白騎士君に質問！『レナードの仲間は登場しますが、白騎士以外のシンナイトは登場しますか？また、『黒騎士』と『太陽王』はどうなりますか？』だ！」

アリサ「確かに気になるわね．．．．．」

ソード「それじゃあ白騎士君！次回も楽しみに待ってるぜ！」

すずか「がんばってくださいね♪」

三人「．．．ではでは、また次回」．．．

『作者、白騎士以外のシンナイトは出るのか？』

白騎士君「もちろん。黒騎士はA／S編に登場します。太陽王はS
trickers編に出ます」

レナード「そうゆう事で、『ねぎとろどん』さん廊下に立って下さ
い」

第二十二話 アルハザード（後書き）

レナード「俺の魔法で本当に生き返るのか？」

白騎士君「大丈夫！何回も蘇生魔法を使っているだろ？」

銀八先生「そりゃあ、ゲーム話だろ」

???「次回、『白騎士リリカルなのは』第二十三話「奇跡」次回は私がでるよ。テイクオフ」

レナード・銀八先生「誰っ!？」

第二十三話 奇跡（前書き）

白騎士君「今回、オリジナルキャラクターが出ます」

銀八先生「えっ？マジで？」

レナード「『白騎士リリカルなのは』始まります」

第二十三話 奇跡

プレシア「レナード．．．．．それ．．．本当なの？」

プレシアの声に、レナードは頷く。

レナード「俺の知っている蘇生魔法、『リザレクション？』でアリシアを蘇らせる！」

レナードはハッキリと言った。

プレシアは信じられなかった。

蘇生魔法。それは人を蘇らせる魔法。その蘇生魔法が、レナードが持っている。

アルハザードはレナードを見て、

アルハザード（まさか彼は．．．）

何か考え事をしていた。

レナード「でもプレシアさん。あまり信用しないで下さい。蘇生魔法が成功する確率は限りなく少ないんです」

そう、例え蘇生魔法を習得しても成功しなければ意味はない。レナードの仲間は一度も死ななかったから使う事はなかったが、今回使うのが初めてだ。

プレシアはある事を聞いた。

プレシア「レナード．．．．．蘇生魔法に成功する．
．．．確率は？」

プレシアの問いを聞いた途端、レナードは深刻な顔をして答えた。

レナード「成功する確率は．．．．．
1%」

プレシア「！？」

プレシアは驚愕した。1%、それは限りなく奇跡が起きない限り成功しない確率。でも、プレシアは信じた自分を変えてくれたレナードなら．．．．．きっと。

レナード「アルハザード。少し頼めるか？」

アルハザード「ん？何ですか？」

レナード「アリシアに服を着せさせてくれないか？流石に裸のまま蘇生させる訳にいかないし」

流石にそのまま蘇生させるのは悪い特にレナード自体も。

アルハザード「分かりました」

アルハザードの声と同時に、アリシアの体が入ったケースが光りだした。すると、ケースが消えて、アリシアに服が着せられていた。

そして、レナードはアリシアに近づき、手を前に出して、

レナード「リザレクション?!?!」

レナードの声と同時に、アリシアの体が光輝いた。

プレシアとアルハザードは静かにレナードを見守った。

数分後・・・

光が徐々に収まっていく。

すると・・・

アリシア「・・・・・・ん」

アリシアはゆっくりと瞼を開いていく。

プレシアはそれを見て涙を流した。

そして、アリシアはプレシアの方を見て、

アリシア「お母さん？」

そう言った。

プレシア「アリシア！」

プレシアはアリシアに駆け寄り抱き付く。

アリシア「どうしたのお母さん？涙が出てるよ？」

プレシア「いいえ。少し悪い夢を見ていただけよ」

プレシアは抱き付いた後、レナードの方を見る。

プレシア「レナード．．．．有り難う」

レナード「気にするな」

アリシア「ねえお母さん。このおじさん誰？」

レナード「おじ！？」

レナードはおじさんと言われて目を丸くする。

プレシアは、手で口を抑えて、必死に笑みを堪えていた。

レナード「あのさ．．．．俺、まだ１８歳だから」

レナードはそう言う。

アリシア「御免なさい！私はアリシア・テストロッサ！」

レナード「俺はレナード」

二人は自己紹介をした。

アリシアはレナードをマジマジ見て．．．。

アリシア「よろしくね！レナ兄い！」

っと、言ってレナードに抱き付いた。

レナード「レ、レナ兄い！？」

アリシア「だめ？」

瞳をウルウルさせながら言うアリシア。

レナードは溜め息をした。

レナード「いいよ」

そう言う嬉しそうな顔をする。

どうやらまだ無邪気な部分が残っているらしい。

一方、プレシアはアルハザードと何か話し合っていた。

プレシア「出来るかしら？」

アルハザード「そうなんですか。もう1人娘さんが……」
レナードさん一度アリシアさんから離れて下さい」

レナード「え？ああ」

言われたとおりアリシアから離れた。

アルハザード「では！」

アリシアの所に魔法陣が展開される。

すると、アリシアはフェイトと同じくらいに成長していた。

アリシア「あれ？大きくなった！」

アリシアは喜んでいた。

アルハザード「プレシアさんが事情を説明してくれました。アリシアは姉なのに、妹より小さい、なので妹さんと同じぐらいにしました」

アルハザードがそう言う。

レナード「有り難う。アルハザード」

アルハザード「いえいえ。それとレナードさん、ちょっと頼みたい事があるんですが」

レナード「何だ？」

レナードは片眉を上げた。

アルハザード「貴方が持っているシンナイトのアーク、見せてくれませんか？」

レナード「！？」

レナードは驚いた。何でアルハザードがシンナイトの事を知ってい

るのか。そして、俺がシンナイトを持っている事に知っているのか。
アルハザード「何故知ってるんだって顔していますね。貴方の魔力
とは別な物がある事に気付いたのです」

レナード「じゃあ、何でお前はシンナイトの事を知ってるんだ！」

レナードは空間を睨んで叫んだ。

アルハザード「……………すみません。それはまだ話せません。時が来たら必ず話をします」

レナード「……………分かった」

そう言うレナードは白騎士のアークを出現させた。

アリシア「わあー！すごいー！」

アリシアが目を輝かせながら白騎士のアークを見る。

アルハザード「では」

そう言うアークはレナードから離れ、空中に佇んだ。

アルハザード「ふむふむ。なるほど、白騎士のアークですか……………」

と、ブツブツと言いながら、何か作業をしていた。

そして、数分後……………」

アルハザード「終わりました」

そう言うのと白騎士のアークが突如、光り輝いた。

光が止むと其処には、長髪で白く、青い瞳、胸はユウリ位の大きさで、そして年齢が18歳前後の女性が立っていた。

レナード「お、女!？」

レナードは驚いた。なんせ、アークが女性になったのだ。

すると、女性はレナードを見て、

???「マスター――――――！！」

レナードに飛びついてきたのだ。

レナード「のわあああああああああああ!?!?」

レナードは突然の事に対処出来ずそのまま吹っ飛んだ。

プレシアとアリシアは突然の出来事に目を点にする。

???「この姿でマスターに触るの何万年ぶりなんだろう!（スリスリ）」

レナード「き、君は一体?」

???「ああ!この姿で会うのは初めてですね」

と、女性はレナードから離れる。

ウィル「初めまして、私は白騎士の人格のウィゼル！ウィルって呼んでね！」

ウィルはウインクをして名を名乗った。

レナード「どう言う事だ？アルハザード」

アルハザード「白騎士のアークに付いていた。バグを排除させ、元通りに直したのです」

アルハザードが説明をした。

レナードは思った。やっぱり、シンナイトはまだまだ謎があるのかと。

ウィル「アルハザード、有り難う！これからよろしくね！マスター！」

と、ウィゼルはレナードに抱き付く。それを見たアリシアは、

アリシア「あーっ！ウィルだけズルい！私も！」

アリシアもレナードに抱き付いた。

プレシアはそれを見て、微笑んだ。

プレシア「レナード」

レナード「何だ？」

レナードはプレシアに声を掛けられ、返事をする。

プレシア「これからは、私とアリシア、フェイト、そしてアルフと生きていくわ」

レナード「そうか」

レナードは微笑む。

プレシアは言い終わるとまた口を開く。

プレシア「それじゃ元の世界へ帰りましょう」

レナード「プレシアさん」

プレシア「何かしら？」

プレシアは首を傾げた。

レナード「どうやって戻るんですか？」

プレシア「あ．．．」

そつだ。自分達は虚数空間に落ちて此処に来たのだ。一体どうやって戻る？また虚数空間に落ちるか？いや、そんな事をしたら今度はそ命はない。

アルハザード「ご心配なく。私が四人を元の世界へ送ります」

四人の足下に魔法陣が展開された。

レナード「悪いな。色々世話になった」

アルハザード「いえいえ。あつ、ただし一つお願いがあります」

レナード「お願い？」

四人は首を傾げた。

アルハザード「私の存在を外の世界に教えないで下さい。私の力を悪用しようとする者が、出て来るかもしれないので」

プレシア「ええ。分かったわ」

プレシアは頷いて答えた。

アルハザード「貴方達だったら、何時でも歓迎しますけどね。まあ何も無い所ですが」

ウィル「今度からお菓子とか用意してね」

レナード「あつ、それはいいな」

アルハザード「そうですね」

そんな話をしてる内に魔法陣の光が強くなる。

そろそろお別れだ。

ウィル「じゃあね！アルハザード！」

アルハザード「ええ。それじゃあれナードさん、プレシアさん、お幸せに」

プレシア「えっ！？！」

アルハザードの言葉に、頬を赤くした。

プレシア「ちよっ．．．ちよっと待ちなさい！私とレナードはそんなじゃ．．．．．！」

プレシアが言い終わらない内に、四人の姿はアルハザードから消えた。

「???」．．．．．「行ったのか」

と、突如、半透明の男性が現れた。

アルハザード「ええ。行きましたよ．．．．．ウィルドさん」

ウィルドと名乗る男性はレナード達が立っていた所を見た。

ウィルド「あの青年が．．．．．白騎士の契約者か．．．」

アルハザード「そうです。何となく貴方と似ていますね」

ウィルド「フッ、そうか？」

そんな話をしている二人。

ワイルド（青年よ．．．．．これから先、過酷な運命がお前に襲い掛かるかもしれん。だが、俺はお前がどんな運命に負けない事を．．．．．信じているぞ）

そして、ワイルドは姿を消した。

銀八先生「教えて！」

生徒全員「レナード先生！！」

銀八先生「今回のアシスタントは」

ウィル「どうも！白騎士の人格のウィゼルです！」

銀八先生「まずはこの人、ペンネーム『黒龍』さんからの質問。」

黒龍「アルハザードの登場ですか」

銀時「つつか、結構サービス良いな」

ソラ「そうだな」

黒龍「そして、レナードがアリシアを蘇らすと言いましたが、どなるのか楽しみです」

銀時「まあ、白騎士にあつたしな復活魔法」

黒龍「ええ。死者蘇らすとか最早チートですよね」

銀時「まあ、RPGだと死者蘇らす魔法なんてザラだしな」

黒龍「では、質問しましょう」

1・フェイトに質問。レナードスルなら今すぐ良いですか？

2・フェイトへ。なんとなのはとレナードが結婚したと言う噂があるそうですが、どうしますか？

3・フェイトとレナードへ。なんと今度はユーノとクロノと銀八先

生がフェイトの料理は口にできないくらいの激マズ極悪料理と褒めていたそうです。どうしますか？

銀時「いいいいいいいい！！！！何とんでもねえ質問してんだよ！！」

黒龍「では、次回も楽しみにしています」

銀時「無視すんなああああああ！！！！」

『黒龍・・・覚えてろよ！！』

ウィル「フェイト」答えて！」

フェイト「勿論、今すぐ／＼」

銀八先生「はつきり言っちゃたよこの子！？」

フェイト「そして、なのはああああああああああ！！！！！！よくもレナードをおおおおおおお！！！！（怒）」

なのは「にゃああああああああああああ！！！！？！？誤解だよおおおおおおおお！！！！（涙）」

なのはは涙目になりながら逃げる。フェイトはバルディッシュを怒りに任して振り回して、なのはを追う。

銀八先生「まあ、生きてくれなのは」

ウィル「ねえ。マスター、フェイトの料理って不味いの？」

レナード「そんな事はない。おいしいぞ」

ウィル「んじゃ、一口……」

銀八先生「やめろ！！ウィル！それ食つたら……」

パクッ！

ウィル「おいしい♪」

[illegible]

字が間違える程、銀八先生は驚いた。

どうやら、ウィルも味覚音痴らしい。

「ウィル、三人とも、フェイトちゃんの料理は美味しいよ！さあさあ！」

銀八先生・クロノ・ユーノ「「や、止めるおおおおおお
おおおおおおお!!!!!!」」

ウィルは三人にフェイトの料理を食べさせた後、三人は気絶した。

ウィル「あれ？何で気絶しちゃたの？」

レナード「さあ？」

白騎士君「……………」
「………」
『黒龍』さん一生、廊下に立つて下さい！」

第二十三話 奇跡（後書き）

白騎士君「今回は、オリジナルキャラクター。ウィルを紹介します」

ウィゼル（通称「ウィル」）

年齢 18歳

髪 長くて白い

瞳 青

胸 白騎士物語のユウリと同じ位

好きな物 マスター フェイトの料理

嫌いな物 マスターを傷つける者

魔力 SSS+

説明 アルハザードによって直った本来の姿。白騎士のアークに戻る事も出来る。やんちゃな性格な感じで、そのままでも、今持つている白騎士の武器が有れば召喚して戦う事が出来る。彼女も味覚音痴らしい。何故彼女がこのような能力があるのか、物語を進めて行けば分かる。

白騎士君「こんな感じですかね」

銀八先生「つうか、大丈夫か？オリキャラ出して？」

白騎士君「問題ナッシング！」

レナード「今回は、ウィル頼む」

ウィル「うん！次回、『白騎士リリカルなのは』第二十四話「異議がある人は必ずいる」テイクオフ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9529q/>

白騎士リリカルなのは

2012年1月7日21時52分発行